

国 際 セ ン タ ー 年 報

第 1 7 号

平成 22(2010)年度

大阪教育大学国際センター

目 次

第一部 寄 稿

巻頭言	向 井 康 比 己	1
	(国際センター長)	
レジスタンスの町 - (3)16 オのレジスタンス	住 谷 裕 文	2
	(教養学科 欧米言語文化講座)	
地域日本語教育の現状と課題	長 谷 川 ユ リ	11
	(国際センター 国際教育部門)	
国際化とダブル・ディグリー制度		
- 台湾を中心に	城 地 茂	15
	(国際センター 国際事業部門)	
ドイツの学力テストをめぐる動向について		
- 2010 年ベルリン訪問調査から -	中 山 あ お い	21
	(国際センター 国際教育部門)	
ソウル教育大学グローバルインターンシップ受入れ報告		
- 実習校担当教員のアンケートをもとに	若 生 正 和	25
	(国際センター 国際教育部門)	

第二部 学生便り

留学生の声

第二の故郷へ	呂 航	41
	(教養学科 情報科学専攻 中国)	
ひとふみひとしるし 一歩一印	LEE Chen Han	43
	(教養学科 情報科学専攻 マレーシア)	
日本、私を成長させた国	姜 嵩 岩	46
	(教養学科 自然研究専攻 中国)	
言語の多様性で世界を豊かに	石 沂 涵	48
	(大学院 教育学研究科 国際文化研究 台湾)	
私の宿舍生活	郭 華	50
	(大学院 教育学研究科 国際文化研究 中国)	
雑談	朴 鍾 鎮	52
	(大学院 教育学研究科 芸術文化専攻 韓国)	
一年間の思い出	劉 羽 潔	54
	(交換留学生 中国)	

日本人学生の声

自分の目で見た中国	金 剛 岳 大.....	56
(教養学科 文化研究専攻 社会文化コース)		
タイ留学体験記	松 浦 啓.....	58
(小学校教員養成 5 年課程)		
留学体験談	加 賀 奈 穂 子.....	63
(大学院教育学研究科 英語教育専攻)		
のんびり、ゆったり、自立の国 -スウェーデン留学体験記-	角 田 萌.....	66
(教養学科 芸術専攻 音楽コース)		
ドイツで学んだ多文化	小 野 梓.....	76
(教養学科 文化研究専攻 欧米言語文化コース)		

第三部 国際センター記録

平成 22 年度 国際教育部門活動報告	79
平成 22 年度 国際事業部門活動報告	88
平成 22 年度 国際センター行事	99

付 記

国際センター運営委員会名簿	123
留学生宿舍運営会議名簿	123
国際交流委員会委員名簿	124
留学生推薦選考会議名簿	124
留学生推薦選考会議語学評価委員名簿	125
私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿	125
国際交流委員会ダブル・ディグリー検討専門委員会委員名簿	125
編集後記	126

巻頭言

向 井 康 比 己

国際センター長

2010 年は、私が国際センターの仕事をお引き受けして 3 年目を迎えるとともに法人化 2 期目の初年度でもありました。国際センターでは、留学生や国際交流に関する本来の業務に加えて多くの行事・プログラムを実施しています。これらをスムーズに行うことができたのは、国際センターの教職員はもとより国際センター運営委員および国際交流委員の皆様、各事業に協力していただいている先生方のおかげであると感謝申し上げます。現在の日本の学生は内向き思考であるといわれますが、社会も大学も内向きです。グローバル化の時代にあって、内向きの社会や大学は発展性がないことは明らかなです。このことを克服するためには大学のより一層の国際化が必要で、それには留学生が大きな役割を果たしてくれます。

本年度は、大阪教育大学と柏原市との共催による「第 5 回かしわら国際交流フェスティバル」が柏原キャンパスに会場を移して、神霜祭と同日に行われました。本学留学生と市民が交流することによって、地域の人たちの国際理解や異文化体験に貢献しました。国際センターの新しい取り組みとして、メキシコの教育関係者の研修、JICA「アフリカ英語圏サブサハラ理科授業評価改善」研修等を行いました。留学生受入だけではなく、本学学生の海外派遣ももっと積極的に行わなければなりません。現在、派遣学生数は年間 20 数名で伸び悩んでいます。国際的視野をもつ教師や社会人の育成のためには、本学学生に対して卒業までに海外経験をさせることを真剣に考えてもよいのではないのでしょうか。就職や大学院進学においても英語の能力が試されます。本学学生の英語力を高めるためには、教員の英語による講義も充実させる必要があり、各専攻において英語のみで行う講義が 1 つぐらいあってもよいのではないのでしょうか。現在の教研究生や日研究生向けの授業を日本人の学生にも受講できるように単位化を検討すべきであると考えます。国際共同研究の実施や国際シンポジウム開催、海外からの研究者や研修生の受け入れなどに対してもセンターとして積極的に支援していききたいと思います。

本学は現在 12 カ国・地域の 32 機関と交流協定を結んでいます。今後、アジアではインドおよびベトナム、さらに中南米のスペイン語圏、北米などの英語圏、ヨーロッパの各地域の大学と国際交流を広げていきたいと考えています。今後ますます国際交流を深め、その質を高めるために、より一層センターの構成員が知恵を出し合うことに加え、全学教職員の一丸となったご協力が必要です。ご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

レジスタンスの町(3)—16歳のレジスタンス

住谷 裕文

教養学科 欧米言語文化講座

レジスタンスの真実—マルク・ブロックと共和国—リュウ氏のレジスタンス

1

フランスのレジスタンスについては、かつてレジスタンス国民会議の全国代表であった、アルベール・シャンボンⁱの著書が1987年に刊行され、それまで誤解されてきた、もしくは曖昧であった、さまざまな事実があきらかになった。その中で彼は、レジスタンスの参加者を《約五十万》と見積もり、そこには《右も左もな》く《どの政党も党としてはレジスタンスに参加しなかった。運動参加はつねに、もっぱら個人の行為であった》と述べている。また《今日、レジスタンスの話など聞いたことがない、というフランス人の言い分にはあまり説得力がな》く、《レジスタンスにはなすべきことが無数にあったのだから、職業や仕事が何であれ、いつか必ず親戚、仲間、友人、知人が近づいて、慎重な言い回しながらはっきりと地下活動をしていると告げ、仲間に入らないかと促したはず》であり、《おまけに、占領軍当局が町や村の通りに張り出した掲示、テロリストと決めつけられ銃殺された抵抗者の名前をしめす赤と黒の不気味な掲示は、むろん、それだけで占領軍に抵抗する者のいることを証明していた》と記している。

そして、彼によれば、レジスタンスは《政治・軍事・精神の面》で必要だったのであり、まず政治面では、《レジスタンス抜きでは、「戦うフランス」が、ロンドンにいるドゴール將軍の口をとおして、フランスを真の同盟国として連合国に認めさせることはできなかったらう》し、《フランスのさまざまな行政機関のあらゆるレベルで工作し、ドイツ軍が出すすべての要求、指令、決定に対する組織的なサボタージュを容易にして、遂にフランスはアメリカの意図した連合軍による軍政を免れ》しめた。

また、軍事面では《連合軍の勝利に大いに貢献し、他方では、レジスタンスの果たした大きな役割が、わが国の自由世界への復帰を決定的にした》。その多様な活動の中でも、イギリスおよび連合軍へ重要情報を提供するための諜報活動、そして敵軍の施設・輸送機関の攻撃、レジスタンスに損害を及ぼし得る対独協力者・敵軍兵士への襲撃、さらにゲリラ戦が重要だった。さらに占領中の自由地区と占領地区間の、またフランス・スペイン国境での逃走ルートの確保も大きな意味を持っていた。

さらに、シャンボンは、レジスタンスの責務の中に《人間の尊厳の最後の砦である希望を維持すること》があったと述べている。これをレジスタンスによる地下新聞が担った。

この本にはこれ以外、共産党のレジスタンス神話を、彼らは《占領軍との戦いを二年遅れで始め》、その占領下の姿勢は《愛国的よりは政治的》であったと批判し、ドゴールについても歴史的なその役割を十分評価しながらも、その人間性の欠落を指摘している。また、ヴィシー政府の存在については、その経済財政の分野における《議論の余地なき巧妙さ》をドゴール自身も認めていたと述べ、ドイツにおける強制労働やユダヤ人の強制収容については、もしドイツの管理下に置かれたとした場合よりもはるかに制御がかけられていたことを指摘している。また、当時のローマ法王の姿勢に関しても、《ピオ 12 世はなによりもまず、第三帝国に対して強い敵意を少しでも見せようものなら、迫害が緩和されるどころか、ユダヤ人の置かれた状況を悪化させる恐れがあると確信していた》と一定の理解を示している。

しかしながら、この著作でもっとも興味を引くのは、《戦うフランス》と国内レジスタンスの対立である。《戦うフランス》は、1940 年 6 月ドゴール将軍より、連合軍側に立ち戦争を継続するため創設され、当初《自由フランス》と呼ばれていた組織であるが、1942 年 7 月このように改称された。ドゴールにたいし当時のアメリカ大統領ルーズベルトが、敵意をむき出しにしていたのは有名な話であるが、その理由をシャンボンが、《憲法上の合法性はヴィシーにあってロンドンにはなかった》、そしてまたアメリカ側から高い評価を受け、つねにアメリカの交渉相手をつとめたフランスの名士たちが《連合国の立場に同調しながらもドゴールへの協力を拒否していること》がワシントンの不信につながっていたと述べている。この問題に関しては、できれば次回の論考でジャン・ムーランの活動にからめて分析したい。

さて、アルベール・シャンボンの『仏レジスタンスの真実』は、以上のようにきわめて興味深い指摘を随所で行い、あらたなレジスタンス像を提起しているが、その戦いの歴史的意義—フランス革命以降の近代史の中での位置づけということになると、まったくそれに触れていない。二次大戦下のフランスのレジスタンスが大きな意味を持つのは、ひとつはそこで問われたものが、他ならぬ 1789 年の革命によって構築された共和制—その後いくたの曲折をへて、定着した、この政体の存否であったことにある。このことを明確に示しているのが、前回扱ったマルク・ブロックの著作であった。フランス革命との結びつきで言えば、この第二次大戦の体験は、もっとも最近の、そしてもっとも生々しい試練であった。

しかも、フランスにおけるこの試練が、とくに注目されるふたつ目の理由は、すでにこの国がドレフュス事件を経験していたことにある。否、このドレフュス事件について言えば、これは受動的な経験などではなく、フランスは、このユダヤ人将校スパイ容疑事件を、むしろ、革命の理念を一個人の自由と権利において検証する、試金石としたのである。そして、その結果勝ち取られたものは、約三十年後、さらに大きな試練に出くわさなければならなかった。その検証は、最近のモーリス・パボン裁判までつづいた。—そして、この点においても、マルク・ブロックは、ドレフュスが受動的に巻き込まれた事件を、ナチに

よるユダヤ人狩りの嵐の中で、さらに根底から、つまり自らの自由の問題として意識的に選び取り、正面から立ち向かったのである。

2

ところで、今回はわたしが知ることを得たレジスタン(レジスタンス活動家)の紹介が眼目であるが、フランス近代史のなかにその意味を据えるために、まずマルク・ブロックに再度言及し、前回の論考を補足しながら、彼の第二次大戦観とレジスタンス、そしてそれらと彼の共和国の見方をまとめておきたい。

「レジスタンスの町(2)」では、歴史家マルク・ブロックの生涯をあつかった。彼は 1940 年の七月から九月にかけ、それまでの十か月に及ぶベルギー戦を中心とした第二次世界大戦緒戦の思い出を、原稿にまとめた。この本を、ブロックは、フランスに自由が戻り、その「歴史の中でもっともおそろしい崩壊」の理由を検証できるようになるまで、秘匿するつもりだった。それが、1944 年ブロックが亡くなり、翌年フランスが解放されたあと、1946 年、『奇妙な敗北』と題されて刊行された。今回は、とくにこの著作に一章をあてて詳説したが、アメリカの歴史研究者キャロル・フィンクも『マルク・ブロック—歴史の中の生涯』(河原温訳 平凡社)の中で、フランス軍の指揮官たちの「高齢と小心」が、歴史を「読み誤らせ」たのだ、と述べ、ブロックの著作から次の箇所を引用している。《世界は、新たなものを愛する人々のものだ。それゆえ、わが司令部は、この新たなものに遭遇すると、それに備えることができず、敗戦を被ってしまったばかりか、ちょうど太り過ぎて動きの鈍くなったボクサーが予期せぬ最初の一撃をくらって狼狽するように、敗戦を受け入れたのである。》引用の切り取りは、さらにこう続いている。《われわれは、二つの道のひとつを選ばなければならない。[ドイツ人のように]国民を、いくたりかの指導者の磁力にたいして盲目的に震動する鍵盤たらしめるか、[...]それとも、自分たちが選出した代表者たちの自覚的な協力者たりうるよう人々を教育するか。われわれの文明の現段階においては、このディレンマにたいする中途半端な解答はもはや認められない。[...]大衆はもはや服従しない。彼らが従うのは、不安におとされたためか、事情を知っているためか、そのどちらかだ。》

ところで、この全体主義か民主主義か、独裁か共和制かの選択にかかわって、ブロックは、コンドルセから、つぎのような引用を行っている。《フランス憲法であれ、また人権宣言でさえも、われわれ市民のいかなる階級に対しても、崇拜や信仰を強要するような、天から授けられた法典として、提示されたのではあるまい。》つまり、市民の自由な選択こそ、憲法も、人権宣言も生み出したのであり、その自由こそ民主主義と共和制を支える源である、こうコンドルセは述べているので、ブロックが『私はなぜ共和主義者となったか』という文章の中で、《権力形態は市民の立場から熟考された選択の対象たりうる。

コミュニューデ
共同体は人間におしつけられるものではない》と書き、また冒頭で《わたしがなぜ共和主

義者であるかを尋ねることは、それ自体すでに共和主義的なものではあるまいか》と言っているのは、『人間精神進歩史』の著者による同じ思想の、別の表現に他ならない。

しかし、たとえばイギリス国民のように、《世襲君主制のいわおの上に、安定した政治制度の建設された正統君主政》を採用することは不可能なのだろうか。この自ら提起した問題にたいして、ブロックは《1943年のフランスでは》《共和形態以外のものは成立しえない》と断言する。なぜなら《改造しえない過去》を、フランスの歴史は表象しているのだから。ブロックの議論は明快で、フランスの革命後の歴史を通覧するにあたって、王権については対立する二つの概念があったと述べている。すなわちひとつは《国王を一般的利益の奉仕者》と捉えるもので、《国王は万人に奉仕するがゆえに、万人にぬきんでた位置をしめ、したがって法に対する一切の例外、一切の特権を消失せしめる任務を帯びている》。これに対立するのは《国王はすべての既得権の守護者、社会組織といろいろな機能を有する無数の組織体の要石であり、選挙をまぬかれて、ただ君臨することによって国家内部の身分制の原理を強固にする権力、つまり特権の保護者そのもの》であるとする見方である。

革命後、フランスの王権は、《人民に対して特権身分に味方し、この意図で外国に求援するのをためらわなかった》。《王権か人民主権か》の議論は、《ルイ十六世の首を斬った断頭台の刃》によって断を下された。これ以降《君主制復活はフランスの罪責》を宣言するものとなり、《人民主権の承認》は、《国王の反逆に加える罰の正義をも承認しなければ不可能となった》。ブロックは言葉にしてはいないが、イギリスの場合については、《国王を一般的利益の奉仕者》と捉える道を歩んできたと見なすわけである。これに対しフランスは、1814年と1815年以来の危機、1870年の敗戦(普仏戦争)、1936年の恐怖の際に、《君主制的思想》が外国への呼びかけを行い、共和制の危機がおとずれた。それはしかし《あらゆる制度とひとしく、その党派の制度で》あり、《フランスの敵の勝利しかもとめず、同胞と区別されようとし、同胞に支配力をふるおうとする、フランス人の制度》である。《この支配が承認されないのを知るや、けっして人民のためではなく、人民を強制し、服属させるために、反人民的立場によって支配権の確立を考えるのみである》。

これに対し共和制はどうか。ブロックは『私はなぜ共和主義者となったか』の末尾で、こう結論付けている。《共和制は人民の制度である。人民は自力をもって解放を勝ちとり、全人民の共働によって、たえず警戒を怠らずにいなければ、自由を守ることはできない。事実がこれを証明している。外国に対する国家独立、国内的自由は固く結合して分離することはできず、両者は全く同一の運動によって確立される。人民にいかなる代償を払っても一人の主張を与えようとする者どもは、やがて主張を外国にもとめることを容認するであろう。人民主権、すなわち共和国なくして人民の自由はないのだ》。

こうしてわたしどもは、ブロックのこの一篇の文章をもって、1939年から始まった第二次世界大戦における、フランスのレジスタンスの歴史的核を知ることができるのである。

3

さて、このように把握しうるレジスタンスを、渦中の人々はどのように生きたのであろうか。地域・年齢・職業の差異を超えて行われた運動の真相は、なお今後も明らかにされてゆく調査課題だろうが、わたしはたまたまあるリヨン出身の老人から、かつてのその体験について、覚書をもらうことができた。それは長年教会や修道院の修復の仕事にたずさわってきた人で、その仕事について話を聞いていたとき、話題が戦争におよび、彼の青春の一時期について知ることができた。あるいは、すでにそのときまでに、彼がレジスタンスに参加していたことを、わたしは人づてに聞いていたのかもしれないが、いずれにしろ、その彼の、十六歳の少年ⁱⁱのときの出来事であることを知って、わたしは驚いた。

というのは、そのおなじ十六歳のとき、日本でも「祖国のために」殉じようと、予科練に志願した樺太の中学生がいたからだ。しかもそれは、その少年ばかりではなかった。山陰の米子の中学校では、生徒会で全員一致で予科練に志願したのである。それらの中学生もおそらくは十五六歳の少年がほとんどだった。そして、こちらの十六歳は、いわゆる神風特別攻撃隊と呼ばれる、敵艦への体当たり攻撃を目的とした部隊に、特別編成されることになっていたのである。上に述べた「樺太の中学生」とは、わたしの父のことである。—わたしは文明が異なれば、同じ十六歳がどれほど違った青春になりうるか、一閃のもとに見るように思った。このレジスタンスの手記を読まなければ、わたしは父の青春を忘却の底に放置していたかもしれない。

*

1939/1940 年から 1944 年のリヨン解放までの、わが生涯の出来事

ジャン ルイ・リュウ

ドイツ軍がリヨンに入城したのは、わたしが十六歳のときでした。わたしは、ドイツ軍到着の前日、捕縛される前に逃げることに決心しました。対独協力拒否者として、同じ地区に住む明らかに「ゲシュタポの手先ども」の連中から、マークされているのを知っていたからです。

そこで、わたしは、何人かの友人、それに従兄弟ふたりと連れだって、自転車で出発しました。不安におののく両親に、大急ぎで別れを告げました。三百キロの遠距離を、あちこち間道を利用し(安全第一にたいへんな回り道をし)、四六時中恐怖におびえながら、野宿をかさねるという、三日にわたる艱難の旅の後、ついにアルデーシュ県山中の、両親の生まれ故郷である村ドルナに着きました。ここをわたしは隠れがにしたのです。

最初のうちは、親せきの家に身を寄せ、潜んでいました。食事は年老いた叔母のところであてがってもらい、二か月留まりました。しかし無為の生活がたまらなくなり出したのです。ちょうどリヨンが「非武装都市」として宣言されたことを知り、これからは勿論、用心しなければなりません、帰宅もできることが分かりました。そこでまた戻ることに

し、一晩中自転車をこぎ、ある朝、両親に再会したのです。両親は嬉しそうでしたが、やはりわたしの身を案じていました。わたしはほとんど外出せず、あくまで慎重にしていました。

じっさい、それから数日経つと、占領軍は戸籍簿を調べ上げ、わたし宛てに当局から呼出し状が届きました。わたしは(対独協力)強制労働 S.T.O.に駆り出されることになり、わなにはめられたのでした。何が起ころうと、ドイツにはけっして行かないつもりでした。呼出しには疑われないよう応じて、なんとしてでも脱出する覚悟でした。

わたしは、あるフランス人医師と三人のドイツ人医師の、診断を受けに行かされました。すぐ仮病をつかい、このフランス人医師が目をつぶってくれ、命拾いしたのです。事実この医師は即刻、他のドイツ人医師にたいし、この呼出し状は納得できぬもので、わたしは危篤状態で、重病であり、容態は深刻である...と言明し、わたしの忌避理由を弁護してくれました。彼らは半信半疑の様子で、わたしに再度診察を受けさせようとししました。そのとき、ひとりの将校がやって来て、書類を出せと言ったのです。フランス人医師は、このわずかの隙に、わたしに合図し、「早くここを出ろ」と言い、無造作にカルテを取り上げると、わたしの氏名の前に「重病、再診の要あり」と書きつけました。わたしはすばやく服を手にすると、大慌てで迷路のような廊下に姿をくらまし、家に戻りました。

このときから、わたしは逃亡中の「対独協力拒否者」の烙印を捺され、以来つねに警戒をおこたらず、用心し、身辺を注意しましたが、ゲシュタポが両親のもとに、わたしの消息を尋ねに二度来たときは、身を隠さねばなりませんでした。両親は、むろん、何も知らない、つっぱねました。というのも、それは長いこと、わたしとは会っていないのですから...。しかし、ある日、用心をおこたったために、間一髪ということがありました...。ある夏の午後、男がふたりやって来たのです。「ドイツのゲシュタポです」と、おびえる両親に言いました。両親は驚いたふりをしましたが、そのときわたしは、仕事場に通じるドアの蔭にいました。しかも、そのドアは同じ踊り場にあったのです。仕切り壁に寄せ、石炭の貯蔵に使う大きな箱が置いてありました。わたしは事態のただならぬのを察し、大慌てで蓋をあけ、その中に猫のように敏捷に身を滑り込ませ、体の上に石炭の塊を載せました。そして、細心の注意をし、音のしないよう、蓋を閉めました。すんでのところでした。というのは、荒々しくドアが開けられ、この二人の男が仕事場に踏み込んで来たのです。そこで彼らは、たっぷり時間をかけ、部屋中探しまわりました。足音と声が聞こえましたが、ふたりとも、わたしが息をひそめ隠れているこの大箱には、目もくれようとはしなかったのです。それから、ひとりが「しまった。ひとの目をかすめて、よそに潜んでいるにちがいない」と言って出て行きました。ふたたびドアの閉まる音がしましたが、わたしは身動きできませんでした。父がこの隠れ処に救出に来たのは、それからずいぶん時間が経ってからでした。両親の言によれば、これまでそんな背筋の凍りつくような思いは、したことがなかったのです。

しかし、わたしはただちに決断しなければなりませんでした。というのは、自分が監視されているのを知り、日ごと気分が重く、ふさいできたからです。より安全な場所に隠れ処を移さなければと思っていた矢先、僥倖に見舞われました。昔、両親がご家族ともどもお世話したことのある、その本人が、みずから職場の長を勤めているある工場内に、自分の方から「アジト」を提供しに来られたのです。このビロンの工場は、優先的カテゴリーに分類されており、そこでなら雇えるというのです。それにはもちろん、書類と証明書の偽造が必要でしたが、わたしがそれを入手できるよう、手配するというのです。非常の際であり、わたしはすぐこの申し出に便乗しました。こうして、新しい身分証明書を手に入れましたが、にせの労働許可証、通行許可証は完ぺきな偽造で、どこから見ても本物そっくりでした。そして、密告の危険にさらされてはいましたが、わたしははっきとした社会生活を再開したのです。しかし、このように用心に用心を重ねたにもかかわらず、わたしはまた足をすくわれるところでした。

その日、わたしはロベールという、同様の身の上にあった仲間と、一緒に工場にいました。この事件は、うららかな春の日の夕方、降って湧いたように起こり、しかもわたしたちには、致命的な結果にもなりえた出来事で、二人は、交互にと言っていいでしょうが、刺激されました。わたしたちはまずはじめ、ドイツの「ゲシュタポ」の車が数台来るのを目にしました。そして、この間に、武装した親独義勇部隊が、工場に至る通路を取り囲みました。工場から退出する連中は皆―というのも工場の退けどきで―身分証明証の提示を求められていました。厳しいチェックのために、大勢の労働者の流れは遅々たるものでした。

きっと密告もいくつかあったのです。というのは、何人か引き立て捕縛され、のちに知ったところでは、強制収容所に送られました。

たしかなのは、状況を察すると、仲間とわたしが、即刻、姿を消そうとしたことです。出口はことごとく監視され、脱出は他の手段によらなければなりませんでした。工場は三階建てでしたので、わたしたちは上に昇り、屋根からの逃亡を企てました。まず、屋根裏部屋に上り、いくども体を押し上げ、屋根下に達すると、外に出るため、何枚か瓦を取り除ける必要がありました。幸いにも、そこにロープが一本さがっており、おかげで軽業師さながら、屋根の上まで登ることができました。それから、ロープを手繰り寄せると、瓦を元の場所に置き、追手がまったく来られぬようにしました。上で私たちは屋根を隈なく見回りましたが、その高みからは、工場を包囲しようとする敵勢力のどんな動きも、逐一眺められました。

当時、残された使用可能な場所―わたしたちはそこを目指していましたが―はたった一か所で、そこへ急がねばなりませんでした。それは隣接のビルで、工場よりも高く、工場と反対の通りに面していました。多くの危険を冒しながら、何度もよじ登っては降り、ついに目当ての場所に着きました。それから、下方の屋根に飛び降り、正面の煙突をつたって滑り下りなければなりませんでしたが、さいわい、煙突はこちらの体重にももちこたえ、

とうとう格納庫の差しかけ屋根に辿り着きました。その屋根は小さな庭とそれに隣り合った中庭に面していました。わたしたちは大慌てで、低い仕切り柵を越え、ついに人気のない小さな通りに出ました。それから、二人は互いの「幸運」を祈り、二日後に工場で再会する約束をし、左右に別れ、姿を隠さねばなりませんでした。じっさい密告もあり得、その裏を搔くためには、二人の姿が工場で目にされる必要がありました。もし見かけられれば、二人は該当者ではないと思われたのです。で、結果はこうでした。二人は、もはや監視も、追跡もされていないと、すぐ判明したのです。こうして、わたしたちはもっと容易に、その工場で製造される、敵の発注品と製品(モーターの部品など)を、破壊できるようになりました。二人はしばしば行動を共にしましたが、いつもは単独で、つねにこっそり、いかなる党派にも属さず、何の徽章もつけず、ただ純粋な愛国心から、しかも用心に用心を重ねながら、行いました。

1944年のリヨン市解放により、わたしたちの苦労も終わりを告げました。そのとき、わたしは二十歳になったばかりでした。

＊

ここには共和制という語も、人民主権という言葉も出てこない。しかし、ブロックの文章をなぞってきたわたしたちには、リュウ氏が「いかなる党派にも属さず、何の徽章もつけず、ただ純粋な愛国心から」行った、そのレジスタンスの目指したものが、はっきりと見えるのである。

最後に、この手記を寄せてくれたリュウ氏について、一言触れておく必要があろう。彼はその後リヨンの美術学校の建築科に学び、ル・コルビジエが師と仰いだトニー・ガルニエに私淑し、彼の勧めで、すでに記したように石工として修復の仕事に長年たずさわった。その仕事の中でもっとも重要なのは、リヨン郊外ソーヌ川の中島イル・バルブにあるサン＝ランベール修道院の修復であった。この修道院はシャルルマーニュが建て、中にフランス最古の図書館があるので有名である。リュウ氏には、わたしは二度会うことができた。二度目に会ったとき、氏は会話の途中でときおり物思いにしずみ、それがわたしにはげげんに思われた。それから二三カ月ほどして亡くなった。わたしが一年間、リヨン第三大学に客員教授として招かれていた、2005年3月のことだった。

氏が亡くなってから、わたしはときおり、氏の修道院修復中の話を思い出す。朝の七時八時ころから作業をはじめ、気がついたら夜の九時ということがよくあった、というのである。石の粉じんの中で、ひたすら鑿をつかうリュウ氏のすがたが、幾本もの石柱のあいだにまざまざと浮かぶ。中世の石工の魂に添うように生きた生涯だった。その人の青春に、レジスタンスがあったことを考えると、フランスをこれほど深く生きたひともないのではないかと、胸が熱くなる。そしてフランス革命の渦中で、人間精神の進歩の歴史を描き、その中に革命の意義を記し、将来の展望をさし示したコンドルセのように、二度の世界大戦に参戦し、その二度目の戦いでは前線から戻ったあと、レジスタンスに加わり、その歴

史的意義を高らかに記したマルク・ブロックは、ほかならぬ中世史を専門とする歴史家であった。中世という時代はリュウ氏にとってもブロックにとっても、現代を離れた遠い世紀ではなく、この現在の危機に直接かかわる、生きた彼らの魂そのものであったのであろう。

ⁱ 邦題『仏レジスタンスの真実—神話・伝説・タブーの終り』として河出新書房社から福本啓二郎訳で、1997年刊行されている。

ⁱⁱ 前注掲出の翻訳に、史料 13 として、リュウ氏と同じ十六歳でレジスタンスに参加、1943 年逮捕され、銃殺されたアンリ・フェルテの最後の書簡が収められている。また同書 190 頁に「アンリ・フェルテは最年少の「解放の友」の一人で、最終の瞬間に親衛隊員がもぎ取らなければ、数珠を手に絶命したであろう抵抗者である」と記されている。そしてその家族二人が 37 年後自殺した。シャンボン は 1981.11.20. のあるフランスの新聞に載ったつぎのような記事を紹介している。「当時 16 歳のアンリ・フェルテ少年がブザンソンの城砦で銃殺されてからちょうど 37 年になるが、彼の母と弟はその記念日を選び、時とともに執拗につきまとう悲しみに打ちひしがれて焼身自殺をとげた」。

地域日本語教育の現状と課題

長谷川 ユリ

国際センター 国際教育部門

1. 地域における日本語学習

平成 21 年度の文化庁の調査によると、国内で日本語教育を行っている機関のうち、大学・短期大学・高等専門学校は合わせて 32.7%であるのに対し、一般の施設・団体は 67.3%にのぼる。一般の施設・団体のうち、30.4%は財団法人日本語教育振興協会が認定する日本語学校等であるが、それ以外は国際交流協会や任意団体、教育委員会や地方公共団体等が主催する「地域の日本語教室」である。日本国内で日本語教育を担う機関のうち3分の1以上が地域の日本語教室ということになる。同調査では、日本語教師数についてもまとめられているが、教師の総数 29,190 人のうち、ボランティアが 15,753 人と 54%を占めており、その多くは地域の日本語教育を支える人材であることがうかがえる。

このような実情に応えるために、文化庁では、1994 年度より 2008 年度まで「地域日本語教育推進事業」を実施し、人材育成や日本語教室の設置運営、教材作成等に関する支援を行った。2007 年度からは新たに「生活者としての外国人」のための日本語教育事業」を実施しているが、日本語教室の設置運営、日本語指導者育成、ボランティアを対象とした実践的な研修が支援の内容であり、地域における日本語教育をさらに充実させるための取り組みとなっている。

国際センターでは、柏原市教育委員会の要請を受け、「かしわら日本語教室」の立ち上げ、運営に協力してきた。また、現在、大阪教育大学と大阪府教育委員会の連携による地域日本語教育の指導者養成に関する支援の計画も進められている。ますます需要が高まっている地域の日本語教育に対して、大学の日本語教育・留学生教育がどのように貢献できるのかという点については、まだあまり議論がなされていない。これからはどのような支援のあり方が求められているのか、「指導者養成」という観点からその概観をまとめてみたい。

2. 大阪での識字・日本語学習の実態

大阪府教育委員会が平成 21 年度に行った調査によると、大阪府内には 225（回答 196）の識字学級や日本語教室があり、5,520 人もの学習者が学んでいる。学習者を支える支援者数は 2,545 人となっている。教室の位置づけとしては、「識字」が 24、「日本語」が 91、「識字・日本語」が 81 である。大阪府内 43 市町のうち、38 市町で教室が開設されており、広範囲で日本語学習の場が提供されていることが分かる。

支援者のうち、最も多いのが専業主婦（夫）で約4分の1を占めており、男女別では女性が 65%となっている。「識字」では、現職教員、退職教員など教育関係者が多く関わっ

ているのが特徴であるが、支援者の資格に関して言えば、日本語教師有資格者数は 310 人と約 12%にすぎず、日本語教員の資格を重視する教室がある一方で、日本語を教えることよりも交流や生活者の視点からの支援を中心に考える教室も数多く存在することが分かる。さらに、ボランティアに対する報酬に関しては、半数以上の教室が無報酬であることが明らかになった。

同調査では、聞き取り調査で得た意見がまとめられている。学習者からは、「教室が学習者にとってかけがえのない居場所となっている」「日本語だけでなく「生活」も勉強できるからいい」という声が寄せられ、支援者自身も活動を通じて学ぶことが多いという意見があり、ボランティアである支援者の努力によって支えられている実情が浮き彫りになっている。

一方で、支援者からは次のような問題提起もなされている。

- 1) 生活支援にどの程度関わるべきか
- 2) 学習支援の内容や教材をどうしたらよいか
- 3) スキルアップのための講習・研修や情報交換の必要性
- 4) ボランティアへの報酬がない場合の支援者側の負担
- 5) 教室運営のための資金確保

いずれも、本格的に支援に取り組もうとすれば、避けては通れない問題である。

日本語教室が学習者にとって「生活」に関わる情報を得る貴重な場になっているからこそ、それに応えようとする支援者の葛藤が生まれることは十分に予想できることであり、日本語教室は日本語を教える場と割り切ることが難しい現状が垣間見える。また、無理のない「ボランティア」としての範囲で学習支援をするという基本姿勢で臨んでいても、学習者の学習意欲が高ければ高いほど、そのニーズに応えたいという支援者の願いが高まるのは当然であろう。学習者のニーズを満足させ、支援者も納得できる支援を行うためには、教材についての知識を身につけるなど、教室で役に立つことが学べる研修が不可欠となる。

今回の調査では、大阪府内で、日本語が不自由な学習者に対する様々な支援が行われていることが明らかになった。各教室の形態や支援の内容には違いがあるが、個々の教室のよさを生かしつつ、運営を充実させる上で重要になるのは、支援者を取りまとめる「指導者」や「コーディネーター」の存在である（以後、便宜上「指導者」に統一する）。それぞれの教室の運営の中心的存在となる「指導者」が育つことで、教室間の情報を共有することも可能となり、地域全体の支援の活性化にもつながる。

3. 「指導者」養成における課題

一般のボランティア養成と「指導者」養成では、どのようなことが違うのだろうか。「指導者」に求められる資質について、次の 3 点に分けて考えてみたい。

- 1) 学習者と支援者と、双方の「サポーター」となること

- 2) 生活支援に関する知識を持つこと
- 3) 日本語教育に関する知識を持つこと

まず、「指導者」の立場となる場合、学習者に寄り添い、その心情を理解した上で支援を行うだけではなく、支援者側がかかえる様々な問題について相談に応じることが求められる。支援者は、職種、資格、年齢、経験などが異なる、様々な経歴の持ち主であり、ボランティアとしての関わり方や考え方にも違いがある。経験の浅い支援者への助言、仕事や家庭との両立で学習者に対する支援が十分にできない場合のフォローなど、全体を見渡して教室運営にばらつきが生じないように目を配るのが「指導者」の役割と言える。時には、学習者と支援者の間の誤解を解くことや橋渡しをすることも重要な仕事であろう。異文化のぶつかり合う現場では、日常的に起こり得ることでもある。

次に、学習者への生活支援に関して、「指導者」の立場からは常に明確な答えを出すことが求められる。学習者が持ち込む相談は、緊急性、重要性という点から、すぐに手を打たなければならないことが多い。その悩みの程度によっては、支援者に代わって指導者が引き継ぎ、情報提供や外部機関との連携が必要なことがある。指導者には、全てを自らが直接解決できる能力というよりは、むしろ、どのようにすれば問題が解決するのかを判断する能力が備わっていることが望ましい。お金に困って突然アルバイトを紹介してほしいと言われた時、外国人の在留資格や許可される仕事の内容、問い合わせ先などを知っていれば慌てずにすむ。そのほか、住居、怪我や病気への対処方法等に関わる正確な知識を身につけ、すぐに情報を得ることができる「リンク先」を探しておけば、いざという時にも安心である。

最後に、日本語教育に関しても、日本語や日本文化に関する幅広い知識と柔軟な考え方を備えていることが求められる。「あいまいな言い方が多いのは日本語の特徴」という思い込みだけが先行しないよう、また「日本人の考え方はこうなのだから、必ず従うべき」という押しつけ的な態度を持たぬように注意しなければならない。同時に、支援者の間でそのようなことが横行しないよう、十分に気を配る必要がある。教材やリソースの活用法、学習者のレベル別の指導法などについても、支援者から助言を求められた時に対応できるように備えたい。ボランティアによる日本語学習の場で、例えば日本語能力試験で結果を出したいという学習者にはどのように応えるべきなのか、「指導者」の立場で方針を定めておく必要がある。

4. 大学の日本語教育・留学生教育との連携

3. で述べた「指導者」に求められる資質は、大学において日本語教育・留学生教育に従事している教員に要求されることと共通点がある。日本語教育・留学生教育担当教員は、留学生が直接言いづらいことを指導教員に伝えることによって、円滑なコミュニケーションを成り立たせる手助けをすることがある。また、留学生側の事情に理解を示しつつ、日

本の大学において守らなければならないことを説明し、研究生活がうまく送れるようにサポートすることもある。第3者的な立場を取ることが可能な人材は、異文化交流の現場では「潤滑油」としての働きをすることができるわけである。

アメリカでは、勉学上の指導をする教員とは別に「留学生アドバイザー (Foreign Student Advisor)」という専門職が存在しているが、日本では多くの大学でその役割を留学生担当教員が担っている。留学生は生活上の様々な悩みを身近な留学生担当教員に相談することが多い。そして、その悩みをすぐに解決しなければ、学生の本分である勉強に影響を及ぼすことがある。悩みの要因を特定し、場合によってはカウンセラー、指導教員、母国の保護者などと連絡を取りながら慎重かつ早急にその要因を取り除くための努力をしなければならない。

日本語教育・留学生教育担当教員は、日本語を教えるだけでなく、日本社会や日本文化をより深く理解してもらうために、様々な工夫を凝らしており、多種多様な教材にも精通していることが多い。大学の授業が異文化理解の場であることから、バラエティーに富んだ考え方について、バランス感覚を失わずに捉え直すという視点も、地域の日本語教室運営に際し共有できることではないだろうか。

以上見てきたように、地域の日本語教育の現場での「指導者」養成には、大学での日本語教育・留学生教育において蓄積してきた知見を生かすことができるのではないかと考える。現在進められている大阪府教育委員会との連携事業においても、これまでの経験を十分に活用しつつ、新たな可能性を探っていきたい。

<参考文献>

大阪府教育委員会事務局市町村教育室地域教育振興課 (2010) 『地域における識字・日本語学習環境実態調査結果』

文化庁ホームページ 「平成 21 年度国内の日本語教育の概要」

http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittachousa/h21/gaiyou.html

国際化とダブル・ディグリー制度

—台湾を中心として

城地 茂

国際センター 国際事業部門

1. 諸論

欧州がボローニャ・プロセス¹を推進する中、日本はアジアにおいて同様の動きを主導し、生き残りを図らねばならないという意見が出てきている。留学熱の高い東アジアでは、従来から留学生が多かったが、ダブル・ディグリー制度が国際的に一般化するにつれ、この制度が未発達な日本を避けて、他の国々に留学先を求めるという動きも考えられる。本学においても、国際化は急務であり、ダブル・ディグリー制度を整備する必要性に迫られており、中期計画の中にもその整備が盛り込まれている。

そこで、本稿では、東アジア、特に台湾を中心にダブル・ディグリー制度の概要を紹介したい。

2. 先行研究

日本では、関西学院大学でこの制度が導入され、村田治（2004）で、その概要が報告された。また、文部科学省の委託により、同大学教務部による調査研究が行われ、関西学院大学教務部（編）（2007）として公開され、2005 年度までの日本の実態がアンケートによって調査された。これ以後、すでに総合大学では、ダブル・ディグリー制度を実施しているところもあり²、その報告が出されている。2007 年には、中国を対象として『カレッジマネジメント』誌に早稲田大学と東京工業大学の例が紹介された。江原宏、神原 淳（2010）は、三重大学で実施されているインドネシアの大学との例が報告されている。

本稿では、こうした先行研究を踏まえ、すでに中国と実施している大学への聞き取り調査³も行い、ダブル・ディグリーの教員養成系大学での実施を考察したい。

¹ 1999 年、イタリアのボローニャでの宣言、いわゆるボローニャ宣言に基づく高等教育改革。比較可能な学位制度の確立、学部課程と大学院課程の確立、単位互換制度の導入、人材の自由な移動、大学教育の質的保証、ヨーロッパ的視野の普及促進などを目指している。

² 2000 年度以前に 8 大学・学部が実施していた。2001 年度が 3 大学・学部、2002 年度が 14 大学・学部、2003 年度は 0、2004 年度が 2 大学・学部、2005 年度が 2 大学・学部となっている（関西学院大学教務部（編）「メジャー・マイナー(主専攻・副専攻)、およびジョイントディグリー等に関する調査研究」:63-64）。

³ 岡山大学大学院社会文化科学研究科長・荒木勝教授、石井康裕氏、学務企画課・中野宏栄課長、遠藤和仁氏、国際センター・内藤賢一郎氏には様々なご助言を頂きました。感謝の意を表したいと思います。もちろん、内容の誤りがありました場合は、筆者の責任です。

3.ダブル・ディグリー制度の概要

ダブル・ディグリー制度とは、入学した大学と提携する他大学の単位を修得するなど一定要件を満たすことで、在籍する大学と提携大学の学位も取得できる仕組みをいう。

これは、高学歴化が進み、また大学間の提携や学際的な研究領域の発達に伴い、複数の同等学位（主に修士号）を取得すること必要になったからである。

欧州でダブル・ディグリーが進められている背景には、歴史的な交流や、労働力の流動性を保つ目的が考えられる。その際、言語は授業や論文も英語で書くことが可能になり、これまでアメリカ留学一辺倒だったアジア諸国の有力大学卒業生も欧州留学の可能性も高くなってくる⁴。

修士号は、通常 30 前後の単位と修士論文が必要で、履修年限は 2 年⁵である。たとえば、10 単位⁶を相互に認定するとして、1 年目に入学した大学で 20 単位を履修する。2 年目に提携大学で同じく 20 単位を履修すれば、それぞれ 30 単位が認定される計算になる。こうすれば、2 年間で 40 単位なので、十分履修可能な範囲である。修士論文は、二つの学位が同じ専攻であれば、英語で書くことによって実質的に 1 篇にすることも理論上は可能である。ただし、口頭試問は 2 回必要である。また、それぞれの大学の母語で書かなければならない規定なら、2 篇必要である⁷。

4.ダブル・ディグリー制度の名称問題

ダブル・ディグリー制度を複雑にしている一つに、その名称問題がある。さまざまな名称があり、この呼称の不統一が制度を複雑にしている。日本では、最初はジョイント・ディグリーと呼ばれていた。2001 年ぐらいまでは、複数学位⁸という表現が多かった。学部における学士入学に相当する大学院のシステムである。ただし、大学院修了を待たずに 2 つ目の専攻を履修することで、時間と費用を削減することができた。

しかし、2005 年頃になると、最低履修年限が、たとえば修士課程で 2 年未満でも修了が可能になり⁹、2 年間で 2 つの学位取得が可能になり、デュアル・ディグリーあるいは共同

⁴ 欧州の大学は学部 3 年＋修士 2 年が原則であるが、国や大学によって微妙に異なるため、相互派遣に調整が必要である。

⁵ 『大阪教育大学学則』第 37 条。また第 42 条第 2 項には、「2 前項の規定（協定を結んだ大学、筆者注）により他の大学院又は外国の大学院で履修した期間は、第 37 条に規定する修業年限に算入する。」とある。

⁶ 『大阪教育大学学則』第 42 条第 3 項。

⁷ 実際には、岡山大学大学院社会文化科学研究科の例では、一部重複部分を含むものの完全な別論文で、日本では日本語で、中国では中国語で修士論文を課している。

⁸ 馬場将光（2001）「イギリスの大学の複数専攻・複数学位制度」参照。

⁹ 『大阪教育大学学則』第 53 条には、優れた業績を上げた者には 1 年以上の在学で修了できる規定がある。これは、『大学院設置基準』（昭和四十九年六月二十日文部省令第二十八号）第 16 条に基づくものである。

学位¹⁰と言われるようになった。現在（2011 年）では、正確な統計はないが、筆者の実務経験ではダブル・ディグリーという名称が多い感触である。

これら以外にも、ツイニング・プログラムとも呼ばれることもある。また、稀ではあるが、学位を 3 つ取得することをトリプル・ディグリーという例もある。独立行政法人大学評価・学位授与機構による学位授与事業の推進の結果、3 つ以上取得する例も存在する。

ダブル・メジャーは、主専攻以外にも副専攻を履修し、一般には同じ大学で 2 つの学位を取得することであるが、入学大学と海外の提携大学の専攻が異なる場合は、この範疇にも含まれることになる。

また、中国、台湾などでは「双学位」あるいは「双主修」と言う。ダブル・ディグリーの直訳である。

このように、いくつかの名称は、正確には意味の異なるものもあり、その時々の実現可能な最も有利な制度が名称になったのであるが、混同されて使われることもあり、混乱したようである。

本稿では、国際間の問題を扱うこともあり、ダブル・ディグリーの名称で統一して、在籍する大学と提携大学の学位も取得できる仕組みを指すこととしたい。

5.台湾での実施状況

台湾は東アジアの中で、中央の教育部（文部科学省）の法整備が整った地域である。また、出国する留学生も多く、さらには統計が整っており、分析には都合のよい地域と言える。また、表 1（図 1）のように留学生の数も多い。人口が約 2314 万人と日本の 1/5 程度であることを考えれば、相当な数にのぼる。そして、日本への留学生数は、第 4 位で 3000 人程度となっている¹¹。また、日本の受け入れという点からみれば、中国（1998 年、5 万 8533 人）、韓国（1998 年、1 万 5846 人）に次ぎ、第 3 位と考えられる¹²。

国別	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
アメリカ	13109	14443	15547	14878	13767	10324	14054	15525	16451	14916	19402	15594
カナダ	2359	2159	2583	2296	2433	1813	2149	2140	1997	3984	3266	2320
イギリス	6173	6553	8567	7583	9548	6662	9207	9248	9653	7132	5885	3895

¹⁰ 名称では、デュアル・ディグリー（17 校 34%）、ダブルディグリー（16 校 32%）、共同学位（9 校 18%）、複数学位（6 校 12%）、ジョイントディグリー（1 校 2%）などであった（関西学院大学教務部（編）（2007）「メジャー・マイナー(主専攻・副専攻)、およびジョイントディグリー等に関する調査研究」:63; 104)。

¹¹ 文部科学省「日本への留学生出身国トップ 10 における留学先国ベスト 10（2011 年 2 月 10 日現在）」では、データなしとなっているが、本稿表 1 より明らかである。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101/2-4.htm

¹² 文部科学省「日本への留学生出身国トップ 10 における留学先国ベスト 10（2011 年 2 月 10 日現在）」による数値である。また、これは 1998 年の ユネスコ文化統計年鑑によっている。

フランス	342	411	552	562	529	627	580	600	690	723	983	882
ドイツ	305	295	313	345	400	442	402	475	512	606	558	646
オーストラリア	2092	2065	2104	2397	2894	2823	2246	2679	2862	2570	2370	4176
ニュージーランド	342	391	496	645	740	571	534	498	538	618	596	469
日本	1649	1573	1753	1696	1745	1337	1556	1748	2108	2424	2638	3143
その他 ¹³	730	1146	900	1760	1775	1719	1797	1145	2360	2018	2102	2504
合計	27101	29036	32815	32162	33831	26318	32525	34058	37171	34991	37800	33629

表1 台湾の留学先別留学生数¹⁴

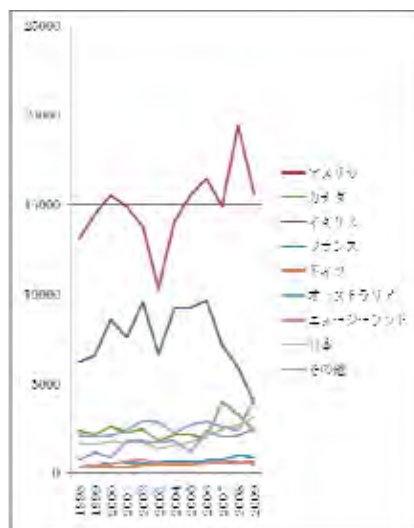


図1 台湾留学先別留学生数¹⁵

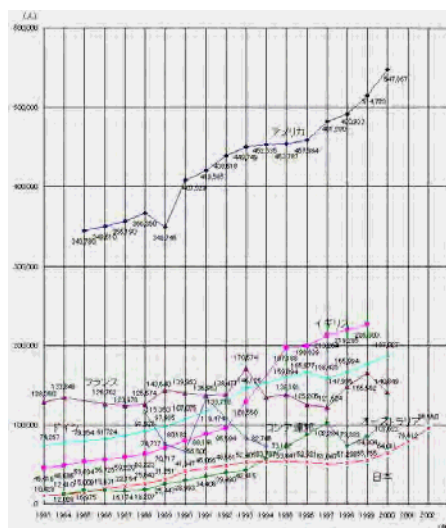


図2 主要国における留学生受入れ人数の推移¹⁶

中国では、現在は教育部があるが、1998 年以前は国家教育委員会¹⁷であり、大学の設置には多様性があつた。また、台湾は学歴社会であるため、ダブル・ディグリー制度の整備は日本以上に早かった。

台湾の『大学法』（1948 年 1 月 12 日公布、2007 年 1 月 3 日修正）第 28 条¹⁸では、それ

¹³ 2009 年の統計では、オーストラリア 62、アイルランド 13、イスラエル 5、タイ 95、韓国 469、ハンガリー 25、デンマーク 42、フィンランド 30、スイス 24、イタリア 220、ベルギー 65、インド 57、ロシア 143、スペイン 292、スウェーデン 108、オランダ 208、チェコ 81、南アフリカ 8、トルコ 51、ポーランド 290 となっている。

¹⁴ 台湾教育部国際文化教育事業処統計。

http://www.edu.tw/files/site_content/B0003/1998-2009_留學簽證人數統計.pdf

¹⁵ 表 1 より作成。

¹⁶ 文部科学省、主要国における留学生受入れ人数の推移

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101/2-3.htm

¹⁷ 1949 年 10 月、中央人民政府教育部。1954 年 9 月中華人民共和國教育部（國務院隸下）、1985 年に国家教育委員会、1998 年に中華人民共和國教育部として再設置。

¹⁸ 「大學學生修讀本校或他校輔系、雙主修、學程、跨校選修課程、保留入學資格、轉學、轉系（組）所、轉學程、休學、退學、開除學籍、成績考核、學分抵免與暑期修課、國外學歷之採認、服兵役與出國有關學籍處理、雙重學籍及其他與學籍有關事項，由大學列入學則，報教育部備查。前項國

までダブル・ディグリーに法律レベルで規制があったが撤廃され、各大学で規定できるようになった。しかし、多くの大学では、修士課程の修業期限 2 学期（1 年）、各校 1/3 以上の単位履修を義務付けているところが多い。総単位数 30 の 1/3 であるから、10 単位¹⁹になり、本学の規定にそのまま適用できる状態である。

しかし、留学経費を節約するため、課程の半分を本国で、残りを日本で終えたいという要望がある。特に学費の面で、履修単位数によって学費が決まる大学が多いため、この問題は台湾では大きい。

学制では、アメリカ式の 6・3・3・4 制なので実施面の問題は、対欧州より容易である。また、他のアジア諸国が、シラバスや講義、実験等の内容に関して詳細な情報を入手できる。これは、日本以上に IT 化が進んでいるからである。

6.まとめ

日本では、ジョイント・ディグリー制度の導入から複数の同等学位取得が始まった。たとえば、関西学院大学のジョイントディグリーの例は、4 年間で 2 学部を卒業し、2 つの学士号を取得できるというものであった。複眼的な視点を持つことが可能で有意義な方法であるが、教員養成系大学では、教育実習という問題が大きい。このため、本学で学部段階でのダブル・ディグリー制度導入は困難であると言わなければならない。

一方、アジアの大学との実施という観点を考えると、アジアからの留学生には、日本語と言う言語の問題がある。留学生が日本語を習得するのは、英語を習得するより制度的に困難である。日本で英語による授業を行えば解消できるのだが、それには問題がある。日本語を習得しないまま修了したのでは、日本国内で就職することは難しい。また、日本国内での上級課程へ進学するにも制限がある。いきおい英語圏の上級課程へ進学することになり、日本は通過する一過程になってしまうのである。

言語の面では、体育系、芸術系は、言語の問題が他の研究科に比べて少なくなっている。したがって、教員養成系大学では、海外の体育、芸術系大学院とのダブル・ディグリーが可能であるという利点もあるのではないだろうか。

小学校に日本語を母語としない小学生が増える中、国際性を有する教員の存在は、これからますます重要になるに違いない。アジアを中心としたダブル・ディグリー制度が教員養成系大学にも必要とされるに違いない。

外學歷之採認原則、認定程序及其他應遵行事項之辦法，由教育部定之。」

¹⁹ たとえば、神戸大学では、従来 8 単位までしか認定しなかったが、海外の大学院では 10 単位（法科大学院では 15 単位）まで認定する規定になった（『神戸大学教学規則』（平成 16 年 4 月 1 日制定、平成 22 年 10 月 26 日最終改正）第 74 条の 2）。なお、学部では 60 単位になった（『神戸大学教学規則』第 34 条の 2、第 2 項）。

参考文献

- 馬場将光（2001.8）「イギリスの大学の複数専攻・複数学位制度(調査報告)」『信州大学教育学部紀要』(103):189-198.
- 村田治（2004.3）「わが国初のジョイント・ディグリー制度の導入--最短四年間で二つの学位が取得可能」『大学時報』53(295)(通号 309):106-109.
- 関西学院大学教務部（編）（村田治（他））（2007）「メジャー・マイナー(主専攻・副専攻)、およびジョイントディグリー等に関する調査研究」平成 17-18 年度文部科学省先導的
大学改革推進委託最終報告書.
- 市川明（2005.7）「Dual Degree Program(共同学位プログラム)」『大学時報』54(303)(通号 318):96-101.
- 江副 隆秀（2005.12）「留学生の増加は大学の変革によってもたらされる --2006 年留学生
激減期を前に、日本語学校から見た現況と大学への期待」『留学生教育』(10):9-26.
- 村上 理一（2006.5）「ハイライツ ダブルディグリー制を導入した国際連携大学院における
新しい大学院教育の試み」『ITU ジャーナル』36(5)(通号 417):25-27.
- リクルート(編)（2007.3）「早稲田大学のダブルディグリー・プログラム、アジアのハブの
基盤に中国を据える (特集 本格化する日中大学交流)」『カレッジマネジメント』25(2)
(通号 143):12-16.
- リクルート(編)（2007.3）「東京工業大学の修士デュアル・ディグリープログラム 清華大学
と 3 コースで大学院合同プログラム (特集 本格化する日中大学交流)」『カレッジマネ
ジメント』25(2):20-23.
- 上西啓介、加賀有津子、座古勝（他）（2007.11）「経・工両専攻の学生が連携して行なう
OJE 演習 (アントレプレナー・エンジニアリング)」『映像情報メディア学会技術報告』
31(58):27-30.
- 勅使河原三保子（2008.5）「日本における共同学位プログラム」『留学交流』20(5):22-25.
- 栗山直子、齊藤貴浩、前川眞一（他）「わが国の大学院における共同学位プログラムの現状
に関する研究」『大学評価・学位研究』8:1-20.
- 菊池真美（2009.12）「日本人学生の海外留学促進に向けた取組について--ダブルディグリー
・プログラムを事例として (特集 日本人学生の海外留学の促進に向けて)」『留学交
流』21(12):10-13.
- 江原宏、神原 淳（2010.3）「三重大学大学院生物資源学研究科-スリウィジャヤ大学大学院
作物科学研究科総合的食料生産・管理計画学ダブルディグリープログラムの創設」『三
重大学大学院生物資源学研究科紀要』(36):81-89.

ドイツの学力テストをめぐる動向について

- 2010 年ベルリン訪問調査から -

中山 あおい

国際センター 国際教育部門

はじめに

1997 年に公開された第 3 回 TIMSS (国際数学・理科教育調査) の結果は、「ドイツの学校の生徒は国際的な比較においても比較的に良い成績のはずである」という以前から当然とされていた予想を覆した。そのため、同年の 9 月にコンスタンツで行われた常設各州文科省大臣会議 (KMK) において、「教育の質の保証」が中心的なテーマになった。「TIMSS、PISA (生徒の学習到達度調査)、IGLU (基礎学校の国際読解調査) の結果は、従来のドイツのインプット型の教育が、教育システムの質の保証にはならなかったことを明らかにした」¹とされているように、今日のドイツではアウトプットを重視した教育への転換が図られている。ここでは、近年のドイツの学力向上政策のなかで始められた学力テストに注目し、それが実施されるに至った背景を概括するとともに、2010 年 8 月 31 日から 9 月 2 日かけて訪れた学力テストの開発機関や関係者へのインタビューの内容をまとめ²、ドイツの学力向上を目指す動向について検討したい。

1. 学力向上政策の背景

PISA2000 及び PISA 補足調査 (PISA-E テスト) の結果、ドイツにおいて到達度レベルの低い生徒の割合が高く、到達度レベルの高い生徒との成績の格差が他国よりも顕著であることが明らかになった。PISA の結果をめぐって、ドイツでは分岐型中等教育制度の是非をめぐる議論も起きたが、教育政策上は学校種の問題よりも移民を含む下位の社会階層と低学力の強い関連が教育課題として浮かび上がっているということができよう。

PISA2000 の結果発表の後に KMK で決議された優先的に取り組むべき教育改革の 7 つの課題「7 つの行動領域 (sieben Handlungsfelder)」には、就学前の言語能力の改善、早期入学を目標とした就学前領域と基礎学校とのよりよい接続、基礎学校での教育改

¹ KMK, IQB (Hrsg.) Gesamtstrategie der Kultusministerkonferenz zum Bildungsmonitoring, Linkluchterhand, S.5

² 大阪大学、志水宏吉研究代表者、科学研究費補助金基盤研究 (B) 課題番号: 20243037 「学力向上策の比較社会学的研究—構成と卓越性の視点から」の一環として、プール学院大学の石原陽子氏と大阪教育大学の森田英嗣氏と 3 人で行った海外調査の一部である。

善ならびに読解力と数学・自然科学関連の基礎理解の全般的改善、教育的にハンディキャップをもつ子ども、特に移民背景を持つ青少年の効果的促進、拘束力のあるスタンダードにもとづく授業と学校の質の徹底的な発展と確保、教師の活動の専門性、特に組織的な学校発展の構成要素としての診断的・方法的能力に関する教師の専門性の改善、教育・促進機会の拡充を目的とした、特に教育不足の生徒と特別な才能をもつ生徒のための学校と学校外の終日プログラムの強化、がある。は、低学力層への支援を行い、生徒間格差の是正を目指すものである。また、については 16 州それぞれに文科省があり、教育内容も州で決めているドイツにおいて、共通する教育スタンダードを作り、すべての生徒が基礎学校修了時（4 年生）と中等教育第一段階の修了時（9、10 年生）に達成すべき学力（アウトプット）を示すことで、州の標準化が図られていると考えられる。PISA により、生徒間格差とともに州間格差が明らかになったドイツでは、その是正も目指されているのである。

そのため、教育スタンダードの到達度を生徒やクラスや学校単位で診断する悉皆テストである全国学力テスト（VERA）が毎年行われるようになり、2009 年からは国際的な学力テストと連動して抽出で行う州比較テスト（Ländervergleich）が実施されている。二つのテストを開発し実施するために、ベルリンのフンボルト大学に「教育の質開発研究所（Institut zur Qualitätsentwicklung im Bildungswesen：以下 IQB）」が 2004 年に設置された。これらの二つの学力テストによる客観的な学力の測定は、従来のドイツの教育にはみられないものであり、大きな変化が起きていると言うことができよう。以下では、2010 年 8 月末から 9 月初めに訪れた学力テストに関わる関係者や関係機関でのインタビュー調査をまとめる。

2．訪問調査

（1）IQB

2010 年 8 月 31 日に IQB の Dr. Hans Anand Pant 教授を訪問した。IQB は教育スタンダードのモニタリングやテストの開発だけではなく、州比較テストの結果を分析し、公表している。VERA テストと州比較テストの目的や実施方法、両者の違いについてインタビューを行った。その結果、二つのテストの違いは表 1 のようにまとめられる。

VERA は、教育スタンダードに合わせて個々の生徒やクラスや学校がどの程度の到達状況にあり、どこが弱く、どこが強いかを把握するためのものである。採点や集計、フィードバックは各州に任されており、日本とは異なり州のランキングは示されない。各クラスや生徒の結果は教員と学校に伝えられ、その結果を授業改善に生かすことが目的とされている。そのため、スタンダードが設定された修了学年より 1 年早くテストが実施される。また、テスト内容に合わせた授業改善のための教授学的なガイドブックも IQB によって作成されている。

一方、州比較テストは、国際的な学力調査と連動して行われ、2009 年は PISA の翌日に

実施された。教育スタンダードの達成度をより精密に測るために、VERA よりも質問事項が多く、1 回の試験ではすべてを答えることができないため、クラスごとに異なる問題群で調査する。統一試験ではないため、学校比較も生徒比較も不可能である。生徒がどれほどスタンダードを達成しているのかを調査する点では VERA と同じであるが、各州の達成状況の把握と、社会文化・経済的背景や男女差などの要因分析を行っている。全州の結果を統計学的に処理し、社会文化・経済的背景の違いや移民の背景、男女差との相関も分析するため、結果の公表までに 1 年かかる。

表 1 全国学力テスト（VERA）と州比較テストの比較

	VERA	州比較テスト
テストの目的	スタンダードの達成状況 授業改善	スタンダードの到達 政策の検証改善
テストの種類	全国学力テスト（悉皆テスト）	州比較テスト（生活調査を含む抽出調査）
実施時期	・3 年生・8 年生の 5 月	・2009 年 9 年生に実施 ・2011 年に基礎学校でも実施予定
テスト内容	・ドイツ語・数学・外国語 ・スタンダードに則った問題 ・8 年生には 3 レベルの問題	・ドイツ語・数学・外国語 ・スタンダードに則った問題 ・詳細な内容のテスト（問題数多数なため、クラスによって問題が異なる）
実施方法	・毎年 5 月 ・採点を現場に任せている	・2009 年（抽出）に始まり、PISA 等の国際学力調査に合わせて実施 ・生徒は、抽出された問題のみを実施
評価分析	・各州の評価機関に任せる	・IQB で分析
改善方法	・州や学校間の比較をしない ・教師の授業改善	・州間の比較をする

（ 2 ） ISQ（Institut für Schulqualität der Länder Berlin und Brandenburg ベルリン及びブランデンブルク州学校の質研究所）

2010 年 9 月 2 日に ISQ の Dr. Wolfgang Wendt 所長にインタビューを行った、ISQ は首都であるベルリン都市州及びベルリンを取り囲むブランデンブルク州の二つの州の学校の質の研究機関として 2006 年にベルリン自由大学に設立された。ISQ はベルリン及びブランデンブルク州の学校の内部及び外部評価の支援や、文科省、学校、学校行政に助言とともに、IQB の作成したテストの実施、VERA の評価分析、フィードバックを行っている。

所長によると、PISA の結果により、生徒の学力を向上すること 生徒のエスニックや社会階層による差を少なくすること、より柔軟でオープンな教育システムをつくる必要性が生じた。また、教育スタンダードの導入は、いろいろなアカウンタビリティと学校

評価を生みだした。それは、学校のインスペクター、初等、中等教育における州レベルのスタンダード化したアセスメント、中央によるテストである。

ISQ の役割には、ベルリン・ブランデンブルク州の国際的な学力調査の業務、州比較テストに関する業務、VEEA の実施、学校インスペクターのサポートと評価がある。

VERA が教員の授業改善に効果があるのかという質問に対して、それは教員によるとの答えがあり、教員を以下の 3 つのタイプに分かれると説明した。サポートを受けながら変化していく教員、拒否する教員、独自にデザインをする教員である。

(3) エッセン大学、Oliver Wilhelm 教授へのインタビュー

2010 年 9 月 3 日(金) IQB でテスト開発に携った、エッセン大学のヴィルヘルム教授にインタビューを行った。ヴィルヘルム教授によると、ドイツではテストの開発の経験があまりなかったため、アメリカやオーストラリア、オランダ、ニュージーランドのテストを参考にして、この 10 年間という短い間にテスト開発を行った。

VERA の個々の生徒の結果は、校長や教員には知らせるが、州比較テストに関しては、個人の結果は公表されず、生徒や親は結果を知ることはない。

州比較テストでは、バイエルンが一番高く、プレーメンが低いという順序は PISA と変わらない。しかしながら全体的に少しずつ成績が上がっていくという効果は期待できる。

VERA については、教員のための指導書を作成しているが、活用するかしないかは教師による。活用する教員には授業改善が期待できる。

3. 考察

ドイツは目的に応じて二つのテストを実施している。どちらも教育スタンダードの達成状況を測るものであるが、州比較テストは各州の詳細な分析結果を示すことで、政策担当者へデータを提供し、州間の格差是正のために行われていると思われる。一方、VERA テストは、授業改善のためのデータとして、教師や生徒の弱点と優れた点を明らかにするものである。しかしながら、ヴィルヘルム教授が指摘したように、テストの結果を活用するかどうかは、教員次第であり、教員にどこまでその意図が浸透しているのか疑問である。ISQ の所長の話のように、様々なタイプの教員がいるのであれば、やはり教員間の合意形成や VERA の活用に関する研修などを行う必要があるだろう。

また、学力調査の度にランキングが話題になる日本とは異なり、ドイツではテストは到達度を測り、要因分析をし、その結果を授業や政策の改善のために役立てるという考え方からランキングはそれほど重視されていない。州比較テストでは州の比較が行われるが、統一試験ではないため、総合得点の平均の順位づけがなく、他州に比べてどこが強く、弱いという分析と、その社会的・経済的背景等の相関に力点がおかれているのもドイツの特徴ではないだろうか。二つのテストの効果がどの程度あり、「教育の質」が保証されるのか、今後が注目される。

ソウル教育大学「グローバルインターンシップ」受入報告

- 海外における教育実習の可能性と課題 -

若生 正和

国際センター 国際教育部門

1. はじめに

国際化の進展とともに人の往来が急速に増加する中、教員養成大学の学生にも国際的視野を在学中から広げていくことが望まれるようになっていく。大阪教育大学ではこれまで、交換留学生の派遣・受け入れや語学研修・短期海外文化研修の派遣を行うとともに、海外協定校から日本の学校見学を目的とする研修団などを受け入れてきた。

本年度、本学では新たな試みとして、ソウル教育大学校の「グローバルインターンシップ」(以下「G インターンシップ」と表記)の実習生を約2週間にわたって受け入れた。今回のG インターンシップは基本的に引率・通訳無しで海外協定校の学生たちが学校現場に入り込み、実習をするという点でこれまでの研修団受け入れとは異なっていた。また、通常の観察実習であれば長くても1週間(実質5日程度)であるのに対し、今回は2週間の長丁場であった点も、実習校に過度の負担がかからないかなどの懸念もあった。

本稿では同プログラムの受け入れに関し準備から実施までを振り返り、学生の報告や実習校の受け入れにあたった教員対象のアンケート結果などを通して、G インターンシップの成果と課題をまとめる。そして海外における教育実習の発展方向や可能性を考えてみたい。

2. 海外における教育実習

海外における教育実習はこれまでにも行われてきた。本学では米国・ノースカロライナ大学ウィルミントン校(UNCW)で実施する語学研修の最後の1週間は、現地の学校における実習にあてられており、観察実習のみならず日本文化を紹介する実習授業も学生は体験する。また、本学二部では教員として採用される前の大学院生を中心に、ソウル教育大学校など海外協定校に派遣し、現地の学校での研修などを行っている。

また、受け入れにおいても、UNCWからの大学院生を中心とする研修団が訪日する際、国際センターが小・中・高校における観察実習のコーディネートにあたるなど、学生たちが海外の学校現場で学ぶ機会は数多く提供されている。

文献を通してみても、愛知教育大学が韓国・晋州教育大学校との間に教育実習のチームを相互に派遣し合っている事例がある¹。その他の教員養成系大学・学部でも、論文・報告

¹ 江島他(2009)

書の形になってはいなくても同様のプログラムを実施しているところはあるのではないだろうか。

ただし、本学が関与する学校見学や海外教育実習はほとんどが 1 週間程度の日程である。愛知教育大学と晋州教育大学校の取り組みでも、実習期間は 1 週間程度であり、その中で実際に学校に入り込むのは 2, 3 日程度のものである。また、それらの実習には派遣校側の引率者が同行するケースが多く、学生たちが実習期間中に、主体的に実習校の教員や児童たちとコミュニケーションを取らなければならない場面はそう多くないと推察される。

本年度実施のソウル教育大学 G インターンシップは、期間においても 2 週間と比較的長く、またその期間中、実習校における時間のほとんどを、学生たちは引率者・通訳無しで過ごした。そのため、実習する小学校の先生方に過度の負担がかからないか、また先生方や児童たちと実習生とのコミュニケーションに障害はないかなどの点について若干懸念された。

3. ソウル教育大学 G インターンシップ受け入れの経緯

まず本プログラムを本学が受け入れることになった経緯をまとめる。本プログラムの実施のために、ソウル教育大学から協力の依頼を受けたのは 2010 年 9 月に国際センターの長谷川ユリ教授と筆者が同校を訪問し、国際交流について意見交換をする席であった。この席には、当時研究のために同校に滞在していた、本学二部実践学校教育講座の裴光雄准教授も同席した。ソウル教育大学校の大学発展企画団長である全英碩教授から提示された、G インターンシップの計画は以下の通りである。

(1)ソウル教育大学 G インターンシップ計画

目的

- ・ 海外初等学校現場訪問を通じた国際的見識の獲得
- ・ 予備初等教育専門家としての素養を養うこと

プログラム内容

- ・ 参加学生数：5 名
- ・ 期間：2011 年 1 月から 2 月のうち、2 週間
- ・ 事前教育：遠隔画像講義により実施（4 回）
- ・ 現地教育：オリエンテーションと補助教師として授業参観 2 週間（1, 2 回の授業実習）

本プログラムはソウル教育大学の「2010 大学教育力量強化事業」の中の、「グローバル力量強化プログラム - グローバル海外インターンシップ」の一環である。本プログラムについてソウル教育大学側から強調されたのは、史跡見学など文化研修の提供は不要で、2 週間の日程のうち、週日はできる限りすべて受け入れ学校での実習にあててほしいとの意向であった。そして、プログラムの実施のために、本学には以下のような協力が要請された。

(2)大阪教育大学への要請事項

- ・実習校（小学校）選定
- ・宿舍の手配（大学の寄宿舍利用を要請、無理な場合は学校周辺の安全な宿舍の手配）
- ・全体コーディネーター（空港での出迎え、宿舍および学校案内、現地生活案内など）
- ・プログラム実行に必要な費用の算出（ソウル教育大が支払）
- ・プログラムの細部日程
- ・指導（担当）教授の配置
- ・土日は学生が、自由に文化体験ができるように指導および案内を要請

上記の要請のうち、指導教授の配置と文化体験の指導は実際には行われなかったが、その他の項目については裴光雄准教授と長谷川教授、筆者が全体のコーディネーターとして対応することになった。

4. G インターンシップの準備

前節に記した、本学への要請事項のうち最も重要な部分が実習校の選定である。この作業にあたっては本学教職教育研究開発センター地域連携部門の島善信教授を通し、大阪府教育委員会ならびに東大阪市教育局のご協力をいただき、以下の3校が選定された。

(3)G インターンシップ実習校（五十音順）

- ・東大阪市立荒川小学校
- ・東大阪市立太平寺小学校
- ・東大阪市立長堂小学校

上記の3校は、東大阪市の中でも近畿日本鉄道（近鉄）大阪線・布施駅の周辺に位置している。実習生はプログラム期間中、本学柏原キャンパス内の職員会館（旭ヶ丘会館）に滞在したのだが、近鉄大阪線・大阪教育大前駅から乗り換え無しで通うことができるため、大阪の地理に不案内な実習生たちにとっては通いやすかったと思われる。また、東大阪は韓国・朝鮮籍を中心に、朝鮮半島にルーツを持つ方々が比較的多く住む地域であり、上記3校はすべて母国語学級を運営するなど、教員・児童ともに韓国に親しみを持っている地域・学校を選定していただいたものと考えられる。

なお、9月にソウル教育大側から計画を提示された時点では、参加学生は5名となっていたが、その後、申請者が予想よりも多かったとのことで、参加学生は7名となった。各小学校に配置する学生数は荒川小学校と長堂小学校が各2名、太平寺小学校が3名である。

実習校が選定されると、コーディネーターとなる教員の中で各学校の担当を決め、12月中にご挨拶に伺い、G インターンシップの目的・概要とソウル教育大学からの要望などをお伝えするとともに、実習校からの意見・要望を伺った。

次に宿舎であるが、すでに記したとおり本学の職員会館を使用することになった。柏原キャンパス周辺は、大学生協以外の商店・スーパー・飲食店は歩いて行ける範囲にないため、朝早くから実習校に出向く学生たちの便を考えて大阪市・東大阪市内のホテル等を手配することも検討した。しかし、2週間の滞在を考えると費用面で負担が大きいため、最終的に職員会館が選ばれた。

5. G インターンシップの実施

3 節の「計画」にもあったとおり、本プログラムは、来日前の事前遠隔画像講義と、小学校における観察主体の実習がセットになったものである。5 節では、事前遠隔講義と来日後の実習について、実施内容をまとめる。

具体的な実習内容の記述に入る前に、ここで、インターンシップでの使用言語に言及しておく。インターンシップ期間中、小学校では原則的にすべて日本語が使用された。今回のプログラムで懸念されたことの一つに実習生の言語能力があったが、7 名の実習生は全員、基礎的な日常会話に支障がない程度の日本語能力を備えていた。大半の学生は日本語能力試験の受験経験があり、3 級 1 名、N3 級 1 名、2 級 1 名、1 級 1 名、N1 級 2 名であった。残る 1 名も小学校の 4 年間で日本で過ごした経験があった。

データから見ると実習生の日本語力には幅があるが、期間中、日本語でのコミュニケーションに大きな支障はなかったようである。実習校では学生が児童の前で発表する機会もあったが、全員日本語で発表をこなした。

5.1 事前遠隔画像講義

事前遠隔講義は計 4 回実施されたが、教員の選定には主に裴光雄准教授があたった。4 回中 1 回は裴准教授自身が講義し、その他 3 回の講義は本学二部の木原俊行教授、田中俊弥教授、藤井正俊教授にご協力いただいた。講義は 2010 年 12 月 16 日(水)と 12 月 17 日(金)の計 2 日間にわたって実施された。各講義のテーマは以下の通りである。

(4)事前遠隔画像講義のテーマ(実施順)

木原俊行教授 日本の教育について(総論)
田中俊弥教授 日本の国語教育
裴光雄准教授 日本の社会科教育
藤井正俊教授 日本の数学教育

以上のテーマは各教員の専門性にそった内容であり、実習生たちも熱心に講義を受けていたが、学生たちの来日後の必要を考えると、4 回中少なくとも 1 回は、日本の小学校教員の学校での過ごし方や、実習にあたって必要な準備物などを説明するオリエンテーション的なものを準備した方が良かったかもしれない。

なお、今回の遠隔講義には通信手段として Skype を利用した。ビデオ会議システムや E ラーニングシステムの利用も検討したが、ソウル教育大学校と本学の双方が導入している装備やソフトウェアが異なるため、一般的に普及している Skype を選択した。

Skype を使用した講義はおおむね順調に進んだが、途中で通話品質が著しく低下することがあり、講義中に何回か中断を余儀なくされる回もあった。安定した通信品質の確保は、本プログラムに限らず、遠隔講義を行う際の課題である。

5.2 東大阪市内の小学校における実習

G インターンシップの日本における実習は 2011 年 1 月 17 日（月）から 1 月 31 日（月）にかけて行われた。このうち、1 月 29 日（土）以降は学生たちが自由に文化体験を行うことになっており、また初日は大阪教育大学のコーディネーターによるオリエンテーションだったため、小学校に入りこんでの実習は 1 月 18 日（火）から 28 日（金）までの約 2 週間である。

1 月 17 日（月）は午後 2 時頃に実習生チームが柏原キャンパスに到着、キャンパスツアーや職員会館のチェックインを済ませたあと、午後 3 時 30 分から全体オリエンテーションを行った。ここでは宿舎の利用方法、学内及び柏原キャンパス周辺地域の案内、実習校への交通手段、翌日の予定などが説明された。

2 日目の 18 日（火）、いよいよ小学校での実習開始である。実習生は朝 8 時頃に、各学校担当のコーディネーターとともに実習校に到着、実習校側からのオリエンテーションや施設案内を終えた後、観察実習を開始した。

下の表 1、表 2 は学生が作成した荒川小学校、長堂小学校の実習記録である。観察した学年・クラスと教科、実習形態または授業内容が簡潔に記されている。ソウル教育大学校からは実習内容として「補助教師として授業参観」と「1, 2 回の授業実習」という要望があっただけで、見学内容の細かい点には触れられていなかったため、観察する学年・クラスや内容は各学校の判断にお任せしていた。実習生から実習記録の提出のあった荒川・長堂の両小学校に関しては、学生たちが様々な学年や教科の授業を観察できるように日程を組んでいただいたと思われる。また、両校とも母国語学級を運営していたり、ハングルカルタを授業に取り入れていたりしていたので、韓国からの学生の特性を生かせるようにも配慮していただいた。

学生たちはインターンシップ期間中、数回ずつ「発表」を行っている。これはソウル教育大学からの要望でもあったが、各実習校からは韓国の文化や学校についてプレゼンを行ってほしいとの声もあったので、来日前に準備するように学生に伝えてあった。発表内容は韓国文化や韓国の小学校の様子についての、クイズ形式での紹介や、簡単な韓国語会話の練習、韓国の小学校で習う歌の紹介と練習などであった。

なお、荒川・長堂両小学校には学生が 2 名ずつ配置されたが、1 名ずつ異なるクラスで実習することもあったため、学生ごとに内容が若干異なる部分もある。

表1 実習記録（荒川小学校）

日付	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	6校時	7校時
1月18日 （火）	校長先生 と面談	学校ア-	学校ア-	1年 学芸会の 準備	1年2組 算数	5年2組 算数	
1月19日 （水）	2年2組 算数 図形	2年3組 算数 九九	2年 発表会 練習	2年2組 体育 なわ飛び	2年2組 地震訓練		
1月20日 （木）	1年2組 ハングルカルタ	1年1組 ハングルカルタ	4年1組 国語 詩	4年2組 算数 数列	3年1組 図工 ステッセル	アイの会 (1～3年)	アイの会 (4～6年)
1月21日 （金）	6年1組 社会 政治	6年2組 算数	6年1組 体育 なわ飛び	6年1組 英語 時間	6年1組 国語 詩	6年3組 社会	
1月24日 （月）	4年1組 国語	4年1組 理科 伝導	4年3組 総合 音楽劇	4年2組 社会 地図	4年1組 算数 テスト	クラブ パソコン	
1月25日 （火）	6年2組 家庭 ミソ	実習校の 教員と 面談	3年3組 ハングルカルタ	3年2組 ハングルカルタ	3年1組 ハングルカルタ	4年2組 国語	
1月26日 （水）	授業準備	3年3組 発表(韓国 語、歌、韓 国文化)	3年2組 発表(韓国 語、歌、韓 国文化)	授業準備	3年1組 発表(韓国 語、歌、韓 国文化)		
1月27日 （木）	5年1組 発表(韓国 語、歌、韓 国文化)	5年2組 図工 小品作り	3年3組 ハングルカルタ	5年2組 発表(韓国 語、歌、韓 国文化)	5年1組 図工 トルハルバン作 り	アイの会 (1～3年)	アイの会 (4～6年)
1月28日 （金）	3年2組 理科 磁石	1年1組 算数 +と-	3年3組 算数 数	3年1組 音楽 歌	校長先生 と面談	在日韓国 朝鮮人の 先生の話	

表2 実習記録（長堂小学校）

日付	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	6校時	7校時
1月18日 （火）	が'イ'ン	が'イ'ン	1年1組 音楽 観察	1年2組 国語 観察	1年1組 算数 観察	1年1組 美術 観察	ふりかえり
1月19日 （水）	2年1組 算数 観察	2年1組 国語 観察	2年2組 図書室 観察	2年2組 体育 観察	2年1組 書写 観察	百人一首 大会 観察	ふりかえり
1月20日 （木）	3年1組 国語 観察	3年1組 音楽 観察	3年2組 国語 観察	3年2組 算数 観察	3年1組 算数 観察	ヶ'リ'の会	ヶ'リ'の会
1月21日 （金）	4年1組 算数 観察	4年1組 国語 観察	4年2組 図書室 観察	4年2組 音楽 観察	4年1組 発表 観察	ヶ'フ	ふりかえり
1月24日 （月）	5年1組 算数 韓国文化	5年1組 発表 韓国の小 学校	5年2組 算数 観察	5年2組 発表 韓国の小 学校	5年1組 体育 観察	5年1組 図工 観察	ふりかえり
1月25日 （火）	6年1組 発表 韓国文化	6年1組 国語 観察	6年2組 発表 韓国文化	6年2組 算数 観察	6年1組 図書室 観察	6年1組 書道 観察	ふりかえり
1月26日 （水）	保健室 保健室 紹介	なかよし 授業 観察	なかよし 授業 観察	休憩	教科外研究発表会 (道徳科、英花田小学校)		
1月27日 （木）	2年1組 音楽 観察	2年1組 算数 観察	2年1組 国語 観察	3年1組 社会 観察	3年1組 国際理解 ハン'ル'カル'タ	ヶ'リ'の会	ふりかえり
1月28日 （金）	4年1組 算数 観察	4年1組 音楽 観察	4年1組 国語 観察	5年1組 家庭 観察	5年1組 社会 観察	高井田東 小学校 授業 発表会	ふりかえり

では、以上のような実習を通して、学生たちはどのような成果を得たのであろうか。ソウル教育大学校が掲げた「海外初等学校現場訪問を通じた国際的見識の獲得」、「予備初等教育専門家としての素養を養うこと」という、本プログラムの目的は達成できたのであろうか。

ソウル教育大学校側に提出された報告書を見ると、学生たちは感想の中に以下のような点を書いている。

(5) 実習生感想(一部抜粋)

- ・在日韓国朝鮮人問題に対するより深く理解できるようになった。
- ・児童に対する先生方の態度や基本的な生活礼節等を強調する雰囲気良かった。
- ・日韓の学校の似ている点や相違点の比較を通して自らの目指す教師像を形成できた。
- ・韓流ブームを体感した。韓国に対する肯定的なイメージが多かった。
- ・2週間、一日中日本語を使うことにより日本語力が向上した。

在日韓国朝鮮人問題に対する理解の深化や日本の礼節を大事にする指導態度への気づきなどは、日本で学んだからこそその成果と言える。また、教育実習という点では自らの目指すべき教師像を考える機会になったことも有意義であったろう。

国際交流の観点からは、日本に韓国に対して肯定的に考える人々が多くいることを実感してもらえたことは、日韓の友好的な関係を形成・維持するために重要な点である。また、日本語能力の向上は副次的な成果のように見えるが、学生たちが1週目を観察中心に過ごしながら日本語に慣れ、2週目にある程度日本語の自信を持って発表を多く行えたと見ることもできる。大阪弁に戸惑ったという学生もいたが、言語を通して日本の地域の多様性を感じることができたのではないだろうか。以上見たとおり、学生たちは今回のGインターンシップを通して確実に成長できたようである。

しかし、一方で本プログラム申請当初や、来日当初は単純な観光旅行の延長線上のような意識でいたという率直な意見も見られた。現場で指導してくださる先生のことを思えば、出発前に旅行気分を無くし、研修への真剣な気持ちが持てるような指導が必要である。6節で取り上げる、先生方のご意見に見られる問題点のいくつかは、このような実習生の軽い気持ちに起因していると思われる。

6. 実習校の反応 - アンケートの結果より

Gインターンシップ終了後、各実習校で実習生の受け入れに関わっていただいた先生方を対象にアンケートを行った。質問項目は以下の通りである。質問1から質問3までは、最も肯定的な回答を5点、最も否定的な回答を1点とし、1点から5点の間から選択する形式で回答していただいた。質問4と5は自由記述の回答である。アンケート用紙は本稿の最後に「資料」として添付する。

(5)アンケート質問項目(調査対象:実習校受け入れ担当教員)

質問1 受け入れた学生の実習態度はいかがでしたか。

(5:非常に良かった、1:非常に悪かった)

- 質問 2 受け入れに際し、日常業務への影響はありましたか。
(5: 全く影響は無かった、1: 大きな影響が出た)
- 質問 3 今後、同様のプロジェクト(海外の学生の現場での実習)があれば学生の受け入れをしたいですか。(5: 積極的に受け入れたい、1: 絶対に受け入れたくない)
- 質問 4 今回の学生受け入れや、学生自身の実習態度に関してお気づきの問題点等があればお書きください。
- 質問 5 その他、今回の学生受け入れや、実習生との交流などの感想をご自由にお書きください。
- 質問 6 最後に差し障りがなければ校内での先生の職名・担当学年などを教えてください。

質問 1 から 3 については、全回答の平均点を算出した。その結果、質問 1 は 4.2 点、質問 2 は 4.1 点、質問 3 は 4.2 点であった。平均点を見る限りでは、全ての質問に対し否定的な意見は少なかったように見える。ただし、各質問に対する回答の分布を見ると、質問 1 と質問 3 は「3」から「5」の間に収まっていたが、質問 2 への回答の中に「2」も若干含まれていた。一部の先生には G インターンシップの実習生受け入れが少なからぬ負担になっていたようである。

次に、自由記述の質問 4 と質問 5 への回答を見てみたい。

表 3 回答：質問 4

個人差はあると思いますが、ことばの不自由さにかかわらず、ほがらかに子どもと接してほしいです。
写真撮影をしていたが子どもの写真の処理はどうなっているのか？
日本語でコミュニケーションがとれたので助かりました。
実習生として積極的に子どもたちへ話をする。実習生としてせめて携帯はカバンの中に入れておく。写真をたくさんとっていたが、どのような立場の実習生なのか、よく分からなかった。
もう少し積極的に元気よく取り組んでほしかったです。
音楽の授業の時に携帯を見ていたと子どもが言っていました。
児童への意識づけをもう少しできればよかった。2 人のうち、一人は日本語もよくでき積極的だった。2 人とも子どもとよく関わろうとしていた。
実習計画(目的、内容)がはっきりわかった方がスムーズに(相互に)行くように思う。
文化の違いに戸惑う点もあったと思いますが積極的に子どもたちと関わろうとする様子に好感を持ってました。
実習態度はまじめで感心しました。
大阪教育大学等の実習と違い、参観という(お客さんの)形で入ってもらったことが多く、授業で何かの形で入ってもらったこともあるようだが、担任はある程度遠慮していたよう

である。プレゼンをやってもらったのは大変良かったが、学生が日本の小学校を観察実習に来たという感じが強かった。また、ソウルと日本どちらにも報告を出すということで、記録（写真）をたくさん撮られていたということで、それについても、授業・クラスに入って何か一緒にやるという印象が薄かった。
実習の目的があまり明確でなかったので、どのように対応すればよいのか分からなかった。

表 4 回答：質問 5

とてもよかったです。熱心に学んでおられる姿に感動しました。
国際理解の学習ができ、子ども達にとっても楽しい機会を持てたと思う。
子どもたちにはいい刺激になったようです。韓国、朝鮮にルーツのある子も、ない子も楽しんで交流できました。今後も他の外国の学生さんにも来てほしいと感じました。
1年～6年まですべてのクラスに入ってもらい、ハングルカルタ大会のお手伝いもしていただきとても助かりました。3年生での授業もとても楽しく、子どもたちもよろこんでいました。
これからもっと交流できる機会が増えればよいと思う。
子どもたちも大喜びで韓国の言語や文化について興味を持つことができました。とてもよい経験になったと思います。
韓国のことが聞け、よかったです。（食べ物、給食、芸能人など）
学級全体などより多くの児童と関われる場を設定できたらよかった。
実習生と教師サイドとの交流の場があったらよかった。（文化や教育環境等、話し合っ交流するなど）
実習生の方に授業をしていただき、子どもたちも興味津々に聞いていました。普段聞けない韓国のことなども教えてもらって、とてもいい勉強になりました。
子どもたちにとっても素晴らしい出会いになったと思います。違いを知ることが楽しかったようです。
韓国についての授業（会話やクイズ）をととてもいねいにしてくださったので、子どもたちもとても喜んでいました。交流は子どもたちにとって、とてもよい経験になりました。
先生方にも子どもたちにもいい刺激になったことと思います。
熱心で優秀な学生と感じた。わざわざソウルから来られた学生さんに、何とか良い経験をしたものの、時間割を組むだけで手一杯でした。準備不足は否めません。それを分かつつ、質問 4 について勝手な意見を書いていますので、お気を悪くされないでください。ソウルからの学生さんが学校に来られることは本当に子どもにとっても貴重です。それを子どもにも学生さんにももっと有効なものであってほしいと思った次第です。
子どもたちに韓国の話をしてくれ、とても喜んでいたので良かった。

自分も学生の頃、海外の学校へ行かせて頂いたので、他国の教育を知るいい機会になるということはよくわかっていました。将来教員になるのに、良い経験になると思います。ただ、現場側の立場で考えると、負担が全くないわけではないので、事前の打ち合わせが大切だと思います。子どもたちにとっては、異文化交流の機会になるので良かったと思います。

(6)質問 4 から浮かび上がった問題点

- ・ 児童との接し方、関わり方
- ・ 実習態度、実習への積極性
- ・ 写真の許可と処理
- ・ 実習の目的、目標が不明確
- ・ 携帯電話

(6)は回答から明らかになった問題点である。これらのうち、 と については、もっと「ほがらかに」、「積極的に」、「元気よく」という指摘があった。これは実習生一人一人の個性・性格も関係しており、また、外国語で活動する際は母語で活動する時より判断力が低下する傾向があることも指摘されているため、すぐに明確な形で改善するのは難しい部分かもしれない。しかし、同様の指摘は韓国における教育実習でも出てくるのではないだろうか。インターンシップでお客さんのように観察に徹するのではなく、発表する時間以外にも主体的に子どもたちと関わろうという気持ちを、小学校での実習の前にもう少し高める意識づけを学生にさせておく必要がある。

の写真撮影については、実習前にコーディネーターが各学校を訪問した際に、校長先生から注意事項としてお伝えいただいていたことであり、日本の学校現場は子どもの姿が入る写真撮影に敏感であること、撮影する際には子どもの顔が映らないように配慮することなど、初日のオリエンテーションで学生たちには注意を喚起していた。しかし、韓国では学校での写真撮影に比較のおおらかであることから、観察中心の実習の中で撮影枚数が増えてしまったのかもしれない。そのことが写真の処理に対する疑問につながると同時に、実習生の積極性・主体性不足と映ってしまったようである。

について、ソウル教育大からは「海外初等学校現場訪問を通じた国際的見識の獲得」、「予備初等教育専門家としての素養を養うこと」という目的が提示されていたが、現場の先生方が学生の受け入れ方法を考えるのには若干漠然としていたのではないだろうか。大きな目標としてはいいのかもしれないが、さらに具体的な達成目標をいくつか設定した上で、それらの目標達成のためにどのような指導や活動が必要なのかを実習校に伝えることで、学生を受け入れてくださる先生方の戸惑いも解消されるのではないだろうか。

「国際的見識の獲得」ということであれば、例えば、数年前から韓国では多文化家庭の

子どもたちへの教育が重要であると認識されてきている²。今回のインターンシップ中、発表の中で韓国語会話を扱った学生がいたが、このような問題意識と結びつけることで第二言語としての韓国語を児童に対して指導する機会ととらえ、より体系的な指導案を考えることができるのではないか。韓国文化の紹介なども、国際理解教育の実践の機会ととらえれば、学生も発表の目標をより明確に意識することができるであろう。

学生の発表にとどまらず、教科内容や仕事の仕方を日韓で比較することで教師としての素養を高めようというのであれば、どのような点に着目するのか、あらかじめ学生によく考えさせ、それを実習校の先生方にも伝えることでより収穫の多い実習につながるものと思われる。

の、授業中の携帯電話使用については、オリエンテーションで指導の行き届かなかった部分である。今後、同様のプログラムを実施することがあれば、常識と決めてかからず、学生たちに注意深く指導する必要がある。ただし、2週間にわたり現場の先生方とともに教室に入らせていただく以上、自分たちも教師の一人として見られるのだということは、ソウル教育大学校の側でも渡日前に指導を徹底していただく必要があるであろう。

アンケート以外に、実習生の行動で指摘された問題の一つに、欠席時の連絡の問題がある。今回のインターンシップ期間中、発熱などの体調不良のために何日か欠席した実習生が複数名いた。来日した翌日から毎朝早く学校に通うことになったため、学生たちには体力面で大きな負担がかかったであろうことは想像できる。さらに異文化の中で外国語を長時間使いながら生活していたため、ストレスも大きかったであろう。

インフルエンザが流行する時期でもあったから、無理に学校に行き行かず欠席するという判断はやむを得ないが、ある学生は病欠の連絡が遅れたために、実習校の先生方にご心配をおかけすることになった。これも自分が教師の一因であると自覚していれば、確実に連絡すべきとの意識が持てたであろう。ただし、慣れない環境で体調不良に見舞われた学生としては、誰にどのように連絡すべきか戸惑っていたということも考えられる。これなども、常識と決めてかからずに、病欠の際の連絡手段や連絡すべき相手を各学校から確認して、コーディネーターから実習生に伝えなければならない部分であったかもしれない。

以上、主に質問 4 の回答結果から浮かび上がってきた問題点について述べたが、質問 5 を見ると実習生たちに肯定的な意見も多数見られる。韓国からの学生が小学校に訪れ、一緒にハングルカルタの練習をしたり、韓国文化の紹介をしてくれたことは、実習校の児童たちにとってはなかなか得がたい国際理解の機会となったようである。

しかし、受け入れのために少なからずご負担をおかけすることになった先生方にとっては、何かを得る機会になったのだろうか。もっとコミュニケーションが必要とのご意見や、実習生と先生方との交流の機会を持てたらとのご希望をお寄せくださる先生もいらっしゃった。実習生が日本の教育現場をより深く理解するためにも、重要なご指摘である。

² 宣元錫（2007）

7. おわりに

以上、ソウル教育大学グローバルインターンシップの受け入れの報告をまとめた。これから教師となるであろう海外の学生たちが、日本の教育現場で学ぶ試みは、今後も続いていくであろう。しかし、学生たちにとっても、受け入れ側にとってもよりよいプログラムを整備するためには考えるべきことは少なくない。

前節までに述べたこと以外にも、例えば、実習期間は適切であったのだろうか。観察中心の実習ならもっと短くても良いのではないかという考え方もある。江島他(2009)の、愛知教育大学と晋州教育大学校との短期研修交流の報告を見ても、「教育実習」を核に置きながら、全体の研修期間は1週間程度でまとめている。2週間が必要ということであれば、その中で学生が何を達成すべきで、どのような活動が必要かということを実習校に任せきりにせず、学生を派遣する側がもっと明確な方向性を打ち出す必要がある。

また、今回のインターンシップでは実習生が本学の学生と交流する機会を持てなかった。現場で活躍される先生方から得るものも多いと思うが、学生同士の交流も大いに刺激になる。単に交流の場を設けるだけではなく、本学の学生をチューターとして配置し、インターンシップの支援に当たらせることもできる。

以上、問題点の指摘が多くなったが、実習校の先生方からは好意的なご意見も多数いただいた。実習生と実習校、ソウル教育大学校と大阪教育大学それぞれにとって、Gインターンシップが有意義なものであったなら幸いである。今回明らかになった問題点や課題を踏まえつつ、今後も教員養成大学ならではの学生交流のあり方を探っていきたい。

謝辞

ソウル教育大学グローバルインターンシップの実施にあたり、東大阪市立荒川小学校、太平寺小学校、長堂小学校の先生方には実習生たちを温かく受け入れていただきました。また、小学校選定においては本学教職教育研究開発センターの島善信教授と大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会に大変お世話になりました。さらに、コーディネーターの一員ではありますが、本学二部実践学校教育講座の裴光雄准教授があらゆる面で調整に当たってくださったおかげで本プログラムは無事に実施できたと言えます。皆様に、心より感謝の意を表したいと存じます。ありがとうございました。

参考文献

- 江島徹郎・山根真理・上田崇仁・梅田恭子(2009)『『教育実習』を核とした日韓交流プログラムの発展 - 2008 年度愛知教育大学-晋州教育大学校の学生相互訪問を中心に - 』『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第12号、99-106.
- 宣元錫(2007)『韓国の移住外国人と外国人政策の新展開(情報化・サービス化と外国人労働者に関する研究 Discussion Paper No.7)』一橋大学・雇用政策研究会
- <<http://www.y-kurata.com/dpkaken/dptop.htm>>.

資料1 ソウル教育大学グローバルインターンシップ実習生感想文

長堂小学校

長堂小学校の2週間はとっても早かったです。大阪教育大学の先生たちと長堂小学校の先生たちがいろいろと気配りしてくださったおかげで実習ができました。私にとって今回の internship はその前にあった「普通の日本旅行」とは完全に違いました。毎朝小学校にいった学生たちと一緒に日本語で話したり、授業を聞いたり、給食を食べたりしながら本当の日本の教育がどうかを感じてみました。そして、日本の子供たちの前で韓国についてプレゼンテーションをする機会があって本当にうれしかったです。いろいろと取りはからってくださった大阪教育大学とソウル教育大学のみなさんに感謝しています。どうもありがとうございました。

チュ・ヘミン（朱慧珉）

長堂小学校に行ってはじめて受けた印象は学生たちの明るい挨拶でした。学生たちは休み時間に全部外に出てマラソンしたり一輪車に乗ったりする姿がとても元気そうに見えました。長堂小学校ですごした時間は楽しかったです。韓国に帰って先生になれることがまたうれしいです。韓国と日本の小学校はだいたい似ているけどちょっとちがいました。この internship をきっかけに日本の小学校を見られるし韓国についてもおしえられるし私にとって本当にいい経験でした。

ホン・ジヒ

荒川小学校

まず、未熟な私にこんないい機会を下さったソウル教育大学と大阪教育大学、荒川小学校へ感謝します。大阪教育大の先生たちと、ミン先生、荒川小学校の先生たちのおかげで楽な実習になりました。自分の国の教育だけでなく、ほかの国の教育を体験することができたのでふたつの国のばあいの対比しながらもっといろいろな教育のやり方を考えてみるいい機会でした。これから韓国へ戻って、一生懸命勉強して、立派な先生になろうと努力します。では、もう一度本当にありがとうございます。

ヨム・ジウォン（廉智媛）

今年はいじめて開催する日本での教育実習に参加することになってとても光荣だと思いましたが、そのぶん日本の小学校や大阪教育大学、ソウル教育大学にめいわくにばかりなるのではないかとすごく心配になりました。でも、小学校の先生たちがあまりにも親切にしてくださったり、韓国についてあまり興味ないだろうとおもった学生たちはけっこうなことを知っていたり先に近づいてくれたりして、とても楽しいなと考えることができました。来年、後輩たちにもこんないい機会ができるのを願いながらもっとがんばろうと

おもいます。そして大阪教育大学の学生たちも韓国の初等学校で教育実習することができればいいと思います。

チョ・ミンジュ

大平寺小学校

違う国にすんで違う文化を共有する外国の授業に参観するのは珍しい経験なので 2 週間のインターンシッププログラムはわたしにとって大事な経験でした。日本の学校の特徴もよく理解することができたしその長所も分かりました。学校のみなさんも暖かく対して下さって本当にありがとうございました。せっかく学校の子供たちとも仲良くなったと思ったのにこんなにお別れするようになって悲しいですけど自分自身の位置で頑張りながらまた会う機会があったらいいなと思っています。

チャン・ユンジョン

2 週間、今まで当たり前だと思って来たことを違う目で見ることができて、私には忘れられない、いい体験でした。私が今度のインターンシップを通じて新しく学んだことと成長したことを、日本での生活を私と共にした学生みんなと、先生方も感じるのを願います。いつもにこにこ顔をしてくれたみんなのおかげで私も楽しかったし、幸せでした。ありがとうございました。

クァク・ホイン

資料2 実習校教員対象のアンケート

ソウル教育大学グローバルインターンシップ

受け入れに関するアンケート

ソウル教育大学大学発展企画団
大阪教育大学国際センター

この度は大阪教育大学の海外協定校である、ソウル教育大学「グローバルインターンシップ」の実習生の受け入れにご協力くださり、誠にありがとうございました。今後のプログラム改善と国際交流発展のため、受け入れに関わってくださった先生方に、以下の質問にご回答いただければと存じます。アンケート結果はソウル教育大学・大阪教育大学が共有するとともに、匿名性に留意しつつ同様の報告書等に使用する場合があります。

1. 受け入れた学生の実習態度はいかがでしたか。

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1
非常に良かった 非常に悪かった

2. 受け入れに際し、日常業務への影響はありましたか。

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1
全く影響は無かった 大きな影響が出た

3. 今後、同様のプロジェクト（海外の学生の現場での実習）があれば学生の受け入れをしたいと思いますか。

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1
積極的に受け入れたい 絶対に受け入れたくない

4. 今回の学生受け入れや、学生自身の実習態度に関してお気づきの問題点等があればお書きください。

5. その他、今回の学生受け入れや、実習生との交流などの感想をご自由にお書きください。

6. 最後に差し障りがなければ校内での先生の職名・担当学年などを教えてください。

① 校長 ② 教頭 ③ 一般の教諭（ 年生担任） ④ その他（ ）

ご協力ありがとうございました。

第二の故郷へ

呂 航

教養学科 情報科学専攻

(平成 22 年度卒業 中国)

皆の人生の中で最も印象的な思い出とはなんでしょうか？私は自分の人生の中に一番いい思い出が大学の四年間だと思っています。人生の交差点に立ち、どう生きていくかが迷っていた時期もありました。大学生活を送りつつ、たくさんを知り、たくさんの経験を積み、半人前から一人前になりました。

ふと思いついたら、もう大学とサヨナラという時でした。まだ卒業のこと思いつかなかった時、社会人に憧れていましたが、大学に離れる時、悲しみが心から浮かんできました。

桜が満ちている国土に来たばかりの時、言葉も通じなくて、習慣も違うので、自分の将来はどうなるか全然わからなかったのです。最初怖くて、すぐ帰ろうと思っていましたが、いつの間に、自分がこの国好きになって、離れるのが怖かったのです。自分の学生生活を振り返って、汗と涙で作られた道に歩いてきて、自分人生の中最も重要な宝物になりました。半人前の自分を一人前に育ててくれて、世の美しさも感じ、きつさも感じました。一円でも汗を掻かないともらえないことを知り、お金の重さを感じました。いつの間に自分が洗濯も部屋掃除もできるようになって、両親の苦労を知りました。今までのすべてが日本そして大阪教育大学のおかげです。

感謝！ただの二文字なのですが、この中に私は日本、大阪教育大学そしてお世話になった先生たちにすべての思いが含まれています。

学業や生活に困った時、長谷川先生が助けてくれて、あの暖かさ一生心に刻み、忘れないのです。百年一回ともいえるくらいの金融危機と闘いながら、就職活動をやっていた時、内定なかなかもらえなくて、心の焦りに囲まれた毎日で、もうこのままでやめて中国に帰ろうと思った時期もありました。キャリアセンターの先生に丁寧にアドバイスをしてもらって、やっと7月に内定を貰いました、即先生たちに報告していた時、本当に心の底から嬉しくおめでとうと言ってくれました。あの時本当に感謝の気持ちもいっぱいいっぱい涙ぐみました。

もう残り時間わずかなのですが、最後に一言だけ言わせてもらいたいです————

日本、そして大阪教育大学、ずっと愛してくれてありがとう！

我人生中最美好的 4 年，是**在这里度过的**——**这里是我的母校，是我人生中最重要**的转折点。当我**饱含着很多抑制不住的情感提笔写字的时候**，才**恍然间发现马上就要与自己的大学生活说再见了**。尽管之前一直憧憬着走入社会，但一**面对离别**，心里那些莫名的**伤感就像潮水般翻涌着，满满的留恋浸透着我，让我在人生又一次开始的时候百味丛生**。

这个**开满樱花的美丽国度**，曾经是如此陌生，陌生得**让我无所适从**，看着那**一张张不同颜色的面孔听着不同音调的语言**，我曾经很茫然，不知道我的未来是个什么**样子**。从想赶快离开到**爱上并舍不得离开**，甚至想把自己整个青春都留在这里，我**仅仅用了 4 年的时间**。我**现在可以骄傲地回首，坦然地回顾自己走过的路**，那些用汗水和泪水浸湿过的路，留给我的**是人生中最重要**的财富。**这四年里**，从青涩的男孩到依然青涩的男人，让我明白了世界的美好和残酷，我知道了哪怕是一毛**钱**，也需要努力才能**换来**；知道了如果自己**不照顾自己**，就会**饿肚子**，衣服就会**发臭**，屋子就会**变成猪窝**；不知道是从什么**时候开始**，我学会了做饭，洗衣服，收拾屋子；也不知道从什么**时候开始**，**这些都慢慢的变成了习惯**。这里没有母亲的慈爱，父亲的呵护，只有现实的磨砺和那些能够真正让我成长的环境，在这里，我真正明白了什么是**爱.....**

小学时，总是抱怨父母**不给我买喜欢的玩具，爱吃的零食，总管着我写作业，早睡早起**。上了中学，懂得了父母的好，明白了他们对我**要求严格，是为我好**。但**那时候的我**是无法真正体会到他们的**爱是多么的深沉**，**妈妈每天为我早起做饭，晚上给我铺床盖被**，毫无怨言地洗干净我的每一件衣服，跟在我身后擦干净地板上的每一粒灰尘，省下他们想买的东西而满足我的需求，而**这些小事都会因为习惯而让我无视这些存在**。直到自己尝到了**艰辛**，才明白父母的伟大。来到了一个想**依赖父母却依赖不到的地方**，我才懂得，那些自己平时不放在眼里的小事**对自己是多么的重要**。如果没有留学，也许到**现在我还能完全懂得这些**。

感激！这是我对**这个国家**，对**在这个国家帮助过我的人**最想说的两个字。

4 年的大学生活，**经历过无数的欢乐和痛苦**，被大学**录取的欣喜**，得了**奖学金的惊讶**，**成绩没考好的郁闷**，被老师**关怀的感动**。在我生活拮据时，老师**主动帮助我**，那种温暖**一辈子都会写在我的心上**；我们遇上了百年不遇的**金融风暴**，**求职内定几率变成了历年最差的+ -50%**，当时的我几乎整天被**焦躁、心烦、纠结的压力包围着**，当**简历投出如石沉大海一去无踪时**，那种失望，低落的情绪如阴霾般**持续在我的生活中半年之久**。就在我想要**放弃的时候**，留学生中心的老师们鼓励失落的我，**给我信心**，就业指导中心的佐藤老师**给我细心的指导**，我才恢复了状态，重新起步，终于在 7 月拿到了内定。把这个消息告诉老师们的时候，看见他们从心底为我高兴的时候，我只想说，大恩不言谢.....

马上就要离开这个**给我温暖、磨练、让我成长的地方**，尽管不舍，但是我知道，唯有走好未来的路才是我对母校最好的**回报**。

一歩一印

LEE Chen Han

教養学科 情報科学専攻
(平成 22 年度卒業 マレーシア)

8 年前に「おかん、オレ日本で留学したい。」私が母に言ったことでした。これで、私の人生にまた新しいひとつの道が開かれました。

第一歩 過去

2004 年 9 月 30 日朝 11 時、家族と友人たちの期待を背負い、夢に向かってはじめての一步を踏み出しました。日本語学校の頃、1LDK の六畳の部屋にベットと机が提供され、そこで私は人生新たなスタートを始めました。

思い出せば、自分がやっていたことのいろいろな過去はまるで昨日のようでした。

- 日本語学校でひらがなのあ、い、う、え、お、から初めての日本語--「これはなんですか」を話した時。
- 先生に迷いもなく「国立大学へ行きたい」と言った時、周りのみんなに笑い話とされた時。
- 40 軒の店で面接を受けて、やっとアルバイトを見つけた時。
- 日本で初めて恋をした時。
- 日本留学生試験を受けて、予想よりできが悪かった時。
- 初めて大学の入学試験が落ちて、落ち込んでいた時。
- 大阪教育大学と J L P T 日本語能力試験 1 級同時に合格と発表された時。
- 大学生活を始めた時。
- 初めて奨学金を推薦されて、また却下された時。
- 初めて 100 万円の借金を背負った時。
- なぜ頑張ってもいいことないはずと自分に問い続けていた時。
- 祖父の最期を見られなくて、ずっと自分を責め続けていた時。
- 学費を納付できなくて、除籍されるところで、友人に助けられた時。
- 留年すると決めた時。
- 就職活動で苦しんでいた時。
- 初めて内定通知をもらった時。
- いよいよ学生生活とお別れと感じた時。

第二歩 現在

ここまで歩いてきて、お世話される側からお世話する側になるまで、仲間との出会い、別れ、楽しいことも、苦しいことも、もう一行や二行の文書で書き終えることはありません。

こんないろいろな過去の中、いろいろな人と出会い、一緒にいろいろな経験をしてきたおかげで、現在の私がいます。私はいつでも一人ではないと感じさせてもらってきたこれらのいろいろな人、これらのいろいろなことに深く感謝します。

第三步 未来

これから、歩いていく道はまだまだいろいろな未知数があると思います。その未知数があつたからこそ、人生が面白くなると思います。そして、初心を忘れず、常に未来を挑戦し続けていきたいと思っています。

That was 8 years ago, “mum, I wanna study abroad in Japan.” the words that changed all my life and paved a brand new way in my life.

The first step PAST

11:00am on September 30, 2004, burdened with all the expectations of my family and friends, I step out the step forward toward the dream of mine. And I started my brand new life from a 1LDK with six tatami mat room and there was only bed and desk are available.

Think about the past, there was many like just happened on yesterday.

- When started with hiragana's あ、い、う、え、お、until “これはなんですか” the first nihongo which I spoke.
- When without any thinking, and told my teacher that I wanna go to National University, and because of these stuff I had been laugh by all the people around me.
- When found a part time job after interview 40 stores.
- When the first time fall in love at Japan.
- When after taking the EJU and felt I did worse than I though.
- When felt down at the first time I failed a University entry exam
- When the pass announced of the Osaka Kyoiku University and the JLPT level 1 had been announce at the same day.
- When started University life.
- When the first time has been recommended for a scholarship, and also declined at the same time.
- When carrying a debt of 1million yen.
- When asking myself why even I work so hard, that's nothing turn better.
- When always blame myself that I could not see the last of my grandfather.

- When I was going to expulsion by University because of unable to repay the fees, and helped by my friend.
- When decided to repeat the year.
- When I was suffering from job hunting.
- When the first time I got a offer letter.
- When the time I felt to say good bye to my student life.

The second step NOW

Until now, from the situation that been taken care of until the situation of taken care, meeting a new friends and farewell, having fun together and painful together, this kind of stuff that's not 1 or 2 letter can describe all the emotion.

Like many in the past, and meeting various people, thanks to the various experiences have been together, and I have today. And all those gave a feeling that I'm not alone, I'm really thanks to you guys, thanks you.

The third step FUTURE

Now, the way I walk which still many unknowns. Precisely because it was unknown, that life is interesting. I will not forget the first intention, I hope to always continue challenge the future.

日本、私を成長させた国

姜 嵩岩

教養学科 自然研究専攻

(平成 22 年度卒業 中国)

何も分からないまま来日し、なんとか日本で暮らし、後悔なく帰る。

2004 年 10 月 5 日、日本という島国と出会って以来、自分の心と身はもう高校を出たばかりの時の私ではあるまい。日本にいたこの 6 年間、人と人、家と家、国と国の間にどうすれば協力で心を同じくし力を合わせて生きられるか、徐々に分かるようになってきた。人と人の紛争、家庭内の口論、国と国の戦争を解消するなら、「和・諧」という考え方で生きるべきであろう。

現代社会の「和・諧」は古代の「柔よく剛を制す」に相当する。この「柔」という意味は和やかな雰囲気と水のように浸透することである。

中国戦国時代の思想家・老子は「柔よく剛を制す」を提唱した。「人間は、柔らかく水のような性格で生きるべきだ。」という思想で世中の人々に助言したのだ。老子の思想は柔弱謙下と無為の治をめぐって展開される。柔弱という言葉は、字面からの理解で柔軟、脆弱の意味であると考えられるが、老子の本当の意思是、人が和やかな態度と穏やかな質で世間と付き合うべきというものである。人間は水のような性格で生き、辛いことであろうと悲しいことであろうと自分自身の感情を抑えながら、同僚や親子や友人、マスコミなどとの交際関係を調整し浸透するべきである。

謙下という言葉は、謙遜・尊下の意味である。謙遜な態度で上司や先生と触れ合いながら、部下や年下に対する尊重も心がけるべきである。このようにしてこそ、人との触れ合いはもっと心地よくなれる。

人間は、人と人が関わり合いながら社会生活を営んでいる。その人間社会では、「人」をどう考えるかが重要な課題になる。その「人」は皆幸せでありたいと願っている。平和で穏やかに生きたいと思っている。家族であれ企業であれ、両方とも社会的な存在であり、家族の実体は親戚の集合体であり、学校の実体は学者と生徒の集合体であり、企業の実体は、社員の集合体であるから、その強さは、一人一人の強さの総和によって決まる。したがって、その社会生活におけるすべての集合体は丸く、強く生き、集合体にいる人間はお互いに柔弱謙下で頑張っていくべきである。

人間の体は骨、神経、臓器、血液、骨格筋からなっている。骨の固さは体型を維持する役割を果たしている。神経、臓器、血管などの部位は柔らかく身体の各部位に連絡使とし

て働いている。その柔軟さを失うといろいろな疾病を患うに違いない。したがって、その人間の体におけるすべての集合体はスムーズに動けるとしたら、各部位の柔軟さが存在しなければならない。

世間では、「雄」は男性的の強さを示し、「雌」は女性的の柔弱さを示す。いくら男性的で剛のような強さがあっても女性的な柔弱さを失うと事業が完成できなくなる。これらのことにより、水のような柔弱さは古代だけではなく、現代社会にも適用している。指導者や上司は人を見下すような態度を取らずに、知恵と能力を内に隠し、衆人のなかに溶け込み、彼らの苦難と快樂を体験すれば、衆人に認められる。衆人の信託をもってこそ、事業をうまく進められる。「柔よく剛を制す」という思想は現代人、特に高い地位にいる人々に啓示されている。社会の一員とし、これからどのような態度で生きるか、どのようなたちで人と付き合うかもっと真剣に考え直す必要があると思う。



言語の多様性で世界を豊かに

石 沂涵

大学院教育学研究科 国際文化専攻

(平成 22 年度修了 台湾)

私が日本語を始めたきっかけは、ある漫画週刊誌であった。当時、教師になる夢を持っていて、まだ中学生だったが、卒業を迎える頃、急に未来のことに対して焦りを感じていた。そこで、たまたま購読していた漫画週刊誌に日本語の特別講座が載せられていて、私はそれに惹かれた。日本語の全くわからない私であったが、表音記号に従い、ぎこちない発音を繰り返していく中、日本語の面白さが伝わってきた。このように、日本語が当時の私の生活の中に占める部分が益々大きくなって、日本語学科のある高校に進学することを決めた。そして、大学でも引き続き日本語を専攻し、幅広く日本語に関わる学習を続け、夢中だった。当時、文型に対する解釈について、よく先生に質問したりした。時に一つの言葉の意味が気になって、居ても立っても居られず、納得するまで、没頭して調べた。熱中するあまり、同級生が冗談で私の事を「問題児」と名づけた。

私は、日本語の背後に隠されている深い文化に引かれていることを自覚している。しかし、文字や言葉遣い等が妙に気になるのは何故でしょう。度々それを思うと、自分でも理由がわからず、ただ不思議に思っていた。

大学三年の春、私は日本学生支援機構から奨学金を獲得し、九州の別府で一年間の短期留学をした。あの一年は私にとって、かけがえのない貴重な一年であった。私は、多国籍の人々と交流ができ、地元のイベント、文化体験、また旅行等を通じて、さまざまな人と出会い、日本という国を再認識させられた。と同時に、日本語講義以外、日本人学生と一緒に日本古典文学、近代文学、異文化コミュニケーション論等の講義を受けていた。そこで、私はあることに気づいた。

私は、言語が人々の交流を進める一つの「言葉」として成り立っているとずっとそう思っていた。そして、言語と文化は表裏一体のものであり、外国語を学ぶことはその国の文化を学ぶことだと思っていた。しかし、そのほか、言語自体の表現力、言葉で言い尽せない、語りきれない「交流」も言語行為に括られている。私はその言語を越えた言語行為に惹かれ、興味を抱くようになった。日本で留学生活を送るうちに、日本語は私にとって、もはや単なる「知識」「専門」ばかりではなく、日本文学における言語行為への関心が益々高まった。

大学卒業後、私は研究生として、大阪教育大学の国際文化専攻・日本アジア言語文化研究（以下「日ア」と略称）に入った。知識等を少しずつ身につけ、その後、順調に院生試験に合格したが、日本語の問題はともかく、文学の世界は、ずっと日本語を専攻としてやってきた私にとって、馴染みのない領域だった。一年の研究生をやっている間、自分自身の不足を補う事がなかなかできなくて、悔しい思いをしていた。聞いたこともない古文表現、時代による言葉の意味の移り変

わり、日本語に深く関わっている漢文の学習、日本近代文学の変遷の過程や研究方法等、大阪教育大学での最初の二年間は、その学習に相当苦勞をしていた。

しかし、その大変さは毎回、研究室に入ると解消される。なぜなら、先生の方々を始め、学部生、院生たち、私にとって頼りになる先輩が多く、日ア研究分野は、いつでも相談できる家族のような雰囲気である。研究発表等に追われながらも、日アの研究室は、いつの間にか私の心の中のオアシスとなった。

相変わらず、日アにいても私は「問題児」であった。しかし、日アの先生方は常に熱心に指導してくださったり、議論に付き合ってくださったり、私は、日々自分の成長を実感し、自分に興味のある分野を一層深く学べるようになった。

日本語の美しさやリズムを体感させる作品によって、日本語の特有の表現力、日本語の美しさ、豊かさ、奥深さ等に気づき、言葉のもたらす力を味わうことによって、少しずつ言語感覚も磨かれていく。そして、文学研究また討論を通し、考え続ける力、また自分の考えを深めたり広めたりすることもできた。文字による伝達、またそれを読み解き、自ら思索をまとめて書き表す力を身につけた。そのほか、文学作品を読むたびに、なぜか真正面から、自分との対話、自分のことを見つめることができるような気がした。作品を読むこと自体、まるで鏡を見ているようで、とても奇妙な感覚を覚えた。

日本文学の出会いによって、自分自身の視野が広がると共に、自分が枠を越えて成長することができた気がした。一つの作品から十人十色の世界が見えてくる。私の指導教官の石橋先生が、それが文学研究における醍醐味であると語っていて、柔軟性を持ち、あらゆる可能性に境界線を引かずに、それを飛び越える試み、またその姿勢は大事なことだと教えてくださった。

私の敬愛する大正時代の作家である芥川龍之介が、嘗て自分の作風に限界また危機感を覚え、「芸術その他」にて次のように語り、自戒していた。「進歩しなければ必退歩するのだ。芸術家が退歩する時、常に一種の自動作用が始まる。と云ふ意味は、同じやうな作品ばかり書く事だ。自動作用が始まったら、それは芸術家としての死に瀕したものと思はなければならぬ」。芥川龍之介の言う「自動作用」は同じような作品ばかり書くことを示しているが、その「自動作用」は、言わば「固定化」或は「パターン化」による退歩の意味であるとも考えられる。私はその言葉に非常に深いものを感じて、常に心に刻んでいる。

私はこれからも、日本語を通じて、文学と長く付き合っていきたいと考えている。そして、文字言語によるコミュニケーションの醍醐味、言語自体の奥深さ等について、多くの人と分かち合えればと思う。普段何気なく見ている世界をもっと広げていきたい。そういう期待を自分の目標にして、着実に前向きに踏みしめながら、心を広くして、いろいろなことに挑み、自分なりに頑張っていこうと思う。

私の宿舎生活

郭 華

大学院教育学研究科 国際文化専攻

(平成 22 年度修了 中国)

私は、2003 年 10 月から日本の留学生生活を始めました。最初の一年半、日本語学校で日本語を冒頭に勉強しました。努力は人を裏切りません。2005 年の春に、大阪教育大学の文化研究専攻の欧米言語文化コースに合格しました。その時のわくわくした喜ぶ気持ちを今でも忘れません。学部の 4 年間、そして大学院の 2 年間を経て、来月の卒業式を迎える私にとって、大阪教育大学で過ごしてきた 6 年間は一生の宝物です。

大阪教育大学には世界の各国から来られた留学生がいます。みんなは日本語の学習や文化交流などの目的を抱き、日本に参りました。大学キャンパスに建てられた留学生宿舎はもっとも留学生たちが交流活動を行う場所です。私は幸運なことにここで二年間過ごしました。最初に私の隣に住んでいたのはタイから来た交換留学生ジラーパでした。若かった彼女は、両親と離れ、初めての異国生活することになかなか慣れません。偶に台所で彼女の寂しそうな姿を見かけて、私は声をかけました。それから、ジラーパとよく一緒に食事を作ったり、大学で散歩したりして友達になりました。話の間に、ジラーパは猫が大好きなことを知りました。私とジラーパは宿舎の玄関に住む一匹の猫ちゃんの面倒を見始めました。私たちはこの猫ちゃんをミミダンと名づけました。そのきっかけでいつも大学の猫の面倒をみる原田さんと知り合いました。原田さんは時々私たちを家で招待し、私たちをグルメ旅に連れて行ってきました。ジラーパはだんだん新しい留学生活に馴染めるようになりました。率直であるニコニコ笑うジラーパは本当に可愛いです。短い一年間が飛んでしまいました。ジラーパと別れなければならないときは気づかれぬように来ました。ジラーパの修了式に原田さん夫婦が出席し、ジラーパを抱きしめて励ました。ジラーパが帰国しましたが、私たちの友情は終わらないです。2008 年、私は原田さんと一緒にバンコクへ飛び、ジラーパと会いに行きました。再会の喜びは何よりのものです。遠くに離れても、私たちは永遠の仲間です。

2010 年 4 月に私は五位堂の宿舎に引っ越しました。そこに住んでいる周有艶さんと知り合いました。周さんは中国の同済大学から来た交換留学生です。私と周さんは偶然に生協食堂の前に置いてあるヨーロッパ民族舞踊サークルのチラシを見つけました。二人はサークルに参加することにしました。ヨーロッパ舞踊は集団ダンスであり、人数が多ければ多いほど精彩的に見られます。サークルの先輩たちは私たちに丁寧に教えてくれて、覚える

までに繰り返して指導しました。夏休みに、大阪市立大学で行われた関西地方の各大学の新人発表大会で、大阪教育大学の新人代表として私と周さんは初めて舞台に立ちました。わくわくしながらドキドキしました。その後に、11月の神霜祭のために、日々の忙しい練習に夢中になりました。サークル先輩たちの協力で神霜祭の出演は大成功でした。



私たちは大阪教育大学で知り合い、共に楽しい日々を過ごしていました。私たちの友情は大阪教育大学で芽生え伸びました。そこで国籍を問わず、人種、宗教、文化を越え、私たちは仲間です。世界のどこにいても大阪教育大学の思い出を忘れません。私たちを育て上げた大阪教育大学に心から感謝します。



雑談

朴 鍾鎮

大学院教育学研究科 芸術文化専攻
(平成 22 年修了 韓国)

私ももう三十歳になった。ここで私の年など知らせるのは可笑しいと思うかも知れないが、年に敏感な私にとっては大事な問題である。私はずっと三十歳になると仕事をちゃんと持っていて、誰かと一緒に楽しい人生を過ごしていると思ってきた。そして、現実とは違っても、今の自分の姿が嫌いではない。

日本も似ていると思うが、韓国は一律的な社会である。どんな話かというと、韓国の大学を見ると皆一生懸命勉強しているが、何を勉強しているかを見ると、就職のための勉強の場合が大半である。夢がない社会と言えるか。いや、夢がないわけではない。夢を知らない社会だからだ。大企業に働くのも、弁護士や医者、それとも公務員になるのも良い。でもそれが本当に自分のしたいことか、敢えて考えようとはしない。群れの中に混ざって考えなしに導かれているに違いない。いつからこうなったのだろう。

私は何カ国かの国を辿ってきた。「世界が見たいから」や「様々な言語がしゃべりたい」などの明らかな理由もあったが、実は自分を探してきたと思う。私は夢を失ったのである。今も夢など持っていない。興味はいろいろなところにあるが、夢と言えるものはまだみつけない。何故だろう。社会のせい。教育のせい？それとも自分のせいだろうか。誰の責任かなどは関係ない。一度この世に生まれた以上誤解ない人生を過ごしたい。

日本で夢を見つけたわけではないが日本で視野をもっと広げたのは確かである。それが日本のおかげか自分が成長したからかは分からない。そんな年になったからかも知れない。しかし、日本で私は心を開くことや人生に対するもっとゆったりした生き方、そして様々な新しいことに絶えず挑戦する姿勢を身に付けた。今からの人生がどうなるか私には分からない。分からないこそ面白い。私は自分の人生のハンドルを自分が握っていることだけでわくわくする。

ここで終わりたいが、字数が足りない。では私が日本で経験したことの中で記憶に残ることは何か思い出してみよう。

1. 新しい勉強：

私の大学の専攻はフランス文学・言語だった。大阪教育大学での修士課程の専攻は芸術学。美学（美を研究する哲学）だ。新しい専攻を修士として勉強するのは思ったほどたやすいことではなかった。しかし、私は皆に哲学を学ぶことをお勧めしたい。哲学は世界を見る眼鏡である。サングラスをかけると見える色が変わるように、哲学を学んで自分だけ

の世界を見る方法を知ると、人生の生き方、いやそこまで行かなくても生活のなかで接する様々なことに対しての考え方が変わってくる。人間なら考えることは誰でもできるが、自分に合う考え方を見付けるのには訓練が要る。哲学はこの訓練の様なものである。

2. 新しい活動：

日本に来て様々な友達ができが、ハイメというチリ人がいた。彼はラジオの DJ などをしていて月曜日にはパーティーを開いていた。そして彼は外国人の即興コントグループのメンバーだった。彼に誘われてそのコメディアーを見に何回か行ってから、まもなくオーディションまで受けるようになった。メンバーの一人になってから初めてステージというところに立ってみた。聴衆を持つということが、あんなに興奮することでは知らなかった。今は脱退したが、その感覚だけは忘れない。私は、ステージに向いているかも知れない。

3. 様々な人との出会い：

人を除いてどんな経験ができるだろう。最も大事なのはやはり人との出会いである。日本での最も大事な出会いは指導教員との出会いである。当たり前の話だが、私が大阪教育大学を選んだのも教授のためだった。彼は私にとって師匠であり、また同時に人生のなかで数多く会えない大事な友達でもある。良い人に恵まれるより幸せな人生があるだろうか。最後に自分の家で世界の色々な人と出会う方法を教えよう。CouchSurfing.org というサイトがあり、毎日日本に来る世界各国の旅行者たちがよく利用している。私はずっと学校の宿舎かルームメイトがいたので、一人で住んだ平成 22 年の夏しか経験していない。しかしその僅かな数カ月の間、様々な人が私の部屋を訪ねてきた。その中には大事な友達もできたのである。異文化を経験すればするほど、心が開くことを感じる。



一年間の思い出

劉 羽潔

交換留学生

(平成 21 年度 中国 東北師範大学)

日本に来た時のことは、まるで昨日の出来事のように覚えています。周りは今まで吸ったことがないような空気で、なんとも新鮮でしたが、心細かったです。あっという間に帰国の準備に追われる時期になりました。複雑な気持ちでいっぱいです。この一年間の留学は、自分の生活のあらゆる方面において大きな影響を与えるすばらしい体験となりました。人生の中で初めての留学、異国での生活は非常に新鮮に感じられました。

4月1日の夜、日本についた私たちは知らないうちに柏原キャンパスの山に着きました。初めて山登りしたとき、自分はこんな立派な山に住んでいると意識しました。その頃、キャンパスの中ではどこでも満開の桜が見られました。ひらひら落ちる空中の花びらも、地面の上に散らばった花びらもとても綺麗でした。このように桜の時期から留学生活が始まりました。

この留学において最も印象深いことといえば、やはり「生きた言葉」に触れてたくさんのことを学べたことでしょう。例えば、日本人の学生と話すとき、レストランへ行くとき、買い物するときとする、教科書で習った言葉や会話をいくつか思い出して言ってみます。しかし当たり前であるがほとんど教科書どおりにはならないです。自分の想像で知る限り、最も意味を表しやすい言葉を使います。なんとか無事に様々なことを済まします。細かいことだが、私にとってはこれも生きた言葉に触れる貴重なチャンスでした。特に、大阪に住んでいて関西弁がどこでも耳にします。最初は全然分からなかったが、知らず知らずのうちに、自分でも少しだけ話せるようになりました。関西の特有な雰囲気でも元気に生活してきました。

私は大学で日本語専攻ですが、実際に留学する前に日本語を話すチャンスがあまりなかったです。日本にきたばかりとき、人の話しは聞き取れますが、時々言いたい言葉が出てこないから不安でした。しかし、周りの先生と友達は優しく、いつもゆっくり話してくれました。しばらくすると、状況はよくなりました。授業が終わってからも日本人の友達や外国人の留学生と仲良くなるなど、ふだんから日本語をしゃべるように心がけるようになりました。

この一年間で学んだのは、語学だけではなく、世界の各国の友達に恵まれ、いろ

んな国の考え方をを持った人々と接する機会が多くて面白いです。価値観などの差異があるが、異文化の影響を受け、コミュニケーションの能力が強くなりつつあります。育ってきた環境が違いますから、みんなそれぞれ個性を持ち、ほかの人の考えを聞きますと、まるで、まだ誰も読んだことない本を私は発見して読んでいるかのような気分です。

大阪教育大学での生活は、本当にこれまでの私の生活と全く違って、非常に充実している生活を送ることになりました。自由に授業を選択ことができ、留学生一緒にの授業でも、日本人の学生と一緒にの授業でも、本当に勉強になりました。国際センターの先生方、指導して下さった先生方、香芝のボランティアのみなさん、チューターさんたちの学問に対する真剣さに感動しました。生活の面でも、国際係の方に細かいことまでしていただいて、大教大が私たちの家だと感じ、国際係のみなさんは家族のような存在です。定期的な日本文化の体験会や国際交流会など、日本文化を楽しむことができます。留学生の奈良・神戸・北海道の文化研修も日本でのいい思い出になりました。

余暇を利用し、私はギターマンドリンクラブに入りました。週に二回の練習があって、音楽を通じて、日本人の学生と交流しています。実際にサークルに入っこそ、日本の大学生の真剣さが分かるようになりました。どんな小さい演奏会でも、一所懸命練習して頑張っている姿が見られます。みんなと一緒に笑ったり悩んだりする日々が絶対忘れられません。

何事にも積極的に参加してこそ、自分自身を成長させることができ、自信を持つようになります。留学中のみなさんに、ぜひ留学の機会を大切に、様々なことに挑戦してください。ここでたくさんの方と出会って、毎日充実していました。春の花見、夏の祭り、秋の紅葉、冬の正月。この一年間、日本の生活が体験できて、いい思い出をいっぱい作りました。帰国する3月は、また桜の季節を迎えます。これからの人生の旅は大阪教育大学から出発します。ここでの忘れられない思い出を持って、新しい世界を創りあげましょう。

自分の目で見た中国

金剛 岳大

教養学科 文化研究専攻 社会文化コース

(平成21年度 派遣留学生)

私は2009年9月からおよそ1年間、中国は上海の同済大学に留学しました。留学する前は、上海といえば、テレビで目にするような、大きな河が流れ対岸にビル群が建ち並ぶといった風景を想像していたのですが、この大学は上海市の楊浦区(yang pu qu)という郊外に立地していました。ローカル色の強い土地で、地元の人しか利用しないスーパーや、小吃(xiao chi)と呼ばれる包子(bao zi、肉まん)などのおやつを売るところも多くあります。郊外ですが、上海は公共汽车(gonggong qiche、バス)や地铁(di tie、地下鉄)が発達しているので、市内中心部へのアクセスは容易です。

私が留学を決意した理由には、自分の目で中国を見たかったということがあります。テレビに登場する中国人のイメージは自己中心的で、常にテレビを見る人の怒りを買うようなふるまいをしています。私の周りには中国の話題になると「中国人だから」「中国は嫌」と非難する人が多くいました。インターネット掲示板などの書き込みもひどいものです。私はいつも「みんなは中国に行ったこともなく、中国人の知り合いもないのに、なぜそこまで言えるのだろう」と思っていました。そして、テレビの情報に頼らず、自分の目で中国を見て、自分の言葉で中国人と話してみたいと思いました。

実際に中国で暮らしてみると、日本のメディアがいかに偏った取り上げ方をしているかがわかります。話してみると当たり前ですが同じ人間だということがわかりますし、私が困っている時はよく中国の方に助けてもらいました。良く言えば「世話焼きでおせっかい」、悪く言えば「おせっかいで口うるさい」というのが、私自身の持った中国人のイメージです。印象的なエピソードが、超市(chao shi、スーパーのこと)で箱のティッシュを買おうとしていた時、私は箱のデザインを見て決めたのですが、それを見ていたスーパーの店員の女性に「どうしてそっちを買うの？こっちの方が安いから、こっちになさい」と安い方を押し付けられたことです。「押し付けられた」と感じたのは、その女性がすごい勢いだったからです。売る側の人間が、客の買い物に文句をつけるなんてと思い、なんだか可笑しくなっていました。「ああ、これが中国なんだ」と、自分なりに中国に触れられた気がした瞬間でした。

長期休みには中国国内を旅行する機会もありました。旅行は基本的に一人で行っていたので、旅行から帰ってくるたびに中国語の能力が向上しました。上海からは

長距離列車や新幹線が各地方に出ており、もちろん国内線の飛行機もあるので、旅行に便利です。留学中に行ったのは蘇州や杭州、北京、天津や西安、一番遠いところで敦煌という砂漠の町です。北京で天安門広場を歩いたり、西安で兵馬俑を見たりということができた時には、歴史の教科書に載っていた場所に実際に来たのかと思い、不思議な感覚を覚えました。

上海の人々は自由で、日本人には住みやすい街といえます。そのため、あまりに中国になじみすぎて、逆にモラルがなくなってしまう日本人もいます。それは結局、異文化理解ができなくなることだと思います。中国で暮らすには、中国人になろうとするのではなく、日本人としての自覚を持ちつつ、中国の文化を理解し、それに合わせるということが大切だと思います。

高校生の時、私はもともと大阪教育大学志望ではなかったですし、まさか自分が中国で1年間暮らすなんて想像もしていなかったのもので、人生というのはわからないものです。私が中国留学を通して一つわかったことは、「やってやれないことはない」ということでした。初日はあれだけ不安だったのに、帰国する日の前日は、せっかく中国で生活する自信がついた頃に帰国しなければならないということを残念に思いました。

中国留学は、驚きと発見に満ちた1年間になりました。この留学の機会を与えて下さった、すべての方に感謝します。

タイ留学体験記

松浦 啓

小学校教員養成 5 年課程

(平成 21 年度 派遣留学生)

はじめに

私は、2009 年 10 月から 2010 年 3 月までの約半年間、タイのアユタヤにあるアユタヤラジャパット大学（以下、A R U）に留学していました。留学を終えてからもうすぐ 1 年が経とうとしていますが、留学している時のことを昨日のことに思い、時には日本で生活をしている自分が不思議に感じる時もあります。それだけ、タイに慣れ親しんだ証拠だと思い、タイでの留学は貴重な経験であったと感じています。

1．留学を決めた理由

留学は大学入学前から考えていました。高校生の頃、オーストラリアでホームステイをしたり、反対にホストチューデントとしてアメリカや韓国の高校生を迎え入れたりし、その中で、自分の知らない言語を話す外国の友達とジェスチャーを交えながら話したり、遊んだりする楽しさを感じていたからです。

しかし、私の通う大学は夜間大学で、卒業するのに 5 年かかります。さらに、私は 1 年浪人していたので、高校卒業後すぐに入学した 4 年制大学の人と比べれば、2 年遅れて卒業することになります。そして、留学すればさらに卒業が遅れると思っていたため、親に迷惑をかけるので留学は難しいと、半分諦めていました。

そんな時、実際にタイに留学した先輩と知り合いになり、留学について聞く機会がありました。そこでタイの留学は半年だけということを知り、卒業に差し支えないことを知りました。半年は短いものの、もともとタイに行ってみたいと思っていたので、こんなチャンスは二度とないと思い留学を決意しました。

2．目的をもつことの大切さ

私は、高校生の頃に経験したホームステイでは、あれもこれもといったように色々なことに手を出そうとして結局何もできなかったという苦い経験があります。そのため、今回の留学においては、「はっきりとした目的をもたなければ、何も出来ずにあっという間に終わってしまう」と感じ、目的をもつことを考えていました。今回はたった半年だということ、海外での一人暮らしの中で学校生活にも慣れなければならないということを踏まえ、その中でやれることは少ないのではないかと考えました。そこで、今回の留学は一つ、二

つのしっかりとした目的をもつことに決めました。

留学まで時間があるうちに目的を立てようとしたのですが、留学直前までバタバタしてしまい、結局その計画は崩れ去りました。そこで、タイを自分の目で見てから目標を立てよう決めました。タイに着き、大学が始まるまでの2週間は、会話手帳を片手にタイの街並みを歩きながら、食事や買い物をし、その中でタイの人と触れ合いました。そのような日々の中で次第に、「半年しか時間がないならとにかくタイを、そしてタイの人々を見よう」という考えに至り、今回は『見る』ことに重点をおくことにしました。そして、もっと深くタイに関わりたと思った時、もう一度タイに来れば良いと思うようになりました。

この『見る』という一つのしっかりとした目標があったせいか、学校の生活でも日々の生活でも意欲的に行動することができ、充実した留学生活を送ることが出来たように思います。

3．学校での生活

A R Uには留学生科というものがなかったため、私は教育学部に所属することになりました。授業はタイ人に交じって受けていたため、教室内の言語はもちろんタイ語でした。週一回、教育学部の先生に英語でタイ語を教えてもらうことになったものの、授業で何について話されているのか一切理解できず、「ただ座っているだけ」ということも最初の頃はしばしばありました。それでも慣れてくると、知っている単語を聞き取ってそれをもとに何を話しているのか推測することができるようになっていきました。日本の大学で習ったことを勉強することもあったので、ついていくことができた授業もありました。しかも、授業中理解できなかったところを、周りにいる学生が自分の知っている英単語を使って説明してくれることもあり授業は楽しく受けていたように思います。しかし、授業がよく休講になり、それは少し残念でした。

また、授業外ではタイの学生が、日本の漫画を持ってきて、「これは何て読むの?」と聞いたり、「私の名前を日本語で書いて」、「日本語を教えて」と言ったりしてくれるなど、タイ人の学生から寄ってきてくれたので親しみやすかったです。



留学中に週二回、小学校にインターンシップにも行きました。日本の小学校とタイの小学校の違いを研究したいという私の希望を言うと、大学の付属小学校が快く受け入れてくれたためです。そのため自由に授業参観をさせてもらいました。タイの小学校は色んな意

味ですごかったです。児童は本当に伸び伸びと思うままに生活をしていました。日本人が珍しいのか興味深々に私のところに近づいてきていきなりタイ語を教え始めたり、サインをねだられたりしました。低学年の児童らはタイ語がわかろうとわかるまいとほとんどタイ語で話しかけてきて時々思い出したかのように知っている英単語を使って説明しようとしたりしました。高学年の子は頑張って英語で話しかけてきました。そうです、タイの小学校では1年生の時から英語の授業があるのです。そういった幼いころからの英語教育が積極的に英語を話すことに繋がるのだと感じました。日本にはあまり見られない光景です。日本の小学生と比較するとタイ小学生の方が幼いかなと感じました。(タイの小学校5年生が日本の小学校でいう3年生くらいにあたると考えています)本当に伸び伸びと育ってきたんだな感じました。先生も先生で自由に働いていました。授業時間はいつも10分は遅れてきます。最高30分来なかった時もありました。その間先生は何をしているのかというとお菓子を食べたりしていました。授業開始の時刻に間に合っていたのは見ている限りアメリカ人のELTの先生だけでした。先生が来る時刻が授業の時間だと生徒は勘違いをしています。もちろん静かに待つわけもなく騒ぎながら先生を待っています。それはどの学年も同じでした。授業が始まったのもつかの間、授業中に先生の携帯が鳴ると電話に出てすぐに教室から出て行きます。優先させるのは携帯電話なんですね。私はその光景を、先生も自由なんのだなあといつも感心・・・いや呆れて見ていました。先生がいなくなった教室はまた騒がしい状態に戻ります。そして先生が帰ってきて騒いでいた児童に罰を与えます。所謂体罰です。私はその光景を見て、どうして日本が体罰が禁止になったのか初めて理解しました。叩かれ慣れすぎると児童は叩かれればそれで済むと思うようになり自分の行為を反省しなくなるのです。いい意味でも悪い意味でも小学校にインターンシップに行ったのは良い経験になりました。また、給食を食べさせてもらったり、社会科見学があるとタダで昼食付きで同行させてもらったり(時には外国人だと日本円で3000円くらい払わないと入れないところにもタダで見学したりしました)し色々の良い経験を積むことができました。



また、ARUには日本語学科があり、日本語を話すことができる学生が多くいました。タイに来た当初、アユタヤを案内し遺跡見物に連れて行ってくれたり、祭りがあると祭りに連れて行ってくれたり、タイ語を教えてくれたりと色々な面でサポートしてくれました。日本語学科のイベントのため、よさこいソーランを教え、発表会で彼らと一緒に踊ったこ

ともいい思い出です。

4. 日本で感じていた当たり前のこと

タイに留学してから、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前でなくなりました。例えば、日本では子どもの頭をなでます。しかしタイではなでません。なぜなら、頭の上には神様がいると信じられているからです。また、日本で“シャワー”と聞くと誰でも熱いお湯が出るものを思い浮かべ、私自身それが当たり前のことだと思っていました。しかし、タイではシャワーと言えば水が当たり前なのです。熱いお湯がでるシャワーは“ホットシャワー”と言います。そして何より驚いたのがトイレです。日本では、トイレの紙は水と一緒に流すのが当たり前ですが、タイでは水と一緒に流すとすぐに詰まるため、紙はトイレの横にあるゴミ箱に捨てるのが普通です。私が挙げたものはほんの一部であり、まだまだ私の知らなかった違いが存在しました。

このように、自分の当たり前の行為や習慣が、海外に出ると非常識であったり、タブーであったりすることはよくあります。その「当たり前」の違いの中で、日本の良さ、タイの良さを感じていたように思います。タイの習慣は、日本人からすると不快に思うものもありますが、このような習慣の違いは留学したからこそ分かったものであり、見つけるのが楽しい部分でもありました。そして何より、「当たり前」と思っていたことがそうでなかったと分かった時、更に留学した国であるタイの文化、タイ人の考え方を理解できた瞬間ではなかったかと思います。

おわりに

留学を終えてもう1年が経つのだとしみじみ思い、書いているうちにまた留学したくなりました。もう一度、あのゆっくりとした時間を過ごしたいです。嫌なこともたくさんあったはずですが、今となれば楽しい思い出です。

この留学の経験を得て自分の進みたい方向性がハッキリと見えてきました。道が見えただけでもこの留学は成功したといってよいと思います。

後は残り1年の大学生活を楽しみながら進む道にそって歩いていきたいと思っています。

まだまだ書きたいことがたくさんあるのですが、きりがないのでこれで終わりたいと思います。

P.S

留学を控えている方へ

留学が自分にとって最高のものになるか、はたまた最低なものになるかは自分次第です。楽しいことと同じくらい嫌なこともあると思います。戸惑うこともあると思います。しかし、それら全部含めて“留学”です。嫌なことがあったら是非怒ったり泣いたりしてください。ぜひ現地でできた友達と精いっぱい笑い、ケンカしてきてください。その方が絶対に

楽しいですよ。

留学を考え行こうかどうか悩んでいる方へ

悩むくらいならいった方がいいですよ。ぜひ行くべきです。留学してマイナスになることはないと思いますよ。楽しい経験があなたを待っています。

がんばってください！！



この留学は一生忘れません！！

留学体験談

加賀 奈穂子

大学院教育学研究科 英語教育専攻
(平成 21 年度 派遣留学生)

留学動機

私は、2009 年 8 月～2010 年 5 月の期間、ノースカロライナ大学ウィルミントン校(UNCW)に留学していました。留学動機は、研究分野である小学校外国語活動をより広い視点からとらえること、そして自身の英語力を磨くことにありました。そのため、「自由で多様」といった 印象の強い米国では是非、母語を英語とする現地の国語教育を学びたいと感じたのです。UNCW は、米国でも高い評価を得ており、また豊富な講義と教育実践教員養成課程を持つということから、強く希望しました。広大で美しいキャンパスと、海岸沿いの自然豊かな地域という特性も魅力の 1 つでした。



壮大な景色と穏やかな空気に癒されます
(キャンパスから車で 30 分ほど)



国際寮に住む留学生の友達と。

学生生活

留学期間中は国際寮に住み、12 カ国を越える仲間たちと暮らし、まさに異文化理解を肌で感じる毎日を過ごしました。オンキャンパスの生活は、教室、図書館、カフェテリアやスポーツジムなど何れも近く、非常に便利でした。私が見たアメリカの学生たちの生活は、平日はみなさん、24 時間開館しているキャンパスの図書館で熱心に課題に取り組み、週末はパーティーや海など、楽しい時間を過ごすといったように、非常に「メリハリ」がありました。そうしたリズムの中で勉学とその他の経験の両方を充実させることもまた、私にとっては一つの貴重な学びとなりました。

教育学研究

UNCWの教育学部では、私は学部と大学院の講義を合わせて週に3～5コマ受けました。学部の講義はとても丁寧な指導のもと、実践的な指導法をきっちり理解することができました。また、多くの講義では現場での教育実践が課されていました。そのため、私自身は、ESL 児童の言語発達の研究を2ヶ月間（週2回程度）、国語教育の実習と児童文学のアクションリサーチをそれぞれ小学校で12時間、また就学前教育の視察など、様々な教育現場に出向く機会を戴きました。ホームレスシェルターという施設で仕事や家を失った家族たちとの関わりを主としたボランティアも、授業の一環で継続的に行いました。その一方で、普段の大学院の講義では少人数制の中で活発なディスカッション、発表、そして執筆を中心とした勉強を行い、素晴らしい人格と知識を持った先生方と実践力のあるクラスメートに囲まれ、刺激的な環境で学習することができました。ディスカッションの参加は難しい時もありましたが、留学前に大阪教育大学で得た日本の教育についての知識や、専門知識を身につけていた背景は非常に有益であったと心から感謝しました。言語的な壁は前提としても、そうして自分自身も周りに劣らない知識と力を持って学問に邁進し、講義に貢献することができるということは、「大学院生」として留学へ行く強みでもあり、また醍醐味であるようにも強く感じました。



実践研究で関わってきた1年生のクラスと。子どもたちからのハグや可愛い笑顔は、私の元気の源でした！

おわりに

今回の留学は、当初の目的であった小学校外国語活動への示唆的な学びや英語力の向上といったことを始め、支えてくださった現地の先生方や友人、子どもたち、読み漁った文

献の数々との出会いによって、一生の宝物となったと確信しています。

本留学の実現は、沢山の人々のサポートがあってこそ可能となりました。この機会を与えてくださった大阪教育大学に、そして多大なご協力をくださった国際センターの方々、大阪教育大学の先生方、応援してくれた友人と家族に、この場を借りて心から感謝を申し上げます。

2011 年の春より、私は日本のとあるインターナショナルスクールにて教諭として奉職いたします。そこには、英語に戸惑う子どもたち、帰国子女として 2 カ国以上の文化を持ったアイデンティティに向き合う子どもたち、そして日本に移り住んで間もない他国籍の子どもたちまで、実に多様な児童が通います。

そうした学校で、私が子どもたちと共に歩むとき、何を思い出すか。教師としてつまづいたとき、または成功したとき、何を振り返るか。その答が、この 10 ヶ月間に詰まっています。

のんびり、ゆったり、自立の国

—スウェーデン留学体験記—

角田 萌

教養学科 芸術専攻 音楽コース

(平成 21 年度 派遣留学生)

1. はじめに

私がスウェーデンに約 10 カ月留学していたのは、平成 21 年 8 月 21 日から、翌年 7 月 1 日までの事である。現在帰国後 8 カ月が経過した時点でこの原稿を書いているが、帰国直後からも同様に、留学中の出来事が今でもあらゆる意味で夢のような出来ごとに思い出される。それほど、異国の文化に身を浸らせ暮らしを送るという経験は、例え 1 年にも満たない期間であるにしろ、新鮮で驚きに満ちていて、それまで身につけてきていた常識を軽く飛び越えさせてしまうようなところがあったのだと思う。私が留学を志望した理由は、一つは大学に入り、それまでの学生生活では閉じていた人との関わりが活動の場が広がり、様々な年代や世界で暮らしている人たちとの関わりへと広がるにつれ、自分の生き方について深く考えるようになったことがきっかけにあると思う。ちょうどそれが就職について考え始める時期と重なった時に、それまでの学生生活でも感じていたこの国（日本）で暮らしていて、「常識」や「当たり前」に捉われた社会のあり方や人の動き方がここには多くあるような気がして、大学を卒業しその社会へと自由に身動きの取れない状態で入ってしまったのは、ここでの「当たり前」を自分にとってのあらゆる「当たり前」として一生を過ごす可能性のあることに、非常な危機感を抱いていたこと（もっと世界には色んな人の生き方や考え方があるのではないかという予感）、また、仕事などのしがらみにとらわれない全く自分次第の状態での別国で長期滞在出来るのは、今の時期しかないのではと感じていたこと、また他には、勉強してきた教育の観点で、この揺れ動く今の日本の教育の時代に、別国の教育を知ることによって何か将来的な幅広い視点が得られるのではないかと考えたこと、あとは非常に私的な、親元を離れて一人暮らしがしてみたい、スウェーデン社会を動かすスウェーデン的思想が好き、それまで一度も行ったことがない国である、言語が面白い、など様々である。そして行ってみて、結局どうだったかというと、期待より得られなかったこと、(ここではもっと自国で積むべき教養、経験の必要性を大いに感じた)、期待以上に得られたこと、これまた、様々である。ただ、留学中あるいは帰国後経験した、たくさんの刺激に囲まれた日々はそろそろ過ぎようとしている今でも、まだまだ思い出し比較することで見つけるこの国の特徴や客観的な視点などは日々更新されるところがあり、ああ、これは恐らく自分の人生にとってこの留学経験というものは、どこで生きようがどこに行こうがいつまでも続く、一生の財産になるのだろうと最近よく感じている。

この国は、歴史上鎖国や開国を暮らしながらそれでも尚、島国であり孤島であると留学を通して感じるようになった。行き詰まった政治や社会や人々の暮らしの在り方、生き方の行方に対するヒントは、この国を一步出て客観的な目をもってこの国が持つ特徴、そしてまだまだある多様なものの在り方を知ることにより、いくらか得られるのではないかとぼんやりとはあるが感じている。もちろんこの経験が自分の考え方やこれからの人生に大きく影響を与えることもあるだろう。私自身は、これからまだまだの身であるが、今の閉塞感や停滞感、息苦しさを感ずるこの国の人々の暮らしに、一つでも多くの可能性や笑顔や光が灯せるものを、その得られただろういくらかから探り、大事に育て、そしていつかそれらを周りへ還元していけるような生き方を一つ、自分にはしていったと願っている。

2. 留学生活 —勉強編—



9月、授業開始日の大学の風景

私の留学先は、ストックホルムより、お向かいのデンマークの首都コペンハーゲンの方が近いというスウェーデンでも南に位置する、ヴェクショー市というところであった。市内にあるヴェクショー大学（2011年1月に“リンネ大学”に名称変更）には、総学生数約3万1千人、その内留学生が毎年約千人通っており、その大規模で国際的な大学で授業を受けていた。実際、私が学んだヴェクショーキャンパスは（2010年度のカルマル大学との統

合で、キャンパスは2つの市に別々にある）建物が近代的で、24時間校舎内にアクセスが効き、敷地内に湖や城、レストランやカフェ、パブ、森などが存在し、非常に洗練された雰囲気の学舎であったと思う。寮は大学の敷地内にある寮で暮らしていた。

向こうの大学は日本の大学と同様、2期制である。ただし他の諸外国などと同様、年度の始まりが秋であり、その後クリスマス休暇を挟み春学期へ、そして6月から次年度秋にかけ長い夏休みに入るような仕組みとなっている。私が受けていたのは、留学生に向けて用意された複数の英語による授業だが、授業選択の仕方はシングルで様々な分野の授業をいくつか取って組み合わせる取り方もあれば、そのシングルコースが分野ごとに複数まとめられて用意されたプログラムを取る取り方など、自由に選択ができ、その中で私は前期（秋学期）は教育分野のプログラム1つとスウェーデン語のシングルコース、後期（春学期）はスウェーデン語と大学に特別にお願いして取らせてもらった現地学生向けの（スウェーデン語による）ピアノ伴奏学の2つのシングルコースを選択した。授業の様子はというと、教育の授業は週3回午前か午後に2、3時間程度、スウェーデン語の授業は週1回2時間程度、伴奏学の授業は隔週で1回2時間程度と比較的ゆるやかなものであり、また一つの授業に休憩が何度か入ってくれるので、比較的ゆるやかなペースで受けられた。ただし、クラスには様々な国からの留学生が混在しているので、語学力もばらばら、英語（あるいは語学）が大の得意です！と胸を張って言える状態で行っていなかった私にとっては、授業で出る宿題の量は結構なものに感じられ、授業前や授業後に、図書館や寮でずっと課題に取り組んでいる、あるいは授業のペア学習や国ごとの学生によるプレゼンに向けて、授業時間外の時間を充て他の留学生と予定を合わせ準備に追われることもしばしばあった。授業の中身については、自分が専攻していたものや事前に学習を積んでいたものなどが多かったので、特にあちらの授業内容がことさら高度なり難しいなどという風には感じなかった。ただし、授業中の発言に関して言えば、他国の生徒たちがはるかに得意（というより習慣として身につけている？）としていたようで、その上言語も達者な子たちが多かったので、自身は控え目な姿勢に留まっていたように思う。授業後に直接先生と話す機会はあるので、そのことが学習に大きな支障をきたすほどのことはなかったと思うが、授業中その場で感じる疑問や意見を口にしていたら、各国の学生たちの幅広い考えにもっと触れられ、より充実したものが得られていただろうと思う。控え目がよしとされる文化は欧州にはない。現地の友達から「困っていたら自分から声をあげないと、ここでは誰も助けてくれないよ」と教えてもらった言葉は、留学生活の最後まで胸に響いた。

授業の中身についてももう少し掘り下げるとすれば、教育の授業では現地学校（幼小中高）の見学が多く組み込まれている授業があったので、色んな学校を訪問出来た。デイケアセンター（市内コミュニティによって立ち上がった保育園）、公立小学校（1週間チューター付きで訪問）、もう一つ別の公立小学校（移民の子が学生の約半数を占める）、シュタイナー学校、私立小学校、公立中学校（2週間チューター付きで見学）、職業専門学校など。この経験を利用して、時間のある春学期に以前訪れた学校の連絡先にコンタクトを取り、再

度訪問させてもらうなど、非常に良い授業を受けさせてもらったように思う。



スウェーデン語を学んでいる、移民の学生たち

3. 留学生生活 —私生活編—

私生活的な留学生生活を思い起こすと、現地に着いた当初から、非常に慌ただしいものだったことを思い出す。新しい生活や学習環境を整えるための準備に追われ、寮や授業あるいは大学の様々な行事を通して日々、嵐のようにたくさんの出会いが次々と訪れた。また、大学側も色んな企画を用意してくれていて、留学生歓迎パーティーや街のガイドツアー、そのツアーも街だけに留まらず他都市や近隣の島、国外に連れていってくれたりして(例：エストニア、ロシア、デンマーク)、授業の合間をぬっての友達との各国料理によるディナーやおしゃべり、お出かけなどがそこに加われば、文字通り、目まぐるしい毎日であった。そんな状況も前期で一旦落ち着き、後期の春学期に入ると、たいがいの他ヨーロッパから来た学生たちはエラスムスという半期留学制度を利用していたので、ほとんど自国に帰ってしまった。それからは少し寂しい雰囲気がキャンパス内に漂っていたように思う。現地には日本人留学生在私を含め20名ほどいて、他アジアやアフリカ地域からの留学生在がまだ残っていたので、それが救いであったように思う。またその頃には、大学側が用意してくれた **buddy** プログラム(こちらの大学で言う留学生をサポートするチューター制度)や、**friend family** プログラム(現地の市内に住むスウェーデン人家族やカップルと交流できる制度)を通して知り合った現地の友達も出来ていたので、一緒に食事をしたり彼らの故郷へ訪ねたり(スウェーデンは主要な都市を除くとほとんどの地域が田舎となるため、16～19歳になると多くの人が故郷を出て独り暮らしを始める)していた。また、向こうは近隣諸国であればあまりややこしい渡航手続きなしに他の国に行けたりするので、安い航

空会社を利用して、好きなオーケストラのある国へコンサートを聴きに行ったり友達の知り合いの住む国へ出かけたりと、気軽に他国へ旅行したりもしていた。ただ、気軽に行くことは出来ても、国が違えばそれぞれ持つお国事情ももちろん異なり、スウェーデンが政治や治安的に非常に安定した国であるためか、毎回旅行後に、どっと溜まった疲れと安堵感を感じていたことを覚えている。

先程、一勉強編—にて春学期に時間が出来たと書いたが、この時期にはこういった旅行や、自ら連絡を取ってピアノ教室に通ったり、現地の友達の力を借りて街の小さなライブハウスでコンサートを開いたり、わりと自由に自分なりのペースで動いていたと思う。



↑市内ライブハウスでのコンサートを終えて ↑訪問先の小学校児童がくれたおりがみ

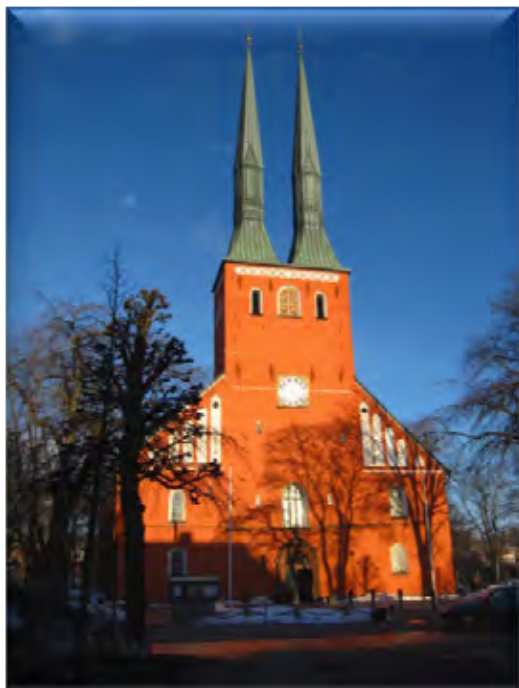
4. その他 —スウェーデン、留学生活にまつわる色々—

スウェーデンというと、どのような事柄を想像されるだろうか？IKEA、北欧カフェ・雑貨、ABBA、ボルボ、福祉国家、長靴下のぴっぴ、魔女の宅急便、ノーベル賞授賞式、白夜、森と湖の国、その他色々と思ひ浮かぶことがある方もいるかもしれない、全然どんな国か分からないという人もいるかもしれない。そんな方のために、順番が少し変になるが、少しだけスウェーデンという国について、そこでの暮らしについて、補足のような形で書いておきたいと思う。スウェーデンの位置するのはドイツやフランスなどのある中央ヨーロッパ諸国の北側、スカンディナビア半島の南である。ノルウェーを西隣に、フィンラン

ドを東隣に、北海を挟んでデンマークをお向かいに持つ。首都のストックホルムが北緯59度位置しているため、緯度が高く、気候的には日本よりかなり寒い。スウェーデン人が喜んでノースリーブのシャツや水着姿で湖にて泳ぐ夏の時期でさえ、私にとっては長そでくらいが丁度よい気温であった。日の長さもこちらとは大きく異なり、夏至の辺りでは夜空が夜中1時頃になっても薄明るい白夜があり、冬至の頃は逆に朝10時頃日が昇っても昼2時過ぎから日が沈み始め、ほとんど太陽を見かけない日が最低でも3カ月ぐらい続いたりしていた。そのため夏は外が明る過ぎて夜になってもなかなか眠れない日もあり、冬は逆に暗過ぎてなるべく家の近くをうろうろするくらいであまり外に出られない日が幾日かあった。とは言っても、外がどんな気候であれ、室内は常に一定の温度にしてくれる空調設備が整っていたので、大学に行けば電気も水道もネット環境も整っているし、暮らし的に感じる不自由さはそこまでなかったのだと思う。ただし、やはり気分が滅入ったり運動不足などの悩みは日常的に抱えていた。そういったこととも付き合っている国であり、またこの人たちであると、その事を通して異国にいることを改めて感じ取っていたように思う。現地で使われている言語は、スウェーデン語であり、通貨はスウェーデンクローナとなる。EU加盟国であっても自国の通貨を使っているところなどは、他の北欧諸国と同様、わりと国のアイデンティティや伝統を大切にする姿勢が垣間見えるようである。伝統と言えば、家の壁の色にも伝統色があり、スウェーデンではベンガラ色（銅色とも言われる、赤茶色っぽい色）がそれにあたる。都市部ではわりとお洒落な黄色やブルー、ピンクなどの色がカラフルに街を彩っていたが、少し郊外へ進むとこの伝統色の家が多く見られた。ちなみにこの色が家の伝統色となった由来は、昔は木の茶色の壁が一般的であったが、壁に泥を塗って舗装しようとした時に、たまたまその泥に赤土あるいは銅の成分が混ざっていたためであろうと現地の友達が話してくれた。伝統的な祭りや音楽、衣装も郊外へ行けばまだまだ残っているので、住んでいる土地を離れてちょっとした国内の旅をするのもかなり楽しいものであった。地理的な話に戻ると、湖と森の国と呼ばれるほどやはりその2つはかなりの数が国内に点在していて、ヴェクショー市内にも、大学から半径5キロほどの距離に大きな湖が2、3個はあった。よって街の風景は目に優しいものであり、水や空気も驚くほど綺麗な、おおかた快適な暮らしを送れた。交通はというと、電車やバスが主要なものであったが、それらが通っていない地域も多く、ある旅では行きたいところに車で行かねば難しいと言われ、行くのを断念した事もある。市内の移動くらいなら、自転車専用の道がよく整備されている国であるので、自転車1台所有していれば市内のどこにでも行け、非常に便利である。物価については、税金が高い国だ、などと言われているが、行った時期がちょうどリーマンショックの影響によりヨーロッパ通貨全体の価値が下がっていたためだろうか、日本とさほど変わらないか、少し高めくらいにしか感じなかった。また、食事については、自身が日本で育ったためだろう、正直あまり向こうの食事を美味しいと感じられる機会は少なかった。じゃがいもや肉、乳製品、パン類が食卓にのぼることが多く、新鮮な魚類がほとんど手に入らないので、近くのスーパーで見つけ

た米や醤油などを利用して、寮にてほとんど自炊をして過ごしていた。例えレストランに行ったとしても、値段の割にあまり美味しいものを口に出来なかったのも、経済的にもその暮らし方で良かったであろうと、今になっても思う。

ここで、ようやく人に焦点をあてたいと思うが、スウェーデン人とはいったいどんな人たちなのであろう。もちろん千差万別、人それぞれであるのはあるが、あえて、私が出会った人たちから感じ取ったぼんやりとした特徴を書くとしたら、それはわりとこちらから声をかけないと一歩踏み込んだ会話が始まらない、シャイな面がある（お酒を飲むと変わる人も多いと聞く）、働く事より休むことを楽しめるのんびり屋さんが多い、そして途中で「自分から声を挙げないと助けてもらえない」と友達から教わったと書いたが、困っている様子を見せたり、助けを一旦求めると、非常に親切に対応してくれたりする人たちが多いように思えた。電話のかけ方を教えてほしいと空港のガイドの人に尋ねると、自分のデスクを離れてまで、一緒に公衆電話から電話をかけるのを手伝ってくれたり、TAXに乗って向かった先の宿が閉まっていたら、運転手さんが自分の携帯を使って近くの安宿を探してそこまで送ってくれたり、信じられないような親切を受けた事もしばしばである。もちろん、アジア人と言うだけでセクハラ的な言葉をかけられたり、白い目で見られたりすることも度々あった。そういうこともありながら出会った親切たちだから余計、頭に残っているのかもしれないが、スウェーデン自体多くの移民を受け入れている国と言うこともあり、私が留学中は、はびこった差別意識等に悩まされることはほとんどなく、全体的にわりと快適に過ごせたように思う。





↑現地の人も驚く約20年来の豪雪の降る冬となった
↑ヴェクショー市のシンボルともなっている教会（別名うさぎ教会）

5. 最後に

留学を希望した理由、それを経ての全体的な留学経験に寄せる今の思い、というのを冒頭のーはじめにーの部分で書いた。ここに至っては、最後の最後、あまり書きたくない、でも正直な部分である留学生活にまつわる苦しみについて、少し具体的に書いてまとめへの結びにしたいと思う。渡航後、先ず味わった苦しみは、環境の大きな変化であった。住み馴れた家、土地、国を離れ、これから何カ月も今まで支えられてきた家族や友人たちの存在なしに生きていかねばならないと、新しい部屋にいて腰を落ち着けて考えた頃には、これから先の生活に対する不安や恐れや孤独感などがこんがらがり、精神的に落ち込む時が何度かあったことを覚えている。スカイプ等利用してテレビ電話を日本の知り合いに向けほぼ毎日のようにかける日々もあった。部屋にいても、一歩外に出ても、さらに一歩街を出ても、そこには今まで親しんできた人やものたちが一切ない。ようやく新しい環境に慣れて、むしろそれらを楽しめるようになるまでは、私の場合いくらか時間がかかった。次に感じた大きな苦しみは、言葉の壁であった。渡航前英会話やスウェーデン語の訓練を少しは積んでいたにしろ、やはりそれを母国語とする人たちや得意とする人たちの輪の中には、入りづらかったし、会話を邪魔するようで、少しでも話すことさえためらわれたりもした。何より自分が今まで使ってきた日本語がほとんど聴こえてこない状況である。廊下を通して聴こえて来る英語かフランス語かスペイン語か分からない言語に、耳を塞ぎ、部屋に閉じこもった時もあった。それから、気の配り方や意志表明の仕方、食事や常識

的なレベルでずれる文化の違い、宗教の違い、ルームメイト同士のけんか、酒に酔って我を忘れる学生たちが出す騒音、勉強が思うように進まなかったり、理由も分からず気分が落ち込んだり、ストレスで眠れなくなったり、新鮮な刺激や面白い発見を受けられる反面、それらがもたらす苦勞もものすごいものであった（と、それを受けている時には仕方のない事とまだ受け流したりただ耐えたりしていたものの、帰国後によりやくそのことを客観的に捉えられるようになり、そう感じる）。残念なことに、精神を病んでいた留学仲間も周りにいた、皆、自分のことに必死で、仲間同士でいがみ合いが生じる出来事もあったと思う。そして、それらの苦しみは、現地へ慣れて解放されるところに留まらなかった。それは、予想外にも、帰国後にまたあらわれた。いわゆる逆カルチャーショックというやつである。私が留学したのは、4回生の夏からであった。当然、帰国すると同じ学科やサークルの同回生たちは皆卒業し、大学以前の友達も合わせて、多くが卒業、若しくは就職しているという帰国前とは環境が大きく変わっていた。その中で、一人就職に向けての活動や卒業に向けての準備をしていく事は、ひどく孤独に感じられた（いくらそのことを留学する前に覚悟していたにしろ）。またそれ以前に、10カ月もよその国で暮らしてみると、今度は日本が自分にとっての異国であるように感じ、帰国直後は、どこか知らない国で旅しているような感覚に長く襲われた。周りにとっては、慣れた土地での、久々の人との再会である。しかし自分にとっては、知っているはずの、でもなんだか奇妙で受け入れがたい国での、これまた知っているはずの、でも時の流れのせいどこか違った具合に感じる人たちとの、再会があったりする。ひどく自分だけこの国にも属さず置き去りにされたような感覚に陥ったりする。ここでの夏の夜の田んぼの匂いが、ひどく懐かしく愛おしく思えたりする。まさかで隣町が全く知らない土地のように思えたりする。他にも、物の配置のされ方が、すっきりしない、ひどくごちゃごちゃしているように見え、目に映るあらゆるものから窮屈感や不快感を覚えたりする。そのことをまた、「そうやんな」と言い合うことが出来る人がそれぞれ別の国や、同じ国でも違う都道府県に散らばって帰国していたりするため、なかなか話す機会を持てず、さらに孤独感を深めていったりもした。またそれ以前に、自分が21年間暮らしてきた土地で、まさか渡航時と似たような拒否反応が自分に現れるとは、それだけでいくらかショックで、気持ちが落ち込む事もあった。だが、そんないくつもあった苦しみを乗り越えこの経験をいくらか全う出来たのは、もちろん、その時々にあった新しい環境に対する時間的な慣れと、そしてやはり、家族や日本で前々から繋がりがあった人たち、また、現地で知り合った人たち、そして新しく留学をこれから目指す人たちなど人の繋がりが自分にはあったからだと思う。ここにおいて、冒頭に書いた「恐らく自分の人生にとって、自分が行った留學生活というものは、どこで生きようがどこに行こうがいつまでも続く、一生の財産になる経験をしたということを最近よく感じている」という言葉をもう一度思い出したい。帰国後に孤独感を募らせる原因となった、留學経験を通して得た自国に対する客観性や新たな視点というものが、恐らくは一生自分の身にまとうであろうこと、その事を予感し、一度は絶望し、留學したことを後悔し、そ

れでも現実を少しずつ受け入れ、そして今度はそれが自分の財産になるだろう考えに至ったのは、このような大切な人たちに支えられて、ようやく最近の事である。そういった自身の経験から、どうか自分の世界に、そして外の世界に興味を持ち、どんな形であろうとも大きな一歩を踏み出すべきか、今悩みながらこの原稿を手にとっている人がいれば、是非伝えておきたいことがある。それは1つは、どうか大きな経験をされる際には、一時的な感じ方や感情や状況から、全体的な結論や判断を導き出さないようにして欲しいこと。常に時間をかけて自分と対話し、ゆっくり、じっくりと、周りの状況や自分のことをよくみて、自分の中で本当に感じているところの原石を磨き上げてあげて欲しい。そして何より周りを信じ、そして自分を信じ抜いてあげて欲しいと思う。そしてもう1つ、ここに有名なアメリカの心理学者が残した言葉を書いておきたい。「する後悔より、しなかった後悔の方が大きい」という言葉。私の場合、この経験でどれだけ多くの、そしてそれだけ価値のあるものを得たのかは、今に至っても、正直あまり掘めていないところである。ただし、この経験を全うしたというそのこと自体が、すでに少なからず今の自分の心のどこかで大きな自信につながっており、この先以前にも増して「何でも来い」という強い姿勢を持ち始めている気がしている。一口に留学と行っても、本当に人それぞれの中身の経験であり、その人への影響の表れ方も様々であると思うが、どんな喜びも苦しみにしても、まずはそれに足を踏み出さねば、何も起こらないということ、そして、色んな思いを経てそれを遂げたのであれば、どうかあとは自分なりの捉え方での財産を、見つけ出して欲しいと願う。



民家の庭先での可愛らしい風景

ドイツで学んだ異文化

小 野 梓

教養学科 文化研究専攻 欧米言語文化コース

(平成 21 年度 派遣留学生)

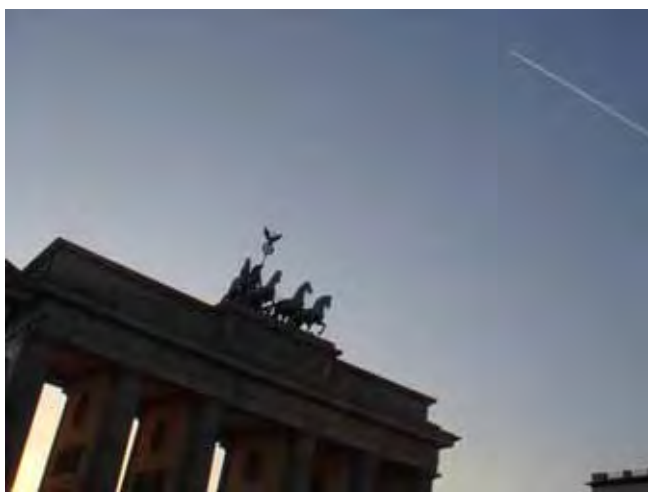
私がドイツ語を学び始めたのは、本当に些細なことがきっかけだった。中学生の頃から英語が好きで、外国語に興味を持ち、他の言語も学んでみたいと思ったことが大学の学科の決め手だった。でも、そこに入ったからといって、すぐに、留学したいと思っていたかということ、実はそういうわけではなかったのだ。もちろん興味はあったが、日本のこともそれほどわかっていないのに、外国に行って自分が何かできるという自信が自分に持てなかったのが理由である。留学をして、何かを自分の物にして帰って来られると思えるだけの自信が。そんな私が、大学 2 年生の後期が始まったある日、ドイツに短期留学して帰ってきた先輩の話聞く機会があった。その内容は、私が想像しうる「留学」というイメージを遙かに超えるものだった。「語学を学ぶ」という枠に捕らわれない先輩の活動に、私は感銘を受けた。世界各国の友人を作り、ドイツ語を母語としない人たちと、ドイツ語を使ってコミュニケーションを取る。異国の地で、一人暮らしをする。それらの話は、日本ではとても体験できないであろうものだった。さらに、2 回生になってしばらくすると、私は自分のドイツ語力を疑うようになっていた。ドイツ語を学び始めて 2 年目。しかし、一向に話せるようになる気配はなかった。このまま卒業まで日本で学んでいて、本当に外国人とコミュニケーションを取れるようになるのか、疑問に思っていた。やはり、実際その地に行き、人々と話すのが一番良い方法だと思うようになってきていたのだ。その 2 つをきっかけに、私はまじめにドイツ留学を考えるようになった。不意に、母に相談してみたくなり、留学をほのめかすようなことを言うと、「行ってきたらいいよ」とあっさり背中を押してくれた。全面的にバックアップしてくれる親が居て、交換留学が出来る環境があるのに留学しない手はないと思い、その年に留学を決めた。それから出発まではあっという間に時間が過ぎた。

我々留学生は、大学の授業が始まる前に、一ヶ月間ドイツ語を学ぶクラスを受けた。そのクラスには、各国の交換留学生が居た。スペイン人、イタリア人、フィンランド人、台湾人、中国人、インドネシア人、そしてもちろん、教師はドイツ人だった。そこで受けた授業の中で、私は再確認したことがあった。日本人はやはり引っ込み思案だという事実だ。今まで 21 年間日本で暮らしてきて、私自身は、どちらかというとよく発言する方だと自分で思っていたし、人からもそう言

われていた。しかし、やはり外国人の発言力の比ではなかったのだ。私が名指しで当てられても、答えようとした私をよそに、スペイン人が答える。そのスペイン人が答えなければ、イタリア人が答える、という風に、ドイツ人の教師も苦笑いするほどの発言力だった。日本の授業では、「誰かわかる人居ますか」と言われた時に、ほぼ全員が答えがわかっていても誰も手を挙げない、ということはよくある。名指しされている人が答える前に答えるというのはいきすぎかもしれないが、その半分でも、日本人は見習わないといけないのではないかと、私は思った。

そして、生活に慣れてきて、言葉もだいが話せるようになった3ヶ月後に、北ドイツにホームステイに行った。そのプログラムはクリスマスから年明けにかけて、2週間。短期ではあったが、ドイツの家族、家庭料理、クリスマスや年明けの過ごし方などを見るのには十分な長さだった。初めて家族に会ったとき、言葉の聞き取りやすさに驚いた。それまで南ドイツの強い訛りを聞いていた私は、自分のドイツ語が上達したんじゃないかという錯覚に陥るほどだった。その家族には小学生の女の子と、幼稚園児の男の子が居た。それも、私にとって、子どもが話すドイツ語を聞く機会をもらえたのは嬉しいことであった。お姉ちゃんの方は、私がドイツ語をあまり話せないのを知っていて、ゆっくり話してくれたり、一生懸命言葉の意味を説明してくれたりした。それを聞いているだけでもとても聞き取りの練習になったのだが、一番勉強できたのはやはり、両親と話していたときだ。最初の内は、日本のことを質問されても単語力が無く、10の内3程度しか説明できなかった。言葉に詰まると、「こうなの？それともこう？」と言われ、勝手に急かされているように感じ、伝えられないと諦めていたのだ。話を聞いていても、わからなかったら何でも質問するように言われたものの、質問しすぎると話の腰を折るかもしれないと変な気を遣い、わかったふりをしている部分もあった。しかし、そんなことをして、ホストファミリーに気づかれないわけもなく、しっかり質問するように叱られた。私は反省して、その日から恥ずかしがらずに質問するようになった。すると、不思議なもので、両親も楽しそうに話してくれるようになり、私もより質問しやすくなったのだ。自分が話したい内容を伝える術も身につけた。もちろん、ドイツ語しか話せない状況に追いやられて、単語力が伸びたことも関係しているが、それ以上に会話のタイミングというか、外国人と話す時の「間」はこのホームステイで習得した物だ。自分の話している間は、相手が話そうとしても話し続けても良い。そうしないと、意見を聞いてもらえない場合もあるのだ、ということに気づけた。家庭にも慣れてきた頃、クリスマスがやって来た。ドイツでは、12月24日が一番重要な日であり、25日、26日も続けて祝日で、その3日間、お店はほぼ全店休業。夜は家族で集まり、一緒に食事をし、プレゼントを交換する。これは、どの年代の人々も行う。遊び盛りの20代であっても、クリスマスは、家族と一緒に過ごす時間なのだそう。日本では

友達と過ごすのが一般的なクリスマスも、キリスト教の国であれば、やはり違うのだなと思った。違うと思った反面、あることに気づいた。こういう行事は日本にも無かったか。日本のお正月である。親戚が集まり、子どもたちはお年玉をもらう。祝う目的が違うだけで、行っている内容はほぼ同じであった。しかし、昨今、日本では、年明けを家族と過ごす若者は少なくなっているのではないか。ドイツでは当たり前のように家族と共にクリスマスの夜を過ごす。家族を大事にするという部分は、文化として根付き、大切に保管されているのだと感心した。この一年は私の人生の中でも、本当に濃い一年だった。まだまだ十分では無いと思うが、もちろんドイツ語を習得したこと、その他にも、人とのコミュニケーションの取り方、外国としての日本を見て得られたものなど、たくさんの知識を自分の物にすることが出来た。何より、大きな発見は、私自身が人と触れあうことが好きだと再認識できたことだ。コミュニケーションのツールが日本語であろうと、外国語であろうと、人と会話すること、目を見て思いを伝えることに国は関係ないと、本当の意味で理解することができた。そして、それが自分にとってどれだけの意味を持つかも。これがわかった時、自分が、この先どういう人生を送っていきたいのかということも、今までより、更にはっきりと見えるようになった。今から長い人生を生きていく上で、この一年があったからこそ、今の私があるのだと胸を張って言えることは間違いないだろう。この「交換留学」という機会が自分に巡ってきたこと、サポートしてくださった大学関係者の方々、行くことを勧めてくれた周りの友人、支えてくれた家族に本当に感謝している。この一年で学んだことを周りの人に広げていくことが、私の今からの役割だと思っている。外国の良い部分を取り入れて、日本の良い部分をもっと磨いていき、それを世の中の人々に伝えたい。留学する以前とは良い意味で変わったと言われるような人間になるために、これからもっともっといろいろなことに挑戦していきたいと思う。



夕時のベルリンのブランデンブルク門

平成 22 年度 国際教育部門 活動報告

1. 日本語教育

平成 22 年度に留学生のために開講した授業、及び受講者の内訳は下記の通りである。

学部留学生のための授業

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本語読解 ・	2×2（前・後）	火・	村井卷子
	日本語作文 ・	2×2（前・後）	木・	長谷川ユリ
	日本語聴解 ・	2×2（前・後）	火・	若生正和
2回生	日本語演習 ・	2×2（前・後）	月・	中山あおい

学部留学生のための授業（兵庫教育大による E ラーニング授業）

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1 回生	総合日本語演習	1（後）	集中	寺尾裕子（兵庫教育大）

教養基礎科目・専門科目（日本人学生とともに受講できる授業）

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本事情	2（前）	水・	長谷川ユリ
	東アジア言語文化論	2（前）	水・	若生正和
	国際理解	2（後）	水・	中山あおい
	日本科学技術史概論	2（後）	月・	城地茂
3回生	日本語教育	2（後）	木・	長谷川ユリ

日本語日本文化研修留学生、交換留学生のための授業

レベル	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
中上級	日本語中上級聴解 ・	2×2（前・後）	火・	村井卷子
	日本語中上級読解 ・	2×2（前・後）	月・	長谷川ユリ、間晶子
	日本の社会と文化 ・	2×2（前・後）	火・	中山あおい
	日本の言語と文化 ・	2×2（前・後）	金・	若生正和
	日本文化史	2×2（前・後）	金・	城地茂
中級	日本語中級文法 ・	2×2（前・後）	木・	長谷川ユリ
	日本語中級会話 ・	2×2（前・後）	月・	間晶子
初中級	日本語初中級会話a ・	2×2（前・後）	月・	長谷川ユリ
	日本語初中級会話b ・	2×2（前・後）	水・	長谷川ユリ
	日本語漢字 ・	2×2（前・後）	金・	若生正和
	日本文化研究	2（前・後）	集中	指導教員

教員研修留学生のための授業（補講）

科目名	曜日・時限	担当教員
教研究生用日本語 日本の教育	月・ 、火・ 、火・ 水・ （前）	長谷川ユリ、間晶子、井ノ口智佳、 中山あおい

前期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	28
研究生	2
研究留学生	1
教研究生	3
日研究生	3
交換留学生	23
計	60

後期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	28
研究生・研究者	3
研究留学生	2
教研究生	3
日研究生	2
交換留学生	24
計	62

２．修了レポート発表会

平成 22 年度も、教員研修留学生、研究留学生、日本語日本文化研修留学生、交換留学生の勉学・研究の集大成として「修了レポート発表会」を行った。発表会は前期 8 月 3 日、後期 2 月 3 日に開催され、指導教員をはじめ、日本語科目の担当教員、チューター等の日本人学生から活発な意見や質問が出された。また、前期、後期それぞれに優れた発表を行った学生を選び、修了式において表彰した。

前期	2010/8/3 9:30～16:30	日研究生	3
		交換留学生	20
後期	2011/2/3 13:30～15:50	教研究生	3
		研究留学生	1
		交換留学生	3

３．英語による授業

英語による授業は、交換留学生及び教員研修留学生を主な対象に、日本の社会や文化、言語、教育等に関して、様々な分野の教員が英語で授業を行うオムニバス形式の授業である。平成 22 年度より、国際センターの科目として、前期は「Arts and Sciences in Japan」、後期は「Japanese Culture and Education」という講義名で単位化された。平成 22 年度の受講者は、前期 8 名（交換留学生 5 名、教員研修留学生 3 名）後期 10 名（交換留学生 5 名、教員研修留学生 3 名、研究生 2 名）であった。また、講義のテーマに関心のある留学生や日本人学生が参加することもあり、日本人学生との交流も行われた。

6 月 1 日には、協定大学の香港教育学院から訪れた 12 名の学生が、英語で香港の紹介と香港のシティズンシップについて発表を行い、受講生との活発な意見交換が行われた。

日付	前期担当者及び講義タイトル
4 月 13 日	Prof. Oh Yul Kwon (Griffith University) Students' Vision and Strategy in the Globalization Era
4 月 20 日	長谷川 ユリ(国際センター) Festivals in Japan
4 月 27 日	中山 あおい(国際センター) Field Tour in the Library
5 月 11 日	若生 正和(国際センター) The First Japanese/Korean Bible: Who Helped the Translators?
5 月 19 日	中山 あおい(国際センター) School Visit at the attached Schools in Tennoji
5 月 25 日	向井 康比己(国際センター長 自然研究講座) Field Tour in the Experimental Farm
6 月 1 日	Cultural and academic exchange with Hong Kong Institution of Education
6 月 8 日	加賀田 哲也(英語教育講座) Creative Writing: Puff ("the Magic Dragon")
6 月 22 日	永田 元康(情報科学講座) Internet: Tool for Globalization
6 月 29 日	松本 マスミ(欧米言語文化講座) Language and Plants
7 月 6 日	戸田 有一(学校教育講座) & Alana James (London University) School Bullying and Peer Support Practice -Perspectives from Japan and UK-
7 月 13 日	城地 茂(国際センター) "Wasan" Mathematicians, Technocrats and Samurai during
7 月 20 日	赤木 登代(国際センター) A History of Women in Japan

日付	後期担当者及び講義タイトル
10月5日	Prof. Paul Dowling (Institute of Education, University of London) Sociology as method: Departures from the forensics of Culture, text and knowledge
10月12日	中山 あおい (国際センター) オリエンテーション
10月19日	馬 暁華 (欧米言語文化講座) United States and East Asia in a Global Era
10月26日	谷口 一美 (欧米言語文化講座) How Communication works
11月9日	Prof. Bruce Malcolm (英語教育講座) Spirituality in Japan
11月16日	米川 英樹 (学校教育講座) Teacher Education in Japan
11月30日	横井 邦彦 (教養学科長 自然研究講座) An Introduction to Analytical Chemistry
12月7日	安部 文司 (欧米言語文化講座) Why did Commodore Perry Come to Japan?
12月14日	中山 あおい (国際センター) Intercultural Education in Japan
12月21日	小松 孝至 (実践学校教育講座) A psychological Inquiry into 'Gitai-go' in the Japanese Language
1月12日	水野 治久 (学校教育講座) Guidance and School Counseling in Japan
1月19日	入口 豊 (保健体育教育講座) Japanese and Sports

4 . 交換留学

平成 22 年度の受入・派遣の実績は以下の通りである。

受入	中国	4	26 名
	韓国	6	
	台湾	3	
	タイ	2	
	オーストラリア	1	
	アメリカ	6	
	フランス	3	
	ドイツ	1	
派遣	韓国	1	10 名
	アメリカ	4	
	フランス	2	
	ドイツ	1	
	スウェーデン	2	

留学生の受入れに対しては、前期 4 月 6 日、後期 10 月 5 日にオリエンテーションを実施した。オリエンテーションでは、留学生が円滑に大学生活を送れるように、授業や行事予定の説明、生活上の諸注意等を行っている。また、オリエンテーションの後には、日本語のテストと履修ガイダンスを実施している。

日本人の派遣に関しては、年 2 回のオリエンテーションを行っている。平成 22 年 2 月 3 日に第 1 回オリエンテーションを実施し、留学までの流れ、提出書類や申請手続きについて説明した。各派遣大学への交換留学の申請書、ビザの申請等については、国際センターの国別担当教員が指導し、6 月 16 日に行われた第 2 回オリエンテーションでは、海外での安全のための注意事項、海外留学保険や在留届など必要な事務手続き等について詳しく説明した。また、6 月 30 日には交換留学に関心をもつ学生を対象に交換留学説明会を開催し、24 人の日本人学生が集まった。

5 . 語学研修・文化研修

平成 22 年度はアメリカ、オーストラリアで英語語学研修を実施し、韓国、台湾で文化体験研修を実施した。昨年と比べ、全体的に参加者数は減少傾向にある。近年の経済状況の影響か、海外体験のために積極的に費用・時間の投資をしようという思いを学生たちが持ちにくくなっているのかもしれない。海外での研修は自分の能力を向上させるとともに、異文化の中での気づきを通して、学生時代になすべきことを新たに見つめ直すきっかけにもなる。国際センターからの広報を充実させるとともに、各講座等の先生方にも学生たちに挑戦を勧めていただければ幸いである。

研修先	大学名	研修期間	参加者数
ア メ リ カ	University of North Carolina Wilmington	2010/8/23 ~ 2010/9/26	5 名
韓 国	大邱韓医大学校	2010/8/9 ~ 2010/8/14	4 名
	ソウル教育大学校	2011/2/13 ~ 2011/2/27	1 名
オーストラリア	Griffith University	2011/2/15 ~ 2011/3/27	11 名
台 湾	国立台北教育大学	2011/3/7 ~ 2011/3/16	3 名

アメリカの参加者数には本学職員 1 名を含む。

6 . その他の活動

国際教育部門では、海外の協定校が実施している海外教育研修に対する協力を行っている。平成 22 年度は、これまで毎年実施しているアメリカの大学の研修に加え、韓国の大学が新たに始めた「海外インターンシップ」プログラムの受入れも行った。ここに概略を報告する。

(1) UNCW海外教育研修プログラム

アメリカの協定校である University of North Carolina Wilmington (UNCW)は、教育専攻の学部生・大学院生を対象とした海外教育研修プログラムを実施している。このプログラムの目的は、約 2 週間の日本滞在中、広島、京都、奈良、金沢等を訪問し、日本文化について見聞を広めるとともに、大阪や奈良での学校訪問を通じて日本の教育について学ぶことである。来日前と帰国後の授業を含め、プログラムに参加することによって単位を取得できる。参加者の中には現職教員も数多く含まれ、それ以外の学生は、卒業後ほとん

どが小・中・高の教員となる。

平成 22 年度は、6 月 21 日から 24 日までの 4 日間、研修グループの学校訪問、観察実習に際し、スケジュールの調整、通訳や案内をセンター教員や本学教職員、交換留学・語学研修経験者等が担当した。参加学生数、訪問先等は以下の通りである。

派遣元大学（国）	プログラム名	受入れ期間	参加者数 (引率教員)
UNCW(アメリカ)	International Studies Program	2010/6/21～2010/6/24	13 名 (3 名)

日程	訪問先	参加者数（引率教員）
6 月 21 日（月）	大阪教育大学附属池田小学校	13 名（3 名）
	同 中学校	
	同 高等学校	
6 月 22 日（火）	大阪教育大学附属平野幼稚園	11 名（1 名）
	同 小学校	
	大阪府立八尾高等学校	2 名（2 名）
6 月 23 日（水）	大阪教育大学附属平野幼稚園	4 名（1 名）
	奈良県三郷町立三郷北小学校	7 名（1 名）
	大阪府立八尾高等学校	2 名（1 名）
6 月 24 日（木）	大阪教育大学附属平野幼稚園	4 名
	奈良県三郷町立三郷北小学校	7 名（1 名）
	大阪府立八尾高等学校	2 名（2 名）



(大阪府立八尾高等学校にて)

(2) ソウル教育大学校グローバルインターンシップ

本年度は初めての試みとして、ソウル教育大学校から「グローバルインターンシップ」の実習生を7名受け入れた。本プログラムで、教員を目指し勉強中の韓国の学生7名が東大阪市内の小学校に入り込み、2週間観察中心の実習を行いつつ、韓国文化の紹介などの実習授業を体験した。なお、本年報「寄稿」の中に若生正和による詳細な報告がある。

派遣元大学(国)	プログラム名	研修期間	参加者数
ソウル教育大学校 (韓国)	グローバルインターンシップ	2011/1/17～2011/1/31	7名

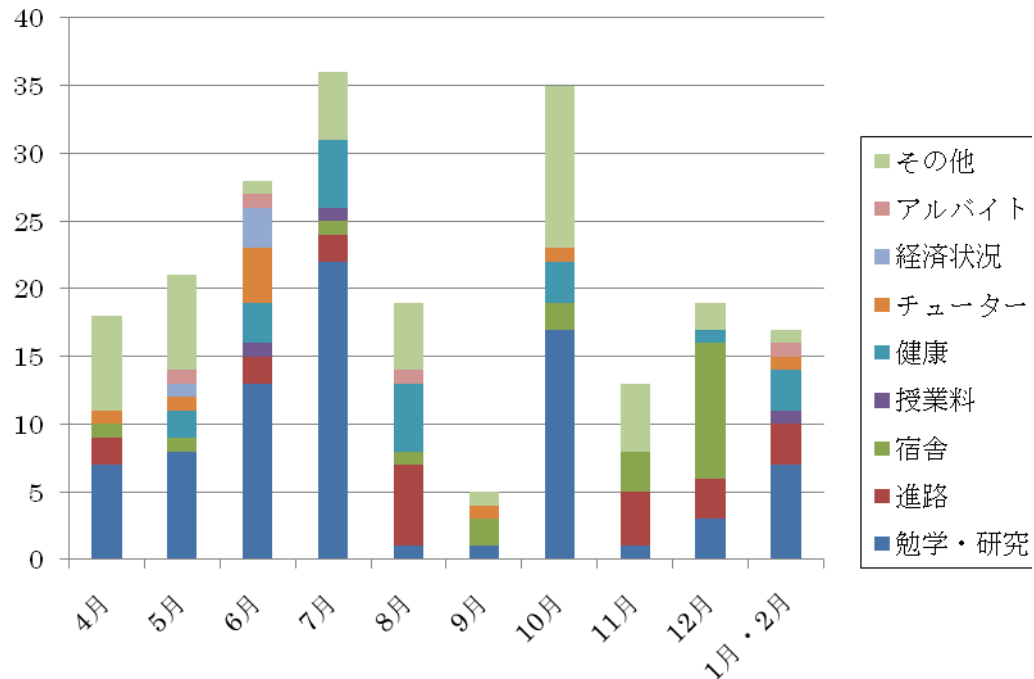
日程	実習校(五十音順)	参加者数
2011/1/18 ～2011/1/28	東大阪市立荒川小学校	2名
	東大阪市立大平寺小学校	3名
	東大阪市立長堂小学校	2名



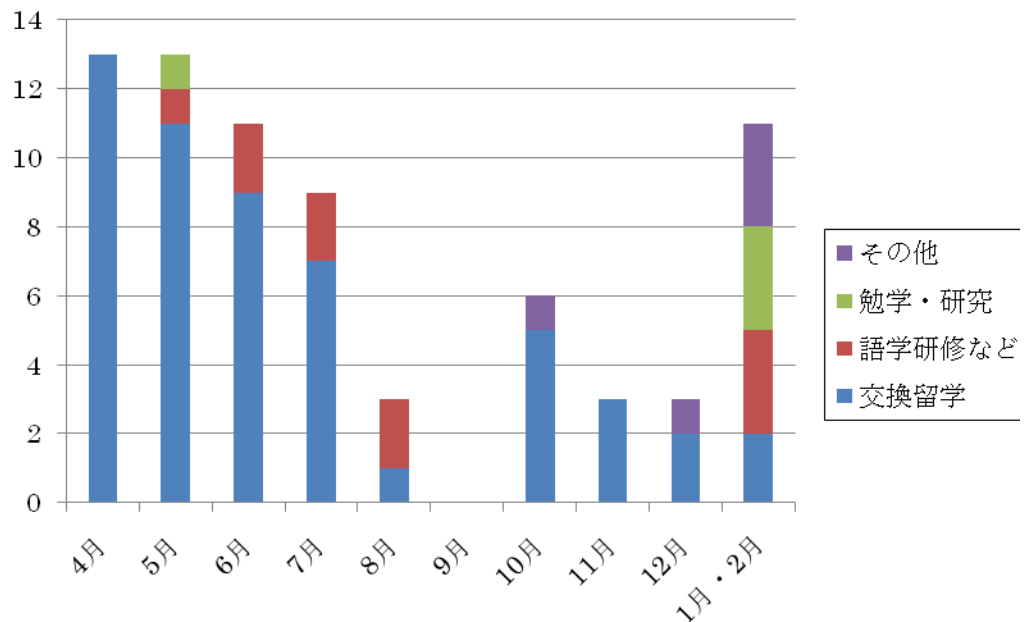
(東大阪市立荒川小学校にて)

7. オフィスアワー相談記録（平成22年4月～平成23年2月）

(1) 留学生



(2) 日本人学生



平成 22 年度 国際事業部門活動報告

1. 協定校締結

(1) 国立高雄師範大学



平成 22 年
4 月 20 日に
台湾・高雄師
範大学より
戴嘉南学長
一行が来訪
され、「大阪
教育大学と
国立高雄師
範大学との
教育及び学
生交流に関

する協定書」が締結された。引き続き、この協定に基づき、平成 22 年 6 月 24 日、国立高雄師範大学において、「学生交流に関する協定」が締結された。これによって、国立高雄師範大学と本学との学生並びに教職員との積極的な交流が可能となり、更なる、協力・発展が期待される。



国立高雄師範大学は、台湾の 3 校の高等師範養成大学の一つであり、台湾南部の教員養成系大学の中心である。高雄市は台湾省と同じレベルの直轄市であり台湾南部の中心都市である。

こうした地政学的にも本学との共通点が多く、台湾との多様な交流が期待できる。

協定書調印後の座談会には、多くの教職員の方々が出席され、大学評価、教員養成大学が抱える課題・発展的対応策及び将来像などについて、積極的かつ具体的な意見交換が行われた。

(2) 国立台中教育大学



平成
22 年 4
月 22 日
に「大
阪教育
大学と
国立台
中教育
大学と
の教育
及び学
術交流

に関する協定書」が締結され、本学との姉妹校となった。この協定に基づき、平成 22 年 6 月 25 日、台湾・国立台中教育大学において、「学生交流に関する協定」が締結された。この協定が締結されたことで、国立台中教育大学と本学との学生並びに教職員との積極的な交流が可能となり、更なる、協力・発展が期待されます。

国立台中教育大学は、日本統治時代の明治 34 年創設の台中師範学校を源流とする伝統校で、台湾中部の教員養成系大学の中心である。台中市は台湾省と同じレベルの直轄市（平成 22 年 12 月 25 日昇格）であり台湾中部の中心都市である。このように歴史的にも本学との共通点が多く、台湾との多様な交流が期待できる。

調印前には、学長対談が行われ、お互い学長就任前からの旧友であることから、長尾学長の執筆著書をプレゼントし、日本での教員免許状更新制など、教育問題の現状に耳を傾けていた。

調印式終了後は、長尾学長による講演及び意見交換会が行われ、教員養成大学が抱える課題、教員免許更新制、教職員評価などについて、活発な意見交換が行われた。

その後、開学当時（明治 34 年開学）から今日までの貴重な資料、芸術作品を展示している資料館を始め、学内の施設を見学させていただいた。この資料館は、一般には公開していない特別なものであった。



(3) 国立台湾師範大学



平成 22 年 5 月 24 日に台湾・台湾師範大学の張国恩学長一行が来訪され「大阪教育大学と国立台湾師範大学との教育及び学生交流に関する協定書」が締結された。引き続き、この協定に基づき、同校と「学生交流に関する協定」も締結された。これによって、国立台湾師範大学と本学との学生並びに教職員との積極的な交流が可能となり、更なる、協力・発展が期待される。

国立台湾師範大学は、台湾の 3 校の高等師範養成大学の一つであり、台湾の教員養成系大学の中心である。また、台湾における留学生への中国語教育の中心であり、教員養成における交流ばかりではなく、語学研修という形の学術交流も期待できる。



(4) フィンランド・オーボアカデミー大学

オーボ・アカデミー大学は、コインブラ・グループ（ヨーロッパ研究大学グループ、英国ではオックスフォード、ケンブリッジ大学などが所属）に属する総合大学で、教職員数 1127 名、学生 7941 名の規模である。今回の提携先である教育学部は、フィンランドのバーサ市に位置しており、社会介護科学部とともに、同大学バーサ校を構成している。また、バーサ市には附属教員養成学校も有している。

フィンランドの教育は教員のレベルが高いことで世界的にも有名であり、本学が学術提携を行うことによって、世界最新の教員養成理論・実践に触れることにより、効果的な影響をもたらすと考えられる。また、教育実習の充実していることにおいても秀でており、同大学附属教員養成学校では、教育実習生用の部屋が整備されており、教室内に教育実習用の備え付けの座席が設けられた部屋もあり、教育実習の見学など、教員養成系大学ならではの設備も整っている。海外からの教育実習生も受け入れており、宿舎も整備されている。研究を基盤とする教育を目標に掲げ、理論と実践の融合を目指すフィンランドの教育現場との交流が期待される。

フィンランドは、歴史的に親日的であるばかりではなく、動画・ムーミンを日本が育てたとの認識もあり、現代日本文化に対しても極めて友好的な地域である。アニメや漫画も含め日本文化に対するフィンランドの若者の関心は高く、フィンランドからの交換留学生も期待できる。日本から、フィンランドへの留学を希望する学生おり、来年度より留学生を派遣する予定である。

また、フィンランドの大学は、ダブル・ディグリー制度を実施しており、ダブル・ディグリー制度の推進も期待できる。



オーボ・アカデミー大学附属実習学校の実習生控室

(5) 清州教育大学校

清州教育大学校は韓国に 11 校存在する教育大学の一つである。清州教育大学は大韓民国の中央部、忠清北道清州市に位置する。1941 年に設立された、清州師範学校がその基礎であり、1962 年に 2 年制大学として清州教育大学の名前で新たに開校された。1984 年には 4 年生大学に改編、1993 年、現在の清州教育大学校の名称に改称された。

学部は倫理・国語・社会・数学・化学・実科(家庭科)・音楽・美術・体育・英語・コンピューターの各教育科と初等教育科の 12 学科で構成されている。2010 年度の学部学生募集定員は 398 名。また、21 専攻課程からなる教育大学院(2010 年度学生募集定員 228 名)と付属初等学校が設置されている。

清州教育大学校が位置する清州市は学術研究機関が集中する大田広域市にも近く、教育・研究に関心の高い地域である。また、世界最古と言われる金属活字が清州市内から発掘されており、歴史的・文化的にも興味深い土地である。

(6) 全州教育大学校

全州教育大学校は大韓民国の南西部、全羅北道の中心都市である全州市に位置する。1923 年、全羅北道公立師範学校として開校し、1962 年に 2 年制大学として全州教育大学の名称で新たに開校された。1983 年には 4 年生大学に改編され、1993 年、現在の全州教育大学校の名称に改称された。

2009 年 10 月現在、教員数は 70 名(定員 71 名)であり、学生数は学部 1701 名、大学院が 444 名、合計で 2145 名が在籍している(定員はそれぞれ 1618 名、464 名、2082 名)。学部は倫理・国語・社会・数学・化学・実科(家庭科)・音楽・美術・体育・英語・コンピューターの各教育科と初等教育科の 12 学科で構成されている。また、18 専攻課程からなる教育大学院と 2 箇所付属初等学校が設置されている。

全州教育大学校が位置する全羅北道全州市は韓国の主要都市の一つであると同時に、伝統文化が豊かに残っている土地でもある。同校はその土地柄を生かし、「伝統文化教育」を大学特性化事業として推進してきた。大学の周辺には伝統的な家屋を保存する民俗村が存在し、韓国の歴史を体感することができる。また、全州をはじめ全羅道一帯は食文化が豊かなことでも有名であり、特に全州ビビンバは韓国国外にもその名が知られるほどである。

(7) 公州大学校

公州大学のメインキャンパスは韓国中部の忠清南道公州市に位置する。1948 年、2 年制の道立公州師範大学として設立された後、1954 年に 4 年生の国立公州師範大学に改編、1991 年に国立公州大学校に昇格した。その後周辺の単科大学を統合していき、現在は 6 学部(師範大学・人文社会科学大学・自然科学大学・工科大学・産業科学大学・衛生保健大学：大学は日本の「学部」に相当) 7 大学院(一般大学院・教育大学院・教育情報大学院・経営行政大学院・産業科学大学院・特殊教育大学院・映像芸術大学院)から構成される総合大

学となっている。学生数は学部計 19,084 名、大学院計 2,721 名。教員数は 522 名、職員数 269 名。

公州大学校は韓国でも有力な国立総合大学の一つであるとともに、中等教育教員養成機関としても有数の大学である。東アジア教員養成国際コンソーシアムでも韓国の幹事校となっており、東アジアを中心とした大学交流に非常に積極的な大学であり、学生たちの国際交流に対する意識も高い。

同校が位置する公州市と近隣の扶余には、かつて、日本と深い交流のあった百済の都が置かれていた。武寧王陵や公山城など、百済時代の史跡が残っており、それらを通して韓国の歴史・文化のみならず、当時の日本と朝鮮半島との交流についても理解を深めることができるであろう。

2.国際会議参加

(1) 日独学長会議

(平成 22 年 5 月 17, 18 日、ベルリン開催)

2010 年の 5 月 17 日、18 日の 2 日間にわたり、jdzb(Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin ベルリン日独センター)、JACUIE(Japan Committee of Universities for International Exchange 国公立大学団体国際交流担当委員長協議会)および HRK(German Rector's Conference. The Voice of the Universities. ドイツ大学長会議)の共催で、日独学長会議『日独における高等教育改革―共通の課題、協力の契機』“Higher Education Reform in Japan and Germany – Common Challenges and Opportunities for Cooperation”が開催され、本学からは栗林澄夫(副学長・理事)と赤木登代(国際センター准教授)が出席した。会議には日本、ドイツの大学関係者約 170 名が参加した。

1 日目はベルリン自由大学(Freie Universität Berlin)の所有するセミナリス・キャンパス・ホテル(Seminaris Campushotel Berlin)内にある科学会議センターで開かれた。テーマ「いかにして卓越した教え、学び、研究を最善の形でサポートしうるのか」How can We Best Support Excellence in Teaching, Learning and Research? として、ドイツの 1998 年から始まる大学の構造改革の中で、現在、教育・研究がどのような形で支援されているかが簡潔に説明され、問題点や今後の展望が示された。

2 日目は場所をベルリン日独センターへ移し、ドイツ側からは「ボローニャ・プロセス(1999 年合意)」を受けた大学改革の長所・短所が提示され、日本側からは国立大学の法人化以降の大きな変化、また近年のグローバル化への取り組みなどが焦点として取り上げられ、活発な意見交換が行われた。

なお、1 日目の会議終了後には、日本と特に深い関係があるノルトライン・ヴェストファーレン州(州都デュッセルドルフ、ドイツで日本人が最も多く住む都市)のベルリン庁舎にて、高等教育の分野も含めたいっそうの協力・交流を祈念して、レセプションが開催された。



会議初日



ノルトライン・ヴェストファーレン州主催のレセプション

(2) 第5回東アジア教員養成国際シンポジウムに参加

(平成 22 年 9 月 25, 26 日、北京開催)

東アジア教員養成国際シンポジウムは、教員養成分野における諸問題について、国際的な共同研究や共同討論を通じた課題解決をめざし、2006 年度から、日・中・韓の三国において実施されてきた。

今年度は、中国・北京師範大学で平成 22 年 9 月 25 日から 26 日にかけて開催され、本学からは、長尾彰夫学長、栗林澄夫理事、城地茂教授が参加した。大会では長尾学長が「情報化社会における教員養成の発展動向と挑戦」と題して、基調講演を行われ、活発な討論が行われた。

その後、コンソーシアム加盟校の学長会議が開かれ、直面する教員養成の課題を討議、来年の開催はソウル教育大学に決まった。



北京師範大学にて

(3) 2011 International Conference on Asian Perspectives に参加

(平成 23 年 1 月 18 日、高雄開催)

本年度より姉妹校となった台湾・高雄師範大学との学術交流として、アジアの観点で教員養成を論じる 2011 International Conference on Asian Perspectives に、長尾彰夫学長、栗林

澄夫理事、城地茂教授が参加した。平成 23 年 1 月 18 日の大会では、長尾彰夫学長が、**Asian Perspectives on Teacher Education and Teacher Training** の題で基調講演を行い、具体的な実施方法について、活発な討論が交わされた。



国立高雄師範大学・戴嘉南学長と

3.国際教員研修

(1) メキシコ教員研修 （平成 22 年 11 月 8 日～11 月 13 日実施）

かつてメキシコからの教員研修生として 1 年間本学で学んだ学生からの要望で、メキシコのメキシコ・シティー近郊に位置するトルカ師範学校（Escuela Normal para Profesores de Toluca）から校長を含む 6 名の教員を対象として教員研修を実施した。研修のテーマは「日本の道徳教育」で、学校教育講座と国際センターが連携し、教職教育研究開発センターの協力も得て、独自のトレーニング・プログラムを組んだ。尚、このプログラムはメキシコ政府の助成金によるものであった。

研修プログラムは以下のとおりである。

(a) 道徳教育に関する講義・演習（授業参加を含む）：

藤永芳純教授・金光靖樹准教授（学校教育講座）担当

(b) 日本の教員養成制度に関する講義：

富田福代教授（教職教育研究開発センター）担当

(c) 日本の教育制度に関する講義：

中山あおい准教授（国際センター）担当

(d) 附属天王寺小学校にて「道徳」の授業を見学、給食体験の後、教諭との意見交換：

藤永芳純教授（学校教育講座）担当

(e) 研修成果報告：

学校教育講座、国際センター、教職教育研究開発センター 担当



附属天王寺小学校での意見交換会

4.戦略的重点経費（重点的教育研究創造推進事業）

（１）「アフガニスタン教員養成支援事業－教育を通じた国際貢献」

平成 19 年、20 年度に続いて、平成 23 年 1 月 6 日から 2 月 10 日までのおよそ 1 ヶ月間、交流協定大学であるカブール教育大学（アフガニスタン）から 2 名の大学教員、Abdul Khalil Soroush（ソルーシュ教授、物理専攻）と Nooria Raqib（ラキープ教授、化学専攻）を招聘し、自然研究講座と国際センターが連携し、第 3 回理科教員研修を実施した。指導教員として物理の分野では中田博保教授（自然研究講座）、化学は久保埜公二准教授（自然研究講座）が担当した。

研修プログラムは以下のとおりである。

(a)実験および授業参加：各指導教員と相談の上、詳細な研修プログラムを決定

研修成果報告「この研修で学んだこと、カブール教育大学でそれをどうフィードバックするのか」

(b) 大阪教育大学が受託した JICA プログラム「アフリカ英語圏サブサハラ理科授業評価改善」（2 月 3 日～26 日）に合流し、小学校（附属平野小学校、大阪市立小路小学校）での授業見学

(c) その他（日本の社会・文化に親しむために大阪・京都を訪問）



ソルーシュ教授による研修成果発表



ラキーブ教授（向かって右）による研修成果発表（左は本学に在学中のアフガニスタンからの国費留学生ナズィファ・ノールさん、通訳として研修に協力）

（２）「外国語学習支援事業－語学試験を活用した啓発・学習支援活動」

昨年度、大阪教育大学ではじめて TOEIC-IP テストを国際センターが実施した。今年度も引き続いて戦略的重点経費によるプロジェクトとして、TOEIC-IP テストを４回（2010 年 11 月 17 日、12 月 8 日、2011 年 1 月 19 日、2 月 9 日）学内で無料実施し、のべ 125 名が受験した。また、スコア・アップを目指す学生の役に立つように、公式問題集や各種参考書を取り揃え、図書館で自由に利用してもらえるコーナーの準備を進め、来年度 4 月からの運用開始を予定している。

英語力のひとつの目安として、就職活動の際に企業や教育委員会等から採用されることがますます増えてきているこのテストを、広く学生に知ってもらい、1 年生から受験し、英語学習の指標としてもっと活用してもらえるよう、今後も努力を続けたい。

また、学生に諸外国語（ドイツ語・フランス語・中国語）の検定試験受験の便宜をはかるため、各種参考書・教材を購入し、図書館で利用できるように準備を整えた。

（３）「ヨーロッパにおける高等教育改革の課題－教員養成制度からみる東アジアでの導入の可能性－」

1999 年、ヨーロッパ最古の大学があるイタリアのボローニャに、EU15 ヶ国を含む 29 カ国の教育大臣が集まり、「ヨーロッパの高等教育圏」の構築を目指して合意した。これは「ボローニャ宣言」と呼ばれ、次の 6 つの柱から成っている。

- ① ヨーロッパ内で容易に比較可能な学位システムの確立
- ② 2 サイクルの大学構造（学部 Bachelor/ 大学院 Master）
- ③ 単位互換制度（ECTS ヨーロッパ単位互換システム）の導入
- ④ ヨーロッパ全体における学生・教員の移動障害除去
- ⑤ ヨーロッパレベルでの高等教育の質保証
- ⑥ 高等教育におけるヨーロッパ次元の促進

2010 年を目標にこれらの課題を解決するプロセスは「ボローニャ・プロセス」と呼ばれ、ドイツではこれを受けて大規模な大学改革が行われた。昨年その目標年を迎えたが、現在この大学改革の功罪をめぐる言論が活発化している。

本プロジェクトでは、ドイツの事例を中心として「ボローニャ・プロセス」のもたらした成果および問題点を包括し、近年高等教育における協力関係が始まり、大きく展開しつつある東アジアでの高等教育圏の構築の可能性を検討するものである。今年度はこれをテーマとする本の出版（2012 年）を目指して、ワーキング・グループを結成し、資料収集と分析を開始した。

平成 22 年度 国際センター行事

平成 22 年度 新入生オリエンテーション・歓迎会

前期 平成 22 年 4 月 6 日（月）

後期 平成 22 年 10 月 5 日（月）

平成 22 年度前期（4 月）、後期（10 月）の入学者に対するオリエンテーションを、教養学科棟 1 階の会議室で開催しました。これは、新入生に対して留学生活や大学生活全般にわたって案内を行うもので、今年の新入生は、右表のとおり 70 名でした。

向井国際センター長の歓迎あいさつにはじまり、日本語の授業や図書館の利用方法、資格外活動、国民健康保険、奨学金に関すること等について説明を行いました。

夕方からは、指導教員や先輩留学生を交えた歓迎会が開催され、新入生の自己紹介、教員・先輩の紹介等を行いました。和やかな雰囲気の中で互いに交流し、新入生の緊張もいくらかほぐれた様子でした。

区分	前期	後期
学 部 生	20	—
大学院生	7	—
教 研 生	3	—
日 研 生	—	2
研究留学生	—	2
特別聴講学生	3	21
研 究 生	8	4
計	41	29



ワルダック・アフガニスタン教育大臣と懇談

平成 22 年 3 月 26 日（火）

訪日中のワルダック・アフガニスタン教育大臣と長尾彰夫学長が 3 月 26 日、KKR ホテル大阪で会談を行いました。

大臣は「数十年にわたる長い紛争によって、多くの学校が破壊された。学齢期の子どもの 42%が学校に行けない状況であり、教育の質も非常に低い。教育は非常に重要で、教育がなければ平和も実現しない、発展もしない、どのような分野においても繁栄しない。特に教育者には大学で教育を受けて欲しい。」と、アフガニスタンの教育の現状を訴えまし

た。長尾学長は、アフガニスタンの教育支援について引き続き協力していくことを約束し、支援に向けた率直な意見交換を行いました。



グリフィス大学クウォン・ユル教授による講演会を開催

平成 22 年 4 月 13 日（火）

本学が学術交流協定を締結しているオーストラリア・グリフィス大学のクウォン・ユル教授（経済学博士）による特別講演会を 4 月 13 日（火），事務局棟大会議室で開催しました。クウォン教授は現在グリフィス大学経営学部韓国研究講座に所属され、グローバル化の中で成長著しい韓国と東アジアの国際ビジネスに係る事例について研究されています。

当日は「国際化時代に生きる学生のビジョンと戦略」というテーマでご講演いただき、留学生を含め広く学内外から参加者が集まりました。参加者はクウォン教授の考察に熱心に耳を傾け、講演の後には活発な質疑応答が行われました。



国際センターウェブページをリニューアル

平成 22 年 5 月 10 日（月）

平成 22 年 4 月にリニューアルされた大学サイトと同じ，CMS（コンテンツマネジメントシステム）を国際センター向けにカスタマイズしてもらい，国際センターウェブページをリニューアルしました。CMS を採用したことに伴い，WEB 上で簡単に編集作業を行うことができます。

主なコンテンツとして、利用者別に「本学への留学希望の方」「本学から海外留学希望の方」「在籍している留学生の方」「卒業した留学生の方」の4メニューを用意し、「本学への留学希望の方」や「本学から海外留学希望の方」向けには、留学経験者の感想等を掲載し、多くの学生・進学希望者に興味を持ってもらえる内容となるよう工夫しました。「在籍している留学生の方」には、申請書類ファイルや留学生向けのハンドブック、Q&Aなどを掲載し、窓口対応が軽減できる内容にもなっています。

これらの内容は日本語だけでなく英語、中国語、韓国語の3言語でも作成しました。



春の新入生歓迎行事（日帰りバスツアー）奈良

ー奈良遷都 1300 年祭&信貴山のどか村ー

平成 22 年 5 月 14 日（金）

平成 22 年度前期の新入留学生歓迎バス旅行は、平城京遷都 1300 年祭で賑わう奈良平城京跡と信貴山のどか村になりました。初夏の心地よい青空のもと大学を出発した一行（留学生および留学生チューター、引率教員を含め総勢 70 名）は、朱雀門の真北約 800m に堂々とそびえる「大極殿」をはじめ、平城宮会場内の各広場を心行くまで見学しました。またこの日は午後から場所を「信貴山のどか村」に移し、いちご狩りも楽しみました。平城宮会場で心を満たし、美味しいイチゴでお腹を満たし、心身ともに満腹な一日となったことでしょう。



国立台湾師範大学（台湾）との交流協定を締結

平成 22 年 5 月 21 日（金）

本学は、国立台湾師範大学との教育及び学術交流に関する協定書及び学生交流に関する覚書を締結しました。調印式は 5 月 21 日（金）、同大学から張國恩校長を迎え、本学柏原キャンパスで行われました。

国立台湾師範大学は、台北にある大学で、教育、文、理、芸術、科学技術、運動・レジャー、国際、音楽の 8 学部 28 学科、24 の独立大学院を設置しています。日本統治時代の旧制台北高等学校（大正 11 年創立）の旧校舎を今も使っており、李登輝前総統らが学ぶなど親日的な校風があります。学部生約 7,300 名、院生約 7,500 名（博士課程を含む）、教員 759 名を擁しています。

同大学は、台湾の教員養成の中心であり、東アジア教員養成国際コンソーシアムにも参加しています。今後、ダブル・ディグリー制度の導入を含めた積極的な大学間交流が期待されます。



香港教育学院学生一行が来学

平成 22 年 5 月 31 日（月）～6 月 3 日（木）

協定校である香港教育学院の学生 12 名が 5 月 31 日（月）から 6 月 3 日（木）、本学を訪問しました。これは、日本の教育事情等を調査する学生プロジェクトの一環によるものです。

6 月 1 日（火）は、本学の英語による講義シリーズ「Liberal Arts and Science in Japan」において、本学学生に対して香港の歴史や文化・社会等についてのプレゼンテーションを行った後、小グループに分かれて、自国のアイデンティティに関するディスカッションを行いました。

6 月 2 日（水）は、本学附属幼稚園、附属平野小学校、附属平野中学校、附属高等学校平野校舎の各学校園の授業を見学し、教員との意見交換も行いました。

香港教育学院の学生たちは、今回の訪問を通じて、本学学生と交流を深めるとともに、

日本の教育制度や社会・文化についても理解を深めていました。



留学生による無料語学教室（Language Table）

第 9 回：平成 22 年 6 月 7 日（月）～ 7 月 22 日（木）

第 10 回：平成 22 年 11 月 9 日（月）～12 月 24 日（木）

本学で学ぶ留学生と日本人学生の交流促進を目的として、平成 19 年にスタートした「留学生による無料語学教室」は、今年で 4 年目を迎えました。平成 22 年度も第 9 回・10 回あわせて多数申込みがあり、計 71 名の受講生が留学生の母語をととした国際交流を楽

しました。普段授業等で言語を学ぶ受講生も、同年代の留学生ならではの現地情報や若者文化の実情に聞き入っている様子でした。どの教室も和やかな雰囲気が進められ、留学生・受講生ともに言語学習を越えた文化交流という貴重な時間を過ごせたようです。本プログラムは平成 23 年度も継続して開講予定しています。



留学生向け就職支援ガイダンスを開催

平成 22 年 6 月 9 日（水）

政府が推進する「留学生 30 万人計画」では、その骨子をなす「入口から出口まで一環した支援策」の一つとして、就職支援を積極的に推進することが打ち出されています。

本学では、留学生が日本で遜色なく就職活動ができるよう、また、少しでも就職活動への不安解消につながるよう留学生向け就職支援ガイダンスを 6 月 9 日（水）に開催しました。

ガイダンスの前半は、日経就職ナビを運営している株式会社ディスコの中川氏を講師に迎え、日本で就職活動する際に必要な知識、計画の立て方、留学生特有の問題点等について講演していただきました。

後半は、日本企業で活躍している本学卒業生 3 名を招き、就職活動体験談のパネルディスカッションを行いました。

参加した 16 名の留学生からは、「情報入手・筆記テスト・面接と難関が続き日本の就職活動は厳しいと感じるが、早くから取り組みたい。」「日本人学生と同じ土俵でうまくいくか不安だが、先輩の体験談に勇気づけられた。」「情報入手と早いスタートが大切ということがわかった。」といった感想が寄せられました。

国際センターでは、今後もキャリア支援センターと協力し、このような取り組みを継続して開催していく予定です。

今回のパネリストとしてご協力くださったのは、次の方々です。

- ・黄 霊峰氏（H20 年度卒 教養学科生活環境コース）
株式会社沖データ勤務
- ・任 剛氏（H20 年度卒 大学院教育学研究科総合基礎科学専攻）
東芝ソリューション株式会社勤務
- ・趙 婉氏（H21 年度卒 大学院教育学研究科国際文化専攻）
淀川キリスト教病院健康増進管理センター勤務



タイ理科担当教員一行が来学

平成 22 年 6 月 16 日（水）

タイの理科担当教員 31 名が、日本での研修・視察を通して最新の教育事情を学び、教育現場への効果的な導入を図ることを目的に、6 月 16 日（水）、本学附属高等学校天王寺校舎を訪問しました。

本学は、タイ王国 40 地域総合大学との交流協定を結んでおり、タイ王国大使館学生部公使参事官が本学を訪問するなど、さまざまな交流事業を行っています。

今回の訪問は、こうした経緯により同国大使館から要請を受け「タイ国地方教育機関における理科担当教員を対象とした人材育成のための日本への研修」の一環として、実施されました。

当日は、岡博昭副校長から天王寺校舎における SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）についての講義と SSH 関連の機材等の見学が行われました。研修員からは、SSH の仕組みや実施にあたっての課題などについて多数の質問がなされました。



米国ノースカロライナ大学ウィルミントン（UNCW）一行が来学

平成 22 年 6 月 21 日（月）～6 月 24 日（木）

6 月 21 日（月）、本学と協定を結ぶアメリカ合衆国ノースカロライナ大学ウィルミントン校の教員研修団（同大学学生 14 名及び引率教員 3 名）が本学柏原キャンパスを訪問しました。本訪問は同大学が実施する海外教育研修プログラムの一環で、日本の教育現場の視察を主な目的としています。一同は 6 月 21 日（月）から 6 月 24 日（木）の 4 日間、各専攻グループ（幼稚園・小学校・高校）に分かれて本学付属学校園をはじめ、公立小学校・高校の視察を行いました。視察先では授業の様子を注意深く観察し、給食や昼休み等休憩時間には児童生徒と交流を楽しんでいました。また現場教職員との意見交換では、学校視察を通して感じた日米間の教育現場の違いについて、より見識を深めるべく、熱心な質疑応答・意見交換を行いました。

国立高雄師範大学（台湾）との交流協定を締結

平成 22 年 6 月 24 日（木）

6 月 24 日（木）本学と国立高雄師範大学（台湾）は、高雄師範大学で学生交流に関する覚書を締結しました。

この覚書は、本年 4 月 20 日に締結された、教育及び学術交流に関する協定に基づくもので、学生および教職員の積極的な交流が可能となり、さらなる協力・発展が期待されます。

調印式終了後の座談会には、高雄師範大学科技学院院長をはじめ、多くの教職員の方々が出席され、大学評価、教員養成大学が抱える課題と発展的対応策、将来像などについて、積極的かつ具体的な意見交換が行われました。その後、伝統の中にも近代的で整備の行き届いた学内施設を見学しました。



国立台中教育大学（台湾）との交流協定を締結

平成 22 年 6 月 25 日（金）

国立台中教育大学（台湾）において、6 月 25 日（金）、学生交流に関する覚書の調印式が執り行われました。

この覚書は、本年 4 月 22 日に郵送により取り交わされた教育及び学術交流に関する協定に基づくもので、学生並びに教職員の積極的な交流が可能となり、さらなる協力・発展が期待されます。

調印式に先立ち行われた学長対談では、お互い学長就任前からの旧友であることから、長尾学長の執筆著書が贈呈されるとともに、日本での教員免許状更新制など教育問題の現状について話し合われました。

調印式終了後は、長尾学長による講演及び意見交換会が行われ、教員養成大学が抱える課題、教員免許更新制、教職員評価などについて、活発な意見交換が行われました。





その後、開学（1901 年）当時から今日までの貴重な資料や芸術作品を展示している資料館をはじめとする学内施設を見学しました。この資料館は、一般には公開していない特別なものです。

ソウル大学校（韓国）教育研修院関係者が来学

平成 22 年 6 月 29 日（火）

国立ソウル大学の教育研修院一行が、職業教育に関する研修を目的に、6 月 29 日（火）、本学天王寺キャンパスを訪問しました。

この一行は、大韓民国の工業・商業などの職業高校の校長・教頭および教育庁指導主事の計 44 名からなり、引率者は大韓民国教育科学技術部 LEE JIN WOO 氏、国立ソウル大学校 JEONG JIN CHUL 氏です。

当日は、実践学校教育講座 大脇康弘教授の「学校経営改革とスクールリーダー」をテーマとする講演が行われました。教育コンサルタント CHOI YOUNG HO 氏の的確な通訳によって、校長・教頭から質問や意見が次々と出され、双方にとって刺激となる有意義な時間を共有できました。



アフガニスタンの特別支援教育関係者が来学

平成 22 年 7 月 16 日（金）

JICA アフガニスタン特別支援教育教員研修事業によって、7 月 16 日（金）、同国の教師教育局学術委員・教員養成短大講師 18 名が来学しました。この研修事業は、筑波大学教育開発国際協力研究センターの中田英雄教授が統括する「JICA アフガニスタン教師教育にお

ける特別支援教育強化プロジェクト」の一環として、日本での特別支援教育の研修を通じて同国の特別支援教育を向上させることを目的に実施されたものです。

当日は、栗林理事による歓迎挨拶の後、特別支援教育講座の井坂准教授の講義が行われました。講義内容は14日・15日両日の特別支援学校や特別支援学級のある小学校の見学に基づいて、日本の特別支援教育の方法等を具体的に説明するもので、参加者は日本の特別支援教育についての理解を深めました。また、帰国後に参考とすべき事柄についても、研修員相互に活発な議論が行われました。研修員からは、訪問した特別支援学校の教育について「実の親のように、慈愛に満ちた心を持って子どもたちに接する日本の教師の姿勢に大変感銘を受けた」「個別の教育支援計画や個別の指導計画に基づく特別支援教育の大切さが理解できた」などの感想が述べられました。

なお、昼食時には学部学生や院生との交流も行われ、終始和やかな雰囲気の中で、本学での研修を終えました。



台湾・韓国・ベトナム留学フェアに参加

台湾 平成22年7月24日（土）～25日（日）

韓国 平成22年9月11日（土）～12日（日）

ベトナム 平成22年11月20日（土）～21日（日）

日本学生支援機構（JASSO）では、日本へ留学を希望している者及び進学指導者を対象に、海外主要都市で日本留学フェアを開催しています。平成22年度は「台湾（高雄・台北会場）」「韓国（釜山・ソウル会場）」「ベトナム（ハノイ・ホーチミン会場）」の3ヶ国計6会場で本学の広報活動、リクルーティングを行いました。



た。

留学フェアには日本の各大学等高等教育に関する最新の情報が一堂に会するとあって、各会場にはオープニング前から長い列ができ、開場とともに参加者は思い思いのブースへ足を運びました。

なかには4,000人を越える1日入場者数を記録した会場もあるなか、本学ブースを訪れた参加者も非常に多く、通訳を交えて3名体制で本学のPR、大学院・学部の概要説明を行い、また個々の質問に答えました。来場者は、関心ある大学の教育・研究上の特色を事前によく調べており、入試や入学後の生活面、受入れ体制等について説明を受けていました。

オープンキャンパス

平成22年7月25日（日）

今年も開催された「オープンキャンパス」で留学生向けの受験説明会を開催し、近畿圏の日本語学校等から留学生79人の参加がありました。

また、留学生には、1人1人に在籍留学生がチューターとなって、本学への進学を希望する留学生に対して大学内施設の案内や説明会の通訳補助等を行い、活躍しました。

留学生向けの全体説明会では、本学の特色や施設、行事、留学生支援についての説明の他に、私費外国人留学生試験に関する受験資格や入学試験、注意事項についての説明が行われました。その後、先輩留学生として、教養学科人間科学専攻何木蘭さんと大学院教育学研究科国際文化学科郭 華さんが本学の良さや体験談を語ってくれました。

並行して開催されていた交換留学や語学研修に興味のある日本人受験生に対しても「留学相談」を行い、盛況のうちに全日程を終了しました。

前期留学生修了証書等授与式

平成22年8月6日（金）

平成22年度前期留学生修了証書等授与式が、8月6日（金）、事務局棟4階大会議室で執り行われ、日本語・日本文化研修留学生3名および特別聴講学生20名に修了証書が授与されました。長尾学長から一人ずつ名前が呼ばれると、修了生は緊張した面持ちで証書を受け取りました。長尾学長、向井康比己国際センター長が祝辞を述べた後、ガイザ エマさん（ドイツ）、ハウ シュンジンさん（台湾）が修了生を代表してあいさつしました。

その後、大学会館1階第一食堂に会場を移し、教員および地域の国際交流団体とともに交流会を行いました。中国からの留学生リュウ イさんによる民族楽器演奏、地域国際交流

団体「シニア自然大学」の方々によるオカリナ演奏，地域国際交流団体「柏原ライオンズクラブ」の方々による箏箏（ひちりき）演奏が披露されました。続いて，修了生も所属しているアカペラサークル「サウンドスプラウト」の歌，国際交流グループによるバイオリンとピアノ演奏で，会場は大いに盛り上がりました。

最後に，国際センターの教員から記念品と花束が一人一人に手渡された後，修了生一人一人からお別れのスピーチが述べられ，本学の思い出に涙する人もいました。そして，修了生たちの前途を祝して，参列者全員で作ったアーチの花道で送り出しました。



日本文化を楽しむ会 ―プロ野球観戦―

平成 22 年 8 月 25 日（水）

留学生 20 名が今年も日本文化体験として，阪神タイガース対広島東洋カープスのプロ野球戦を京セラドーム大阪で観戦しました。地元大阪ということで，阪神の応援席から観戦しました。両チームは序盤から激しく点の取り合いを繰り返し，終わってみれば阪神が球団新記録となる 22 得点をあげる記録的大試合となりました。4 時間以上にわたる試合でしたが，高齢のラッキーセブン風船花火や満塁ホームランで湧き上がる球場の雰囲気自然と気分が高揚し，野球が身近でない留学生たちも歓声をあげて喜んでいました。暑い熱い夏の夜―留学生の心に残る日本文化がまたひとつ，増えたに違いありません。



オーボ・アカデミー大学（フィンランド）との交流協定を締結

平成 22 年 8 月 30 日（月）

本学は、フィンランドのオーボ・アカデミー大学との教育及び学術交流に関する協定書、及び学生交流に関する覚書を締結しました。調印式は行わず、8 月 30 日の署名をもって発効しました。

オーボ・アカデミー大学は、1918 年に設立され、芸術学部、理学部、経済社会学部、工学部、神学部、教育学部、社会介護科学部の 7 学部、7,941 人の学生と 1,125 人の教職員を擁し、コインブラ・グループ（ヨーロッパの研究大学連合）に参加する北欧屈指の大学です。メインキャンパスは、フィンランド南西部のトゥルク市にありますが、教育学部のあるバーサ校が主な交流先となります。また、スウェーデン語圏にあるため、フィンランドの大学ながら、スウェーデン語と英語によって授業が受けられます。オーボとは、トゥルクのスウェーデン語名称です。

同大学教育学部は、ボスニア湾に面するフィンランド西部のバーサ市にあり、かねてより本学の学生が附属学校で教育実習を行うなどの交流実績があります。協定締結を機に、より一層の交流が期待されます。



ロンドン大学ポール・ダウリング教授による講演会を開催

平成 22 年 10 月 5 日（火）

本学が学術交流協定を締結しているロンドン大学のポール・ダウリング教授（Paul Dowling）による特別講演会が 10 月 5 日（火）、柏原キャンパスで開かれました。国際センター、英語教育講座、欧米言語文化講座との共催で、教職員や学生ら約 65 人が参加しました。

ダウリング氏は、現在ロンドン大学教育研究所に所属されている著名な社会学者であり、教育現場やテキストや他のあらゆる文脈において社会学的叙述を行うための組織言語（organizational language）である「社会的活動手法（SAM：Social Activity Method）」の開発と展開を手がけられています。

今回の講演は「方法としての社会学：文化・活字・知識解析から



の脱却」というテーマで、社会学的な再構造化について多くの議論が展開されました。大相撲の幕内力士・北桜関の「塩まき」から「納豆」など日本文化に触れた後、インドでの農場で美しいサリーをまとって労働する女性を取り上げ、それをただ美しい風景と捉えるのではなく、そこには男性と女性との社会的性差別関係の存在があることを見通しました。また、日本の学校で成功した授業研究がインドネシアに導入されたものの、根づいていない状況について、インドネシアの教員は専門職ではなく官僚の一員であるという社会関係の違いが存在していることなどを指摘しました。

ダウリング氏は、他にも多くの例を示しながら、「社会学者は社会関係や社会場面の文脈を再構築することによって、これまで見ることでできなかった社会構造の深層に迫ろうとする」という、理論的には難解な内容をユーモラスに語りました。参加者は 1 時間半にわたり熱心に耳を傾け、講義の後には活発な質疑応答がありました。終了後は、生協第一食堂でレセプションが催され、和やかに交流が深まりました。

秋の新入生歓迎行事（日帰りバスツアー）神戸

タイ RU 短期留学生受入

平成 22 年 10 月 23 日（土）

平成 22 年度後期の新入留学生歓迎バス旅行として神戸・北野異人館と六甲山牧場に行きました。当日はお天気に恵まれ新入留学生 29 人を含む 71 名（留学生および留学生チューター、引率教職員を含む）でのにぎやかな旅となりました。

午前には北野異人館を散策し、午後からは六甲山牧場でアイスクリーム作り体験をしました。新入生は在校生と積極的に交流を図り、大教大の新しい一員としてスタートをきりました。

また、この旅行には、本学の協定校であるタイ国地域総合大学（タイ RU）からの短期受入留学生 8 名も参加しました。



「第5回かしわら国際交流フェスティバル」を柏原キャンパスで開催

平成22年11月3日（水）

大阪教育大学と柏原市との共催による「第5回かしわら国際交流フェスティバルー世界にふれあう喜び、ここにあります！」が11月3日（水・祝）に開催されました。今回初めて会場となった柏原キャンパスでは同日、神霜祭が開催されていたこともあり、本学留学生、学生、一般市民を合わせ600人が参加し、大勢の人で盛り上がりました。

音楽棟前メインステージでは、本学吹奏楽部によるオープニング演奏に始まり、長尾彰夫学長による挨拶の後、本学留学生によるモンゴル舞踊、歌、テコンドーショー、柏原市留学生支援団体による着物着付けなどが披露されました。また、初めての試みとして大阪府内から一般の参加者を募り、ケニア、コートジボワール、ウガンダ、モンゴルから馬頭



琴演奏、民族舞踊や歌のステージ出演がありました。初めて聞く馬頭琴の音色や華やかな民族衣装に、観客は目を奪われていました。世界の食卓・フードゾーンでは、本学留学生が水餃子(中国)、茶葉卵(中国)、トッポッキ(韓国)、シュルボ（タジキスタン）、タピオカミルクティー(台湾)、ラップ(タイ)、ポークバーガー(アメリカ)といった6カ国から7種類の料理を提供しました。会場にはモンゴルのゲル(移動式住居)を設置し、モンゴル茶を振舞いながら母国の文化、暮らしについて紹介をしました。

フェスティバル最後には、本学のアカペラサークルのサウンド・スプラウトと参加者全員で“*We are the world*”を合唱しました。

市民の方々と留学生がふれあい、世界の文化を身近に感じる一日となりました。

この行事は、大阪教育大学と柏原市のさらなる国際化を推進するため、本学留学生と市民との交流を図り、異文化理解、国際理解に寄与することを目的としており、来年度も開催する予定です。



柏原市民に講演 ―異文化の暮らしを学習しよう―

平成 22 年 11 月 7 日（日）

本講演は、異文化学習の場として毎年柏原市立フローラルセンターで開催されています。昨年度に引き続き、今年度も是非本学留学生の母国紹介を、というお声をいただき、現在教員研修留学生として本学に在籍するフィリピン出身留学生セシリア・ヴァレンズエラさんが母国文化について発表しました。



母国でも既に小学校教員として働いているセシリアさんは、緊張した面持ちながら、異文化学習に意欲的な受講者の皆様に前に、普段私達があまり知ることのできないフィリピンの教育や文化について丁寧に説明していました。また、小学校の美術の時間に教えてい



る「切り絵」を紹介し、受講生の皆様にも体験していただきました。「切り絵は楽しく童心に帰った気持ちでした」などの感想が寄せられました。柏原市民の皆様が講座をととして異国の生活習慣や文化背景の違いを学び、多文化共生社会への理解促進を目的として始まった本講座。セシリアさん自身にとっても母国文化を再確認、再認識する貴重な機会だったことでしょう。

■

メキシコ教員の受入

平成 22 年 11 月 8 日（月）～11 月 12 日（火）

メキシコからの教員研修生として 1 年間本学で学んだ元留学生からの要望で、メキシコのメキシコ・シティー近郊に位置するトルカ師範学校（Escuela Normal para Profesores de Toluca）から校長を含む 6 名の教員を対象として教員研修を実施しました。

研修のテーマは「日本の道德教育」で、学校教育講座と国際センターが連携し、教職教育研究開発センターの協力も得て、独自のトレーニング・プログラムが組まれました。このプログラムはメキシコ政府の助成金により行われ、講義だけでなく演習や学校訪問など日本の教員養成についてさまざまな角度から学べるよう工夫されました。



JICA 研修員受入事業 平成 22 年度集団研修

「教員養成課程における教育改善方法の検討（仏語圏アフリカ）コース」を実施

平成 22 年 11 月 22 日（月）

平成 22 年 11 月 22 日から 12 月 17 日にかけて JICA(独立行政法人国際協力機構)研修受入事業の平成 22 年度集団研修「教員養成課程における教育改善方法の検討(仏語圏アフリカ)コース」を実施した。

この事業は、国際貢献の一環として実施しているもので、教員養成課程改善のための方策を検討し、初等教育の質向上を図るため、仏語圏アフリカ(ベナン、ブルキナファソ、ルワンダ、セネガル)から現職教員等 10 名が研修員として来日した。

本研修では、日本の初等教育の現状を理解するため、講義、授業見学のほか、小学校、教育委員会、教育センター、識字日本語センターなどを視察した。特に広島平和記念資料館では被爆体験講話を受講し、平和教育についても深く考える機会になった。研修員は、この研修の成果を踏まえ、作成した自国でのアクションプランを発表した。

閉講式では、研修員の代表が、研修の感想や今後の意気込みを語り、本学や JICA に対し謝辞を述べた。



ソウル大学校（韓国）教育研修院関係者が柏原キャンパスを訪問

平成 22 年 11 月 29 日（月）

国立ソウル大学の教育研修院一行が 11 月 29 日（月），本学柏原キャンパスを訪問し，講演会を開催しました。

この一行は，職業教育に関する日本研修を目的とした研修団で，大韓民国の工業，商業などの職業高校の校長・教頭，教育庁指導主事ら 43 名で構成されています。同様の講演会は，6 月 30 日にも天王寺キャンパスで開催されており，研修団から高い評価を得て，今回が 2 度目の本学訪問，講演会の開催となりました。

当日は，本学の裴光雄准教授（実践学校教育講座）の進行により，栗林澄夫理事・副学長の歓迎の挨拶の後，研修団代表の国立ソウル大学教授 JEONG, JIN CHUL 氏の挨拶が行われ，続いて，大脇康弘教授（実践学校教育講座）の「学校経営改革とスクールリーダーの役割」と題する講演が行われました。講演後は，校長・教頭から質問や意見が次々として出され，活発な意見交換の場となりました。



留学生後援会等から留学生に奨学金が授与

平成 22 年 12 月 8 日（水）

大阪教育大学留学生後援会奨学金等贈呈式が 12 月 8 日（水），柏原キャンパスで行われ，私費外国人留学生に奨学金が授与されました。

留学生代表として挨拶した学部 1 回生の田雪(デンセツ)さん（中国）からは，「この奨学金のおかげで両親にかけている負担を軽減させることができうれしく思います。景気の悪い現在，留学生に対する支援をなくすことなく，常に全力で支援してくださっていることに各団体の皆さまには感謝するばかりです。今後はより一層学業に励んで参りたいと思っています。ありがとうございました」とお礼の言葉が述べられました。

留学生後援会は，留学生への経済的支援，地域との国際交流の促進を目的として，地域

の支援団体及び本学教職員等により構成された組織で、平成 15 年度から毎年、留学生に対し奨学金を授与しています。今年度は、寄付団体名を冠した奨学金 4 人、留学生後援会 6 人、大阪柏原ロータリークラブ教育支援金 2 人の計 12 人に奨学金を授与しました。

留学生後援会では、今後もこの制度の拡充をめざし支援の輪を広げていくことにしています。

奨学金等提供団体

- ・国際ソロプチミスト大阪ー柏原
- ・柏原ライオンズクラブ
- ・大阪柏原ロータリークラブ
- ・大阪教育大学生協
- ・大阪教育大学留学生後援会



門松づくり シニア CITY カレッジ主催

平成 22 年 12 月 22 日（水）

シニア自然大学校の皆さまの主催で「門松作り」をしました。留学生 21 名・アシスタントとして国際交流グループ所属の日本人学生 4 名の計 25 名が参加しました。日本のお正月の伝統飾りである門松作りに挑戦した留学生たちは苦戦しながらもアドバイスを受けながらなんとか作り上げていました。なかでも寮生たちは、各部屋の扉の前に自分で作った門松を飾り、日本で新しい年を迎える準備を整えることができました。



門松作りを楽しむ留学生たち



シニア自然大学校の皆さまと記念写真

「アフガニスタン教員養成支援事業－教育を通じた国際貢献」

アフガニスタン教員の受入

平成 23 年 1 月 6 日（木）～2 月 10 日（木）

平成 23 年 1 月 6 日から 2 月 10 日までのおよそ 1 ヶ月間，協定校であるカブール教育大学（アフガニスタン）から大学教員の Abdul Khalil Soroush 氏（物理専攻）と Nooria Raqib 氏（化学専攻）の 2 名を受け入れ，自然研究講座の中田博保教授（物理）と久保埜公二准教授（化学）の研究指導のもと，国際センターとの連携により理科教員研修が実施されました。

研修員は，この研修期間中に本学で開始された JICA 研修「英語圏サブサハラアフリカ理科授業評価改善」に合流し，講義や小学校での授業観察にも参加しました。研修の終盤には報告会を行い，研修員からこの研修で学んだことや，カブール教育大学へのフィードバックについて，発表が行われました。



Abdul Khalil Soroush 氏



Nooria Raqib 氏（右）

Nazifa Noor さん（左：本学研究生）

第4回京都教育大学・大阪教育大学タイ国帰国留学生の会

平成23年1月8日（土）

京都教育大学との共催でタイ帰国留学生の会（同窓会）をタイ国バンコク・アンバサダーホテルで開催しました。

タイ国・ラジャパット地域総合大学（RU）から学生交流協定に基づき留学していたタイ留学していたタイ人学生の同窓会として毎年開催しているものです。

本学からは向井康比己国際センター長，東善和学術連携課長が出席しました。同窓生らは久しぶりに会って旧交を温めたり，懐かしい恩師と再会して近況を報告しました。



ソウル教育大学 国際インターンシップ受入

平成23年1月17日（月）

本学の交流協定締結校である国立ソウル教育大学の学部インターンシップ生，同大学院教育行政及び数学科専攻の一行が1月下旬にそれぞれ来学しました。

今回の訪問は，同大学のグローバルインターンシップというプログラムに本学が協力し，今年度初めて実施されたものです。学部インターンシップ生は2・3回生7人が1月17日（月）に柏原キャンパスに到着し，長谷川ユリ教授（国際センター），若生正和准教授（国際センター）からのオリエンテーションを受けた後，キャンパス内の宿舎（旭ヶ丘会館）で宿泊しながら，1月18日（火）から28日（金）までの約2週間，3組に分かれ，東大阪市の3つの小学校（荒川小学校，長堂小学校，太平寺小学校）で日本の教育実習を体験しました。

また，1月19日（水）には教育行政専攻の教授（2人）・院生（12人）



が、附属平野小学校を訪れ、園田雅春校長を表敬訪問、続いて1・2限の授業を見学し、その後、梶原博副校長の取り運びで活発な懇談、意見交換会が行われました。一行のなかには外国の小学校を30校以上訪問した院生（現職小学校教員）がいましたが、今回の訪問が最も印象深かったと感想を述べていました。

さらに、1月24日（月）には、同大学院数学科専攻の教授（4人）・院生（16人）が本学柏原キャンパスを訪れ、長谷川教授による本学概要説明を皮切りに、大学運営や数学教育などに関して、若生准教授、藤井正俊教授（実践学校教育講座）、種村雅子教授（実践学校教育講座）、宇野勝博教授（数理科学講座）、真野祐輔講師（数学教育講座）が参加し、活発な質疑応答が行われました。

今日、本学とソウル教育大学との間で、多様な分野にて、有意義で実質的な交流が進展しています。

平成22年度後期留学生修了証書授与式を挙行

平成23年2月8日

平成22年度後期留学生修了証書授与式が、2月8日（火）、事務局棟4階大会議室で執り行われ、教員研修留学生3名・研究留学生1名・特別聴講学生3名に修了証書が授与されました。長尾学長から一人ずつ名前が呼ばれると、修了生は緊張した面持ちで証書を受け取りました。長尾学長、向井国際センター長が祝辞を述べた後、教員研修留学生ビガヤン マリセル グアニソさん（マレーシア）、研究留学生シュウ ユウエンさん（中国）、特別聴講学生リュウ ウケツさん（中国）が修了生を代表してあいさつしました。

その後、大学会館1階第一食堂に会場を移し、地域の国際交流団体および教員とともに交流会を行いました。本学協定校フランス・リヨン第三大学からの留学生シリエルさん、サマンタさん、ミリアムさんによる歌、「いちやりばちょーで一エイサー隊」による沖縄エイサーが披露され、会場は大いに盛り上がりました。

最後に、国際センターの教員から記念品と花束が一人一人に手渡された後、修了生一人一人からお別れのスピーチが述べられ、本学の思い出に涙する人もいました。そして、修了生たちの前途を祝して、参列者全員で作ったアーチの花道で送り出しました。



日本文化を楽しむ会着物体験 グローバル香芝主催

平成 23 年 2 月 12 日（土）

前日からの雪が街を白く染めるなか、日本文化体験に胸躍らせる留学生 20 名が、グローバル香芝様主催の「日本文化を楽しむ会～着物と茶道体験～」に出かけました。

女子留学生 15 名、男子留学生 5 名はまず振袖と羽織袴に身を包み、後ろ姿を鏡に映して豪華な帯結びに感嘆したり、友人と写真を撮ったり大はしゃぎでした。

その後着物姿のまま茶道体験にご案内いただき、伝統的な和菓子とお抹茶を堪能しました。

賑やかなお昼時間を過ごし、午後からの日本文化は俳句でした。想いを 17 文字にしたための、日本語を母語にする者にとっても容易ではありません。が、現在日本語学習中の留学生たちは、題材の草花や外の景色に目をやりながら、和気藹々と俳句づくりを楽しんでいる様子でした。



留学生日本文化体験研修 北海道

平成 23 年 2 月 16 日（水）～2 月 18 日（金）

前年の「沖縄」に引き続き、今年は「北海道」への研修が実現しました。事前学習として北海道について歴史・文化・経済・自然などから一つテーマを選びレポートを提出し、万全の態勢で出発日を迎えました。

朝早い集合にもかかわらず誰一人遅れることなく、いざ真冬の北海道へ。

約 2 時間のフライトで千歳空港へ到着。多くの留学生の第一声は「さむいっ！」でした。まずは函館へ。明治館・金森レンガ倉庫群の見学などの後、一日目の宿「湯の川温泉」へ。

日本の温泉をはじめて体験した留学生からは、「初めての温泉、初めての浴衣、初めての布団、すごかった！」との声がありました。



2日目の朝食は朝市で海鮮丼。朝から北の味覚を満喫し、次の訪問地小樽へ移動しました。小樽では運河などを鑑賞し、自由散策の時間となりました。その後足早に札幌へと移動し、北海道庁旧本庁舎を見学しました。旧本庁舎では、北海道の歴史やアイヌ民族の文化や風習などを学びました。

3日目は、日本最北の動物園・旭山動物園へ。いきいきとした動物の生態を見学した後、昼食はみんなでラーメンを食べ、一向は帰路につきました。

駆け足の3日間でしたが、本土とは違った北海道の自然や伝統文化に触れることができ、日本の地域性の豊かさにもふれることができた旅行でした。3月末で本学での留学を終える学生にとっては、一生の大きな思い出となる研修旅行となってくれたのではないかと思います。



旭山動物園にて

平成 22 年度国際センター運営委員会名簿

平成 22 年 10 月 1 日現在

区 分	氏 名	所 属	備 考
国際センター長	向 井 康比己	自然研究講座（兼任）	委員長
国際センター専任教員	赤 木 登 代	国際センター	
	城 地 茂	国際センター	
	中 山 あおい	国際センター	(宿舎運営)
	長谷川 ユ リ	国際センター	
	若 生 正 和	国際センター	(宿舎運営)
国際センター兼任教員 ★	加 藤 可奈衛	美術教育講座	(宿舎運営)
	小 林 和 美	社会科教育講座	
	水 野 治 久	学校教育講座	
	石 橋 紀 俊	日本・アジア言語文化講座	(宿舎運営)
	住 谷 裕 文	欧米言語文化講座（仏）	
	松 本 マスミ	欧米言語文化講座（英）	
学 長 指 名 委 員 ★	安 部 文 司	欧米言語文化講座（英）	
	東 善 和	学術連携課長	

★任期：平成 20 年 7 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日

平成 22 年度留学生宿舎運営会議名簿

氏 名	所 属	備 考
中 山 あおい	国際センター	委員長
若 生 正 和	国際センター	
加 藤 可奈衛	美術教育講座	
石 橋 紀 俊	日本・アジア言語文化講座	

任期：平成 20 年 7 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日

国際交流委員会委員名簿

	氏 名	備 考
副学長	栗 林 澄 夫	委員長
国際センター長	向 井 康比己	副委員長
国際センター 専任教員	長谷川 ユ リ	国際教育部門
国際センター 専任教員	城 地 茂	国際事業部門
国際センター 専任教員	赤 木 登 代	国際事業部門
国際センター 専任教員	中 山 あおい	国際教育部門
国際センター 専任教員	若 生 正 和	国際教育部門
国際センター兼任教員	松 本 マスミ	
国際センター兼任教員	水 野 治 久	
教員養成課程	吉 田 晴 世	
教員養成課程	米 川 英 樹	
教養学科	鈴 木 剛	
教養学科	中 野 知 洋	
夜間学部	裴 光 雄	
学術部学術連携課長	東 善 和	学長指名

平成 22 年度留学生推薦選考会議名簿

所 属 等	氏 名	備 考
国際センター長	向 井 康比己	自然研究講座
国際センター（国際教育）	長谷川 ユ リ	国際センター
	松 本 マスミ	欧米言語文化講座
	中 野 知 洋	日本アジア言語文化講座

平成 22 年度留学生推薦選考会議語学評価委員名簿

担当言語	氏名	所属
英 語	松 本 マスミ	欧米言語文化講座
中 国 語	中 野 知 洋	日本アジア言語文化講座
ドイツ語	赤 木 登 代	国際センター
韓 国 語	若 生 正 和	国際センター

平成 22 年度私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿

所 属 等	氏 名		備 考
国際センター長	向 井 康比己	自然研究講座	
国際センター（国際教育）	中 山 あおい	国際センター	
	吉 田 晴 代	学校教育講座	
	鈴 木 剛	教 養 学 科	

国際交流委員会ダブル・ディグリー検討専門委員会委員名簿

	氏 名	備 考
副学長	栗 林 澄 夫	委員長
国際センター長	向 井 康比己	副委員長
国際センター 専任教員	長谷川 ユ リ	国際教育部門
国際センター 専任教員	城 地 茂	国際事業部門
国際センター 兼任教員	石 橋 紀 俊	
教員養成課程	三 村 寛 一	
教養学科	松 本 マスミ	
第二部	大 脇 康 弘	
委員長指名	白 井 利 明	教務委員会
委員長指名	石 本 誠 之	学務部長
委員長指名	堺 弘 次	学術部長
委員長指名	柏 本 昌 彦	教務課長

編集後記

本学へ転勤になって、2回目の正月が過ぎました。この間に、ほぼ毎月1回、海外出張をさせて頂きました。専攻した言語が中国語という事もあって、中国、台湾が多いのですが、北欧出張もあって、スウェーデンとフィンランドにも行きました。元々は日本の科学技術史が専門ですので、日本だけにガラパゴスして、海外へ行くとは思いませんでした。学生時代は、国際活動が職責になるとは、想像だにしませんでした。まして、北欧まで仕事で行くとは思ってもみませんでした。

まがりなりにも何とか糊口をしのいでいるのは、高校から学部時代にかけての大きな遠回りのお陰ではないかと思っています。高校卒業からの話は、また別の機会にするとして、今年は、高校のことを書こうと思います。私の母校は、大阪教育大学に毎年2桁の入学生を送っていますので、まあ、進学校の端くれなのですが、大学入試準備を全くしませんでした。文系の生徒にも、微分方程式を教えていました。また、理系の生徒にも古文はもちろん、漢文まで履修させていました。しかも、『史記』の英訳文を中国語（漢文）に直せ、とかいう問題が定期試験に出題されたものでした。こんな変な経験でしたが、もしかすると、今の仕事に少しは役立っているのかもしれません。今の学生さんには、直接、関係あることしかないというような風潮があるようですが、学生の中に、色々回り道もして、沢山の事を学んでもらえたらと思います。

末筆になりましたが、本誌に投稿していただいた先生方、留学生および学生の皆さんに感謝いたします。

次号原稿募集

本年報は、留学生教育や国際交流についての多様な考え方や意見を幅広く取り上げていくために企画したものです。次の要領で投稿を募集いたします。お問い合わせは国際センターまで。

枚 数：論 文 10 枚程度（ワード、40 字×34 行）

その他 2 枚～7 枚

（原稿の入ったディスク等と印字した原稿を頂ければ幸いです。）

2011 年 3 月 07 日 印刷

2011 年 3 月 31 日 発行

大阪教育大学国際センター年報 第 17 号

Bulletin of Osaka Kyoiku University

International Center No.17

編集兼発行者

大阪教育大学国際センター

〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1

電話 (072)978-3299, 3300

印刷所

カ ツ ヤ マ 印 刷

〒543-0044 大阪市天王寺区国分町 5-1

電話 (06)6771-1000